富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)

吉倉B遺跡

1994年

富山県埋蔵文化財センター

富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)

吉倉B遺跡

1994年

富山県埋蔵文化財センター

序

富山県の中央を貫流する神通川の右岸に総面積約46haの富山県総合運動公園が計画されたのは、昭和62年のことでありました。その後分布調査を行ない、新たに10か所の埋蔵文化財包蔵地を確認し、工事計画にかかる9遺跡の調査を平成4年度までに終了しました。これまでの発掘調査では、古代の掘立柱建物10棟、竪穴住居92棟、中世の掘立柱建物119棟が発見されており、県内では数少ない古代・中世の集落跡の調査例です。

これらの集落は、この地域一帯を開墾するために古代のほぼ同時代に作られ、中世の前半で衰退していくという共通した推移をたどります。

吉倉B遺跡は、昨年度から継続して調査を進めてまいりました。中世では、集落の形成から終息にいたる変遷をたどることができる貴重な遺跡として注目されています。また、古代の掘立柱建物群は、その建物配置や出土遺物からこの辺りの集落の中心的な存在で、地位をもった人たちの居住地であったと考えられます。この成果は、吉倉B遺跡の発掘対象地の約半分を調査した中間報告的なものですが、これまでの調査成果が古代・中世の集落構造の解明や、地域の歴史研究に役立てば幸いです。

文末になりましたが、調査にあたって御協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

富山県埋蔵文化財センター
所長　桃野真晃

例　言

1　本書は、平成５年度に富山県総合運動公園建設に先立ち実施した、富山県富山市吉倉Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、富山県土木部総合運動公園建設室の依頼を受けて、富山県教育委員会富山県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査期間・面積は、次のとおりである。

平成５年６月１日～12月16日（延 113日間）　7,340㎡

4　調査及び遺物整理並びに報告書担当者は、次のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター　調査課長　狩野睦　主任　酒井重洋・久々忠義　文化財保護主事　境洋子・越前慶祐

5　資料の整理・本書の編集・執筆は、所員の協力を得て各調査担当者が行い個々の文責は文末に記した。

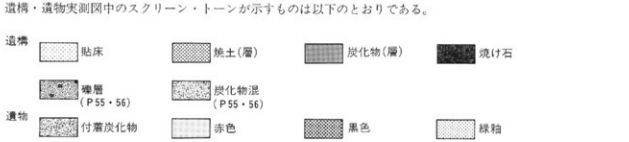
6　遺構は、平成４年度の調査分に続く一連の番号とし、本書では以下の記号を用いた。

SB：掘立柱建物、SI：竪穴住居、SD：溝、SK：土坑、SE：井戸、SA：柵、SF：畠、P：穴・柱穴、SX：不明遺構　遺跡の略号は、TYK-B3とした。

7　土層の色名については『標準土色帖』に基づいて決定し、現地において色相・明度・彩度を記録したが、本書中ではこれに対応する色名で表した。また、土性については『標準土色帖』を参考にして、現地では土性の略号により記録を行ない、本書中では次のように表現した。HC：粘質土、SC・SCL：粘質砂土、SiC・SiCL：粘質シルト　LS：砂質土、SL・L：シルト質砂土、SiL：砂質シルト、S：砂土

8　遺物の実測図の縮尺は、土器・陶磁器：1/4、金属器：1/3、石器：1/4を基本として、異なるものは図中に縮尺を示した。なお、包含層出土の遺物に関しては各図の右下に出土地区を記した。例：（63・72）→X63・Y72地区

9　遺構・遺物実測図中のスクリーン・トーンが示すものは以下のとおりである。



10　本書で使用した方位は真北で、標高は海抜である。

11　出土品及び記録資料などは、富山県埋蔵文化財センターが保管している。

12　発掘調査及び資料整理並びに本書の作成にあたって、下記の各氏から様々な援助をいただいた。記して、深甚なる謝意を表したい。（以下敬称略、アイウエオ順）

調査指導・協力他

上野幸夫・宇野隆夫・垣内光次郎・鎌田元一・桑原陽一・高橋保・田中靖・寺崎裕助・西井龍儀・野末浩之・古川知明・宮田進一

資料整理他

安部利子・石灰光子・坂井夢都子・菅野静子・杉岡由美子・古井美智子・堀田るみ子・餅田千津子・吉崎尚美

目　次

I　位置と環境……1
II　調査に至る経緯……2
III　調査の概要……4
IV　遺構……6
1　古代の遺構……6
(1)　古代の概要……6
(2)　竪穴住居……6
(3)　掘立柱建物……10
A　上層掘立柱建物群……10
B　下層掘立柱建物群……11
(4)　その他の遺構……12
A　配石……12
B　土坑・穴……12
C　溝……12
D　畠……13
E　不明遺構……13
2　中世の遺構……14
(1)　中世の概要……14
(2)　掘立柱建物……14
(3)　その他の遺構……15
A　土坑……15
B　穴……16
C　井戸……16
D　溝……16
V　遺物……17
1　古代……17
(1)　竪穴住居……19
(2)　配石……21
(3)　溝……21
(4)　土坑他……22
(5)　畠……22
(6)　包含層の遺物……22
(7)　金属製品……23
(8)　石器……23
2　中・近世……24
VI　まとめ……25
(1)　古代遺構の変遷……25
(2)　墨書土器について……27
(3)　土錘について……29
(4)　古代遺物の分布……32
(5)　中世遺物の分布と器種組成……34
(6)　中世遺構の変遷……35
引用・参考文献……36
報告書抄録……71

図　版　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第2図　総合運動公園内遺跡群……3
第3図　基本層序……4
第4図　発掘区区割図……5
第5図　須恵器杯蓋・杯、土師器甕・鍋・椀分類表…18
第6図　土師質土器分類表……24
第7図　吉合B遺跡古代遺構の時期別配置……26
第8図　墨書土器一覧・分布図……28
第9図　土錘分類・分布図……30
第10図　土錘分析グラフ……30
第11図　古代遺物個体別分布図……33
第12図　須恵器甕個体別分布図……33
第13図　中・近世土器分布図……34
第14図　吉合B遺跡中世掘立柱建物の時期別配置……35
第15図　遺構平面図（古代竪穴住居）……37
第16図　遺構平面図（古代竪穴住居）……38
第17図　遺構平面図（古代竪穴住居）……39
第18図　遺構平面図（古代竪穴住居）……40
第19図　遺構平面図（古代竪穴住居）……41
第20図　遺構平面図（古代竪穴住居）……42
第21図　遺構平面図（古代竪穴住居）……43
第22図　遺構平面図（古代竪穴住居・土坑・穴・SX）…44
第23図　遺構平面図（古代竪穴住居）……45
第24図　遺構平面図（古代・中世掘立柱建物、中世溝）46
第25図　遺構平面図（中世）……47
第26図　遺構平面図（古代上層西側）……48
第27図　遺構平面図（古代下層西側）……50
第28図　遺構平面図（古代上層東側）……52
第29図　掘立柱建物柱穴土層図……54
第30図　掘立柱建物柱穴土層図……55
第31図　遺構平面図（中世土坑・穴・井戸）……56
第32図　古代の土器(1)……57
第33図　古代の土器(2)……58
第34図　古代の土器(3)……59
第35図　古代の土器(4)……60
第36図　古代の土器(5)……61
第37図　古代の土器(6)……62
第38図　古代の土器(7)……63
第39図　古代の土器(8)……64
第40図　古代の土器(9)……65
第41図　古代の土器(10)……66
第42図　古代の土器(11)……67
第43図　古代の土器(12)……68
第44図　中世の土器……69
第45図　金属製品・石器……70

表

表1　既往調査結果一覧
表2　古代掘立柱建物一覧……10
表3　中世掘立柱建物一覧……14
表4　墨書土器一覧……28
表5　土錘一覧……31
表6　吉合B遺跡竪穴住居一覧……45

年度	遺跡	所在地	時代	種類	主な遺構と遺物
	任海遺跡	富山市任海	平安・中世	集落	穴・溝、須恵器・青白磁（一部本調査）
	任海砂田遺跡	富山市任海砂田	奈良・平安	集落	土師器・須恵器
	任海鎌倉遺跡	宮山市任海鎌倉	平安・中世	集落	穴・溝、土師器・須恵器・珠洲・越前
昭和63	栗山椿原遺跡	富山市栗山椿原	平安・中世	集落	穴・溝、土師器・須恵器・珠洲・越中瀬戸・羽口・鉄製品・土錘・墨書土器
試掘	南中田A遺跡	富山市南中田	平安・中世・近世	集落	穴・溝、土師器・須恵器・土師質土器・鉄製器（一部本調査）
	南中田B遺跡	宮山市南中田	平安・中世	集落	穴・溝、土師器・須恵器・珠洲・青磁
	南中田C遺跡	富山市南中田	平安	集落	溝、土師器・須恵器・土錘
	南中田D遺跡	富山市南中田	奈良・平安・中世	集落	穴・溝、土師器・須恵器・珠洲・瀬戸・越前・越中瀬戸・土錘・鉄製品・墨書土器
	古倉A遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落	穴、土師器・須恵器・土師質土器
	吉倉B遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落	穴・溝、須恵器・土師器・土師質土器・珠洲、越中瀬戸・土錘・墨書土器
	栗山椿原遺跡	富山市栗山椿原	平安・中世	集落	掘立柱建物12（古代11）・土坑500・溝20・道状遺構、土師器・須恵器・珠洲・風字硯・墨書土器・鉄製品・土錘
平成元	任海鎌倉遺跡	富山市任海鎌倉	奈良・平安・中世	集落	掘立柱建物11・土坑50・溝4・礎石状遺構6、土師器・須恵器・土師質土器・珠洲・八尾・白磁・鉄製品・鉄滓
本調査	南中田A遺跡	富山市南中田	奈良・平安・中世	集落	掘立柱建物7・土坑50・溝7・道跡・川跡、土師器・須恵器・土師質土器・珠洲・鉄製品・鉄滓
	南中田C遺跡	富山市南中田	平安・中世	集落	掘立柱建物1・土坑38・溝1・土器廃棄場、土師器・須恵器・土師質土器・珠洲・八尾
平成2 本調査	南中田D遺跡	富山市南中田	奈良・平安・中世・近世	集落	竪穴住居61・土坑3,000・掘立柱建物44・溝270・土師器・須恵器・緑釉・土師質土器・珠洲・越前・八尾・瀬戸・青磁・白磁・青白磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・墨書土器・土錘・近世陶磁器・鉄製品・鉄滓・銅銭
平成3 本調査	古倉B遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落	竪穴住居2・掘立柱建物4・土坑16・溝4、須恵器・土師器・緑釉・墨書土器・中近世陶磁器 ※　遺跡北側、道路予定地の調査
平成4 本調査	任海遺跡	富山市任海	平安・中世	集落	溝3・土坑1、土師器・須恵器・土師質土器・珠洲
	吉倉A遺跡	富山市吉倉	奈良・平安・中世	集落	竪穴住居4・土坑161・溝14・掘立柱建物14・集石2、須恵器・土師器・土師質土器・珠洲・八尾・越前・青磁・白磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・土錘・鉄製品・銅銭・鉄滓
	吉倉B遺跡	宮山市吉倉	奈良・平安・中世	集落	竪穴住居25・土坑70・溝90・掘立柱建物37（古代1）・井戸1、須恵器・土師器・土師質土器・珠洲、八尾・越前・青磁・白磁・青白磁・瀬戸美濃・山茶椀・越中瀬戸・土錘・鉄製品・鉄滓・墨書土器、近世陶磁器
平成5 本調査	吉倉B遺跡	富山市吉倉	奈良・平安・中世	集落	竪穴住居23・土坑150・溝50・掘立柱建物20（古代13）・井戸1・畠、須恵器・土師器・土師質土器・珠洲・八尾・越前・青磁・白磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・土錘・鉄製品・鉄滓・緑釉・墨書土器・円面硯・近世陶磁器

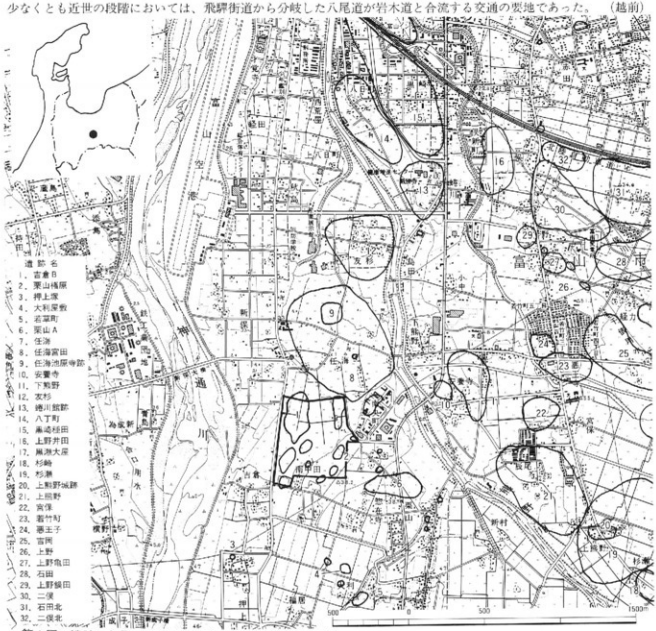
表1　既往調査結果一覧

Ⅰ　位置と環境

吉倉B遺跡は、富山市南部の吉倉地内に位置し、現在建設中の富山県総合運動公園敷地内の中央北寄りにある。すぐ南には南中田D遺跡・任海縫倉遺跡が、東側には任海遺跡がある。

このあたりの標高は、35m前後を測り、西方約500mに流れる神通川と、東方約800mに流れる熊野川によって形成された扇状地上に位置し、公園用地となる前は谷が水田、微高地上は畑として利用されていた。航空写真を見ると、神通川によって形成された南西から北東に伸びる細長い谷と微高地が幾つも確認できる。また、耕土直下には、かつての流路に沿って堆積した礫が幾筋にも見られる。微高地上には、当遺跡をはじめ奈良・平安時代以降の遺跡が点々と分布する。また、当遺跡の南西約500mには、神通川によって形成された大沢野段丘があり、さらに南には笹津段丘・舟倉野段丘がひかえている。これらの段丘上には古墳時代以前の遺跡が点在する。

当地域は、『富山県史通史編Ⅰ』によると、寿永3年（1184）の後白川法皇の院宣を奉じて源頼朝が沙汰させた「加茂社領新保御厨」の比定地のひとつとされている［富山県1976］。また、すぐ隣の任海の地名は、室町期の文献にみられ、少なくとも近世の段階においては、飛騨街道から分岐した八尾道が岩木道と合流する交通の要地であった。（越前）



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

II　調査に至る経緯（表1・第2図）

はじめに　吉倉B遺跡外9遺跡を発掘調査する契機となった富山県総合運動公園は、県民総合計画にもり込まれた「日本一の健康・スポーツ県」をめざす施策の柱として、また西暦2000年（平成12年）に開催する国民体育大会のメイン会場として同公園建設の基本計画が作成され、昭和61年12月には富山市南部の新保地区に建設を決定した。その規模は、約46haに及ぶものであった。また、平成6年には陸上競技場など一部の施設を完成し、全国高校総体の開催をめざして計画が進められている。

昭和62年度　同公園の建設位置の決定に伴い、計画区域内の埋蔵文化財の所在状況を把握する必要が生じたため、富山県埋蔵文化財センターと富山市教育委員会は、同地内の分布調査を同年5～6月に実施した。その結果、6か所で奈良～平安・中世の遺跡を確認した［富山市教委1988］。この成果を基に、富山県土木部都市計画課・富山県埋蔵文化財センター・富山市教育委員会の三者が協議を行い、埋蔵文化財の遺存状況及び範囲を確認し、保護措置を講じるための試掘調査を実施することとなった。

昭和63年度　試掘調査は、富山市教育委員会が主体となり、同年6月20日から10月7日まで、遺跡が確認された6か所を対象として実施した。調査は、対象地区に試掘トレンチ255か所、延15,198㎡を調査し、10か所で古代から中世の集落跡を確認した。工事地内に含まれる遺跡の総面積は、79,350㎡であった。この結果を基に三者で協議を行い、構造物・道路などの建設予定地は本調査を実施し、その他の緑地などの部分は、遺跡を破壊せずに保護することとして合意した。その後、同年12月に用排水路の付替工事が計画され、工事にかかる南中田A遺跡・仕海遺跡の一部（259㎡）で富山市教育委員会が本調査を実施した［富山市教委1989］。

平成元年度　試掘調査により遺跡の範囲があきらかとなり、工事計画に先行するかたちで本調査を実施することとなった。調査は、富山県土木部（総合運動公園建設準備室）の依頼を受けて富山県埋蔵文化財センターが行なうこととなり、栗山楮原遺跡・仕海遺跡・南中田A遺跡・南中田C遺跡の4遺跡（当初遺跡範囲7,680㎡）を対象として実施した。調査は、同年6月3日～11月4日にわたって行ない、総調査面積は、8,800㎡であった。遺物は、奈良・平安時代・中世のものが出土したが、遺構は、中世の掘立柱建物・土坑が主体を占め、古代の遺構は少ない［富山県埋文センター1990］。

平成2年度　陸上競技場の建設位置である南中田D遺跡（当初遺跡範囲11,750㎡）を主として調査要望面積約20,000㎡を提示されたが、協議の結果当センターでの実績を基に調査員4名で14,000㎡を目安に調査することとなった。しかし、本調査を進めると、中世と古代の遺構面が約20cmの間層を挟み検出され、二面の文化層をもつ遺跡であることがあきらかとなった。調査は、同年5月16日～平成3年1月31日にわたって行い、総調査面積は結果的に拡張区を含めて14,000㎡となった。

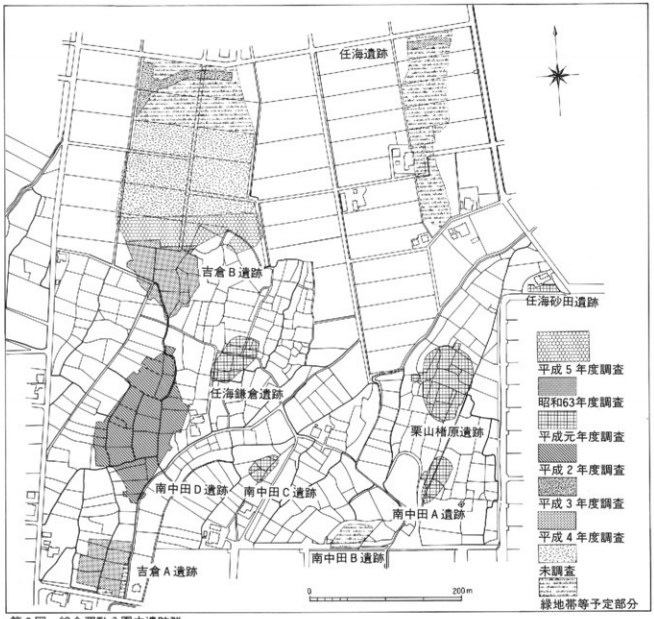
平成3年度　公園街路にかかる吉倉B遺跡の北側の発掘調査を実施した。吉倉B遺跡は、同公園内遺跡群の中でも最も広範な広がりをもつ遺跡であり、このうち発掘調査を行なったのは遺跡北側の工事にかかる部分である。調査は、同年10月3日～12月27日にわたって行い、総調査面積は2,056㎡となった。この調査範囲においても古代と中世の二時期の遺構が確認された。

平成4年度　陸上競技場北側のスーパー・ドームにかかる吉倉B遺跡、駐車場にかかる吉倉A遺跡、公園街路にかかる仕海遺跡の一部を発掘調査をすることとなった。これら3遺跡のうち吉倉B遺跡に関しては、工事にかかる面積が広く、また南で接する南中田D遺跡において古代と中世の二面の文化層が確認されたことから、順次南側から発掘調査を進めていくこととなった。各遺跡の調査期間と総調査面積は、吉倉A遺跡が同年6月1日～11月11日で、3,400

㎡、任海遺跡が同年７月27日～９月１日で600㎡、吉倉Ｂ遺跡が同年５月27日～12月16日で、6,282㎡であった。調査の結果、吉倉Ａ遺跡では、中世の掘立柱建物や土坑等と古代の竪穴住居等を確認することができ、ここでも中世と古代の二面の文化層を持つことが分かった。なお、試掘調査でも指摘されていたとおり、遺構が調査範囲の南端に密に検出できることから遺跡はさらに南側に広がっているであろうことを確認をした。任海遺跡においては、溝を検出した。吉倉Ｂ遺跡では、多くの中世の掘立柱建物や土坑等と古代の竪穴住居と掘立柱建物１棟を確認することができた。

以上のように、同公園内の少なくとも西側の遺跡においては中世と古代の２面の文化層を持つことは、確実であり、今後の調査においてもこの点に留意する必要があると言える。また、次章でも記述するが、吉倉Ｂ遺跡の今年度の調査区においては古代の遺構の検出面がさらに新旧の二面存在している。

さらに、古代の掘立柱建物や、緑釉陶器など高級品の出土がみられ、同遺跡の北地区には周辺遺跡の中心的な建物群が存在することが予想され、今後この点も考慮していかなければならない。　（境）



第２図　総合運動公園内遺跡群

Ⅲ　調査の概要

1　調査の経緯

吉倉B遺跡は、富山県総合運動公園内に設置予定の施設のひとつであるスーパー・ドームにかかる遺跡で、同公園内では最も広範な遺跡である。昭和62年度に実施した分布調査の段階から集中的に土師器・須恵器が採集できたところにあたる。その翌年度には遺跡範囲の確認のための試掘調査を行ない、その結果から同公園内で最も広大な範囲をもつ遺跡であること、古代の集落遺跡と考えられること、墨書土器が出土している点が指摘されていた。

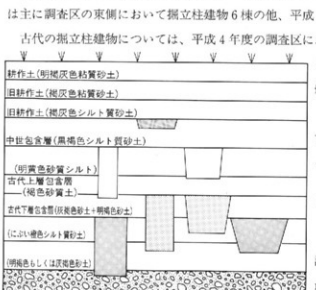
本調査は、平成４年度からの継続であり、前述したとおり南部分の約6,282㎡については調査済みであり、今年度は、引き続きその北側において発掘調査を行なうこととなった。当遺跡の南には南中田D遺跡及び吉倉A遺跡があり、いずれも古代と中世の二面の文化層を有する遺跡であったことが確認されている。また、当遺跡南部分の発掘調査においても同様に確認されていることから、文化層二面を想定した工程で調査を開始した。

平成４年度において既に表土及び中世包含層（黒褐色シルト質砂上）を除去していることから、ただちに遺構検出を行った。また、包含層掘削時に調査区東側でかなりの量の遺物の出土を確認しており、遺跡の広がりが予想されたため、範囲を決定するための試掘を行った。その結果、古代の遺構の広がりを確認できたので、当初調査予定範囲より約1,300㎡を拡張することとなった。

また、中世遺構検出時に調査区の東側においては古代の掘立柱建物を、西側拡張区においては竪穴住居、畠のサクと考えられる遺構を同時に確認し、この段階から昨年度までの様相とは異なることが予想され、調査を進めるうちに古代の文化層がさらに新旧の２面存在することが判明した。これらの古代の新旧の二層に関しては、便宜上新しいものを上層遺構、古いものを下層遺構として本書中に記載した。なお、古代の遺構は、上層においても下層においても調査区の東西両側各2,000㎡において密に立地しており、Y85～Y115の範囲においては、遺構の少ないことが目立った。

調査結果としては、古代の遺構は上層・下層を合わせて掘立柱建物が11棟、竪穴住居が23棟を検出し、中世の遺構は主に調査区の東側において掘立柱建物６棟の他、平成４年度の調査区から続く溝を検出することができた。

古代の掘立柱建物については、平成４年度の調査区においても１棟確認していたが、今年度の調査区においては、８棟の掘立柱建物が方形に配置されているのが確認され、一般の集落とは異なる要素を加えることとなった。



第３図　基本層序

なお、調査期間中平成５年７月25日（日）に中世の遺構と古代上層遺構の一部を調査し終えた段階で現地説明会を行なった。

2　調査区の区割（第４図）

調査区の区割りについては、平成４年度の調査区に続けて設定することとし、まず10m毎に基準杭を設置し、さらに２m間隔でこれを分割し、２m×２mを一区画とした。グリッドは、X軸を南北方向が真北に向かうように、Y軸をそれに対する東西方向にとり設定し、X軸は北に、Y軸は東に向かって番号を付した。各区画の番号は、北に向かって右上の杭

に付したＸＹ番号を対応させた。今年度の調査区は、図中の網目模様の部分でＸ50以北Ｘ70以南であるが、Ｘ50以北Ｘ55以南Ｙ70以西の約430㎡については、平成４年度に中世の遺構に関してのみ調査を行なったので、この部分に関しては、古代の遺構の調査のみを行なった。

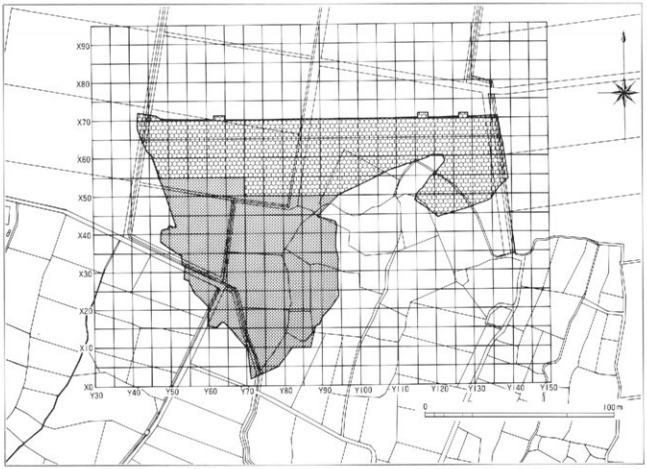
3　遺跡の基本層序（第３図）

基本層序確認のために幅40cmのあぜを調査区の各所に設定した。試掘トレンチ（200Ｔ）［富山市教委1989］の方向に沿って調査区のほぼ全体を東西に横断する形で設定したあぜの層位を基にして基本土層図を作成した。灰色の耕作土を除去すると中世以降に堆積したと考えられる黒褐色シルト質砂土層が現われ、中世・古代の遺物がこの層には含まれる。また、近世の溝がこの層の上面で確認できる。厚さは、数cm～20数cmである。この黒褐色シルト質砂土層を除去すると、明黄色砂質シルト層が現われ、中世の遺構を検出することができる。厚さは、数cm～10cm程度でＹ80列を中心とした一部にしか堆積せず、遺物はあまり含まれない。この明黄色砂質シルト層を除去すると褐色砂質土層が現われ、古代の遺物を多く含んでいる。この褐色砂質土層を除去したところで、古代の上層の遺構を検出することができる。

この褐色砂質土層を除去すると灰褐色砂土＋明褐色砂土層が現われ、古代の下層の遺構を検出することができる。この遺構が切り込む層は、にぶい橙色シルト質砂土である。そのさらに下層には明褐色もしくは灰褐色砂土が堆積し、次いで礫層となる。

包含層の遺物の取り上げにあたっては、便宜上各層を次のように対応させて注記もこれにならって行った。

耕作土：表土、黒褐色シルト質砂土：第１層、明黄色砂質シルト・褐色砂質土：第２層または第２上層、灰褐色砂土＋明褐色土：第２下層　（境）



第４図　発掘区区割図

Ⅳ 遺　構

1　古代の遺構

(1)　古代の概要

古代の遺構は、竪穴住居23棟、掘立柱建物11棟、溝・河跡20条、土坑約340か所がある。遺構は、発掘区の西側と東側にそれぞれ集中して残っている。中央は河跡と見られる溝があり、古代には水の流れがあったと考えられる。

遺構の時期は、重なりがあること、西側では遺構確認面の高さや覆土の性質の違いから層位的に分かれること、出土した土器の特徴から１期～５期の５時期に分けることができる。遺跡は、その始まりが奈良時代（８世紀中頃）で、終わりは平安時代（９世紀末）と考えられ、約150年間にわたって形成されたものと考えられる。

(2)　竪穴住居

竪穴住居は、西側に11棟（SI37～44・SK135～137）東側に12棟（SI26～36・SK119）がある。西側では層位的に２層に分かれ、上層に３棟（SK135～13）下層に８棟（SI37～44）がある。東側でも２層に分かれ、上層に３棟（SI26・27・SK119）下層に９棟（SI28～36）があり、上層の１棟（SI27）と下層の１棟（SI28）で重なりがある。（久々）

ＳＩ26（第15図・写真図版７）

調査区東側の拡張区の SK119の南側に位置する。プランは、南北に長い長方形で2.2m×3.1m、面積約6.8㎡の小型のものである。掘り方は、検出面から約10cmで床となる。覆土は、暗褐色砂質土で一部床に礫が露出する。床面は、地山が礫層のためはっきりしないが、カマドの前面にわずかに貼り床が認められる。また、柱穴は、検出できなかった。カマドは北東隅に北向きに設けられ、袖石はみられない。規模は、40cm×50cmで焼土・炭化物が広がる。カマド焚き口部の掘り方は、約20cm。主軸方向は、Ｎ－ 23°－Ｅをとる。時期は、４期。

ＳＩ27（第15図・写真図版７）

調査区東側の拡張区の SK119・SI26の北東側に近接して位置する。この辺りは、南から北東へ延びる小谷の始まり部で、谷には暗褐色土の堆積がみられる。この暗褐色土が遺物包含層となっており、住居覆土（暗褐色土）の遺物との接合も確認される。

SI27は、SI28と重複して作られ、切る。しかし、南東の壁は検出が困難でSI28の壁でプランを確認した。プランは、隅円長方形で竪穴の貼り床が途切れる所から約30cmで壁となると考えられる。規模は、4.2m×3.4m、面積約15㎡と推測される。検出面からの深さは、約40cmと深い。貼り床は、竪穴の中央部のほぼ全面にみられ壁に近づくにつれ締まりが無くなり、みられなくなる。カマドは、北西の隅に西向きに作られ、袖土の一部と袖石が残る。規模は、90cm×70cmで底面に焼土・炭化物が残る。焚き口部の掘り方は、はっきりしない。付属する施設としては、南西隅に小竪形な土坑を持つが、地山に近い覆土であり埋め戻されていた可能性が強い。柱穴は、確認できない。主軸方向は、Ｎ－ 51°－Ｅである。

ＳＩ28（第15図・写真図版７）

SI27の南西側の下層約10cmに確認された住居で、2.6m×3.4m、面積約8.8㎡の隅円方形のプランを持つ。貼り床は、住居の中央部を中心にみられ、カマドの前面が顕著である。土層図Ａ～Ａ′の⑭～⑲が覆土となる。カマドは、南東隅に90cm×1.6m（煙り出し１m）の規模で設けられ袖石はみられない。燃焼部はやや掘り窪められ、焼土・炭化物が顕著にみられる。カマドの煙り出しは、古いものが比較的長く作られる傾向がある。その他、北西隅に土部をSI27に削平された焼土を覆土とする穴がみられカマドであった可能性がある。主軸方向は、Ｎ－59°－Ｅである。柱穴は、

確認されない。

ＳＫ119（第15図・写真図版７）

土坑番号を持つが小型の住居である。SI26の北側に隣接し、隅円方形で2.2m×3.2m、面積約７㎡の規模を持つ。SI26同様荒い砂層に掘り込まれており、褐色＋灰褐色砂層単層の覆土を持つ。深さは検出面から約10cm。床には貼り床がみられず、礫が飛び出している。カマドは、東壁の北寄りに90cm×50cmの規模で設けられ、焼土・炭化物が焚き口部に堆積する。主軸方向は、Ｎ－30°－Ｗである。（酒井）

ＳＩ29（第17図・写真図版11）

調査区東側北寄りにある。南北2.6m東西2.1mの方形で、面積は約5.5㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約15cmである。主軸方位は北から約60度西に振れている。覆土はにぶい褐色砂質土である。中央には黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。カマドは東北隅に壁面から突き出して作られている。カマドは袖部を河原石を芯材としており、内側は幅約50cm長さ約70cm高さ約25cmで、煙出しが東方を向く。先端には長さ50cmの河原石があるが、もともとは焚き口の天井石であったものが移動したものと思われる。焚き口部は床面よりも８cmほど深んでおり、焼土・炭化物が入っている。時期は２期である。

ＳＩ30（第17図・写真図版11）

調査区東側北寄りにある。南北2.5m×2.3mの方形で、面積は約5.8㎡である。北壁は狸の巣穴で攪乱され変形している。遺構確認面から床面までの深さは約15cmである。主軸方位は北から55度西に振れている。覆土は灰褐色砂質で、上層はやや褐色をしている。床面には西側半分に黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。カマドは西南隅に造られている。カマドは袖部などの遺存状態は悪いが幅80cm長さ約1.4mが赤く焼け、袖石と見られる焼けた河原石が散乱している。煙出しが南方を向く。焚き口部は床面より８cmほど窪んでいる。時期は３期である。

ＳＩ31（第18図・写真図版12）

調査区東側中央にある。南北2.8m東西3.6mの方形で、面積は約18㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約15cmである。主軸方位は北から60度西に振れている。覆土はにぶい褐色砂質土である。床面は礫層で、中央部とカマド付近にわずかに貼り床がある。中央には厚さ約４cmの黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。北西隅に焼土があり、煙出しが北方を向くカマドが造られている。カマドは遺存状態が悪く、大きさはよく分からないが、幅50cm長さ１mほどで煙出しが北を向くカマドである。時期は３期である。

ＳＩ32（第18図・写真図版12）

調査区東側中央にある。南北2.9m東西2.8mの方形で、面積は約８㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約20cmである。主軸方位は北から約70度西に振れている。覆土は褐色砂質土である。中央床面には黄色土の貼り床がある。カマドは南壁中央やや西寄りに造られている。カマドは袖部などの遺存状態は悪いが、幅50cm長さ１mが赤く焼けており、煙出しが東方を向く。焚き口は床面より約10cm深い窪みとなっており、赤褐色に焼けていた。時期は４期である。

ＳＩ33（第18図・写真図版12）

調査区東側中央にある。南北3.2m東西2.5mの方形で、面積は約８㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約10cmである。主軸方位は北から75度西に振れている。覆土は褐色砂質土である。床面中央には黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。カマドは南壁中央やや東寄りに造られている。袖部などの遺存状態は悪いが、東西約１m南北約80cmが赤く焼けており、南方に煙出しが向く。時期は３期である。

ＳＩ34（第17図・写真図版12）

調査区東側南寄りにある。南北４m東西4.6mの方形で、面積は約18.5㎡である。遺構確認面から床面までの深さは

約５㎝である。主軸方位は北から約７度東に振れている。覆土は褐灰色砂質土である。床面中央には黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。カマドは南東隅に造られている。袖部などの遺存状態は悪いが、幅50㎝長さ90㎝が赤く焼けており、南方に煙出しが向く。時期は１期である。

ＳＩ35（第18図・写真図版13）

調査区東側中央にある。南北2.7m東西2.4mの方形で、面積は約6.5㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約20㎝である。主軸方位は北から60度西に振れている。覆土はにぶい褐色砂質土である。床面中央には黄色土の貼り床がある。柱穴はわからない。カマドは南東隅に造られている。袖部などの遺存状態は悪いが、幅75㎝長さ1.25mが赤く焼けており、東方に煙出しが向く。時期は３期である。

ＳＩ36（第19図・写真図版13）

調査区東側西寄りで、古代下層面にある。南北3.5m東西3.1mの方形で、面積は約11㎡である。遺構確認面から床面までの深さは約25㎝である。主軸方位は北から40度西に振れている。覆土は大きく二層に分かれ、上層はにぶい橙色砂質土である。南東隅は黄色土の貼り床がよく残っており、しかも床面が少し高く、ここが出入り口にあたるのかもしれない。柱穴は、北壁と南壁の中央部の壁際にある。穴は底径約10㎝深さ約20㎝で、住居の主軸上にあり、屋根の棟木を支える柱穴と考えられる。カマドは南西隅に造られている。カマドは、袖部を河原石を芯材としており、内側は幅35㎝長さ1.1m高さ30㎝で、東方に煙出しが向く。煙出しの遺存状態も良く、幅40㎝長さ２ｍである。時期は２期である。（久々）

ＳＩ37（第19図・写真図版13）

平成４年度の調査区にまたがって検出できた竪穴住居である。北側半分を確認することはできなかったが、南側半分とカマドの一部を確認することができた。カマドの周囲に多くの土器が散乱していた。残存部の東西の長さは3.4mで、主軸方位はＮ－ 95°－Ｅである。（境）

ＳＩ38（第19図・写真図版13）

調査区西側の住居群、SI43の北側に隣接して位置する。覆土は、にぶい黄橙褐色で検出面から約20㎝の深さを持つ。プランは4m×4.2m、床面積約16.8㎡の方形で、東壁の南寄りにカマドを設ける。床は、西側を覗き貼り床がみられ、カマド前面が顕著となっている。カマドは、75㎝×１ｍ規模で設けられ、焚き口の前は、浅く掘り窪められる。この窪みには、炭化物が厚さ約10㎝みられる。カマドの掘り方を精査した結果、袖石の抜き取り跡が両側に確認された。このことからカマドには袖石が使われてていたが、何らかの理由で抜き取られたと考えられる。

床面から柱穴は検出されない。主軸方向は、Ｎ－53°－Ｅである。

ＳＩ39（第19図・写真図版15）

西側住居群の中央北寄りに位置し、南壁をSK136に切られる。また、SB57・58が上に建てられる。覆土は、にぶい黄褐色土を基本としている。竪穴の掘り方は、検出面から約40㎝と深い。プランは、2.6m×3m、面積約 7.8㎡の隅円方形で北西の隅にカマドを設ける。カマドは、袖石を持ち内側はよく焼け煤が付着する。規模は、90㎝×1.4mで煙出しは、比較的長い。また、床面には袖石の抜き取られたものが散乱していた。主軸方向は、Ｎ－85°－Ｅ。（酒井）

ＳＩ40（第21図・写真図版13・14）

中世のSD５に半分程度切られている上にかなり削平を受けているために検出が困難であったが、カマドの焚き口部と貼床が残っていたことから、確認できた竪穴住居である。残存部の南北の長さは 3.6mである。遺構検出面から床面までの深さは深いところで14㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－95°－Ｅである。

ＳＩ41（第20図・写真図版14）

今年度の調査区では、最も規模の大きな竪穴住居で、5.1m×6.4m、面積32.4㎡である。遺構の西端が谷部にかか

るためにプランの確認ができなかったが、谷部が埋まった後に作られた竪穴住居である。主軸方位は、N－5°－Eである。遺構検出面から床面までの深さは14cmで、貼床の厚さは4cm、さらにその下4cmを掘りこんでいる。遺構の南側には礫の堆積部にかかっており、この礫面に丸い空白地帯があり、柱穴ではないかと考えられる。北側の対応する柱穴は確認できなかった。また、周溝が巡っており幅12cmほどで板をはめこみ壁を築いていたと考えられる痕跡がある。カマドは、焼土を確認できたが構造の残りはよくない。

ＳＩ42（第21図・写真図版15）

古代上層の遺構であるSK136に切られる竪穴住居で、規模は2.6m×2.6m、面積約6.8㎡の正方形に近い形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは27cmで、床全面に貼床を行なっている。主軸方位は、N－19°－Eである。カマドは、袖石の存在を確認することはできなかったが、中央近くに石を置きその上に須恵器杯（148）を伏せの状態でのせてあった。杯の口径は11.8cmで、石は長軸が11.5cm短軸が10cmの楕円形でハンマーとして使われていた痕跡がある。須恵器・石ともに火をうけたことから表面がかなり劣化している。このように石の上に須恵器をのせて支脚替わりにした例は、平成４年度に調査をした吉倉Ｂ遺跡のSI５にもみられる（遺物番号：Ｈ４報告書109）。下に置かれた石は径16cmの平たい石、須恵器は杯Ｂで口径は13cmで生焼、やはり火をうけた痕跡がある。

ＳＩ43（第21図・写真図版14）

SI38の南に近接する竪穴住居で、規模は3.1m×4.5m、面積約14㎡である。遺構検出面から床面までの深さは深いところで約10cmで、中央部に広く貼床を行なっており、厚さは４～５cmを測る。主軸方位は、N－13°－Eである。

ＳＩ44（第23図・写真図版14）

SI43とSI37の間に位置する竪穴住居で、規模は4.2m×3.4m、面積約14㎡である。遺構検出面から床面までの深さは24cmで、周囲を残して貼床を行なっており、厚さは２～３cmを測る。主軸方位は、N－78°－Wである。カマドの袖石は残っていなかったが、右の抜き跡があることからカマドの築造には石を使用していたと考えられる。このカマドの南付近からは、鉄製の紡錘車が出土した。

ＳＫ135～137（第16図・写真図版８）

SK135・136・137は古代の上層包含層を除去した時点で検出できた遺構である。SK135・136は近接して並び、SK137は、それとは少し離れているものの同じ向きで並ぶ。当初は、３棟とも掘立柱建物に伴う土坑として捉えていた。

ＳＫ135

規模は南北2.7m×東西2.6m、面積約７㎡、カマドの痕跡は確認できず、作り付けのカマドはなかったと考えられる。貼床はない。遺構検出面から床面までの深さは約40cmである。

ＳＫ136

規模は南北2.5m×東西2.6m、面積７㎡、カマドはSK136と同様になかったと考えられる。貼床はない。遺構検出面から床面までの深さは約40～50cmである。

ＳＫ137

規模は、南北2.5m×東西2.4m、面積約６㎡である。遺構検出面から床面までの深さは40cmである。遺構検出面ですでに焼土と炭化物の広がりを確認したが、これは遺構がかなり埋まってから再利用したものと考えられ、厚く堆積する炭層を水洗いしたところ多くの米・雑穀・豆・胡桃の殻等が現われた。この焼土・炭を除去して掘り下げたところ、東側には多くの礫の投げこみがみられ、礫を除去していくとカマドの構造が現われた。礫の中にはすり石も含まれていた。他の竪穴住居に付属するカマドと違い、ずんぐりとした礫を後方に一対組み、その手前に平たい石を一対組んでいる。天井石は裏側一面が赤く焼けており、天井から落下したままのような状況で出土した。主軸方位は、N－102°－Eである。（境）

⑶ 掘立柱建物

古代の掘立柱建物は、9世紀中頃から後半の上層掘立柱建物群と8世紀中葉の下層掘立柱建物群の2時期に大別できる。上層掘立柱建物群にはSB40・41・47・48・50・51・52・55が、下層掘立柱建物群にはSB49・53・54・57・58がある。SB49は、当初上層掘立柱建物群と考えたが、建物配置や棟方向等から下層掘立柱建物群に含めた。上層掘立柱建物の柱穴は、上層には灰黄褐色の覆土がみられ、地山の灰褐色砂土および明褐色砂土と明確に区別できた。下層掘立柱建物の柱穴は、同じく褐色の覆土がみられ、にぶい橙色シルト質砂土の地山と識別が困難であった。調査区の北東部は遺跡形成以前は自然のものと思われる谷であったがその谷が浅いくぼ地となるまで、埋まった後に下層掘立柱建物群が形成され、その後、完全に埋まった後に上層掘立柱建物が形成された。

A 上層掘立柱建物群

この時期の掘立柱建物群は、SB55を除いてSB40・41を西端に、SB51・52を東端とするロの字状に配置されている。なお、西端の一列は、SB40の北側にさらに4間2間の建物が確認されており、この建物群がさらに北に伸びることが分かっている。現時点においてこれら7棟の建物は、約1,400㎡占有している。同時期の竪穴住居は付近にはなく、同様な様相をもった掘立柱建物群は周辺の遺跡においても確認されていないことから、当地が当時の中心的な機能をもった場所であったことを窺わせる。

SB40 4間2間の南北棟、面積約52㎡を測り、SB50に次ぐ建物規模をもつ。柱穴は礫層を掘り込み、掘り方の埋め土には、拳大以下の礫がぎっしりと詰められていた。南北両棟持ち柱は、側柱の柱列よりそれぞれ20cm程度外側にずれ、比較的浅い。明確に柱痕が確認できた柱穴は1割程度である。柱穴より須恵器杯蓋（220）・身（221）が出土している。

SB41 2間2間の東西棟、面積約9㎡を測り、SB47・55とともに小規模の建物である。しかし、SB47・55が2間1間であるのに対し、SB41は2間2間の建物であり、性格が若干異なることが窺える。さらに建物のすぐ西側に柱穴よりやや小さな小穴があり、梯子穴と思われる。柱痕が明確に確認された柱穴は6割程度である。柱穴より須恵器杯蓋（223・224）が出土している。

SB47 2間1間の南北棟、面積約11.5㎡を測り、SK135に切られる。南北棟として復元したが、SB41・48がいずれも東西棟であることから1間2間の東西棟となる可能性もある。8割の柱穴において柱痕が確認できた。

SB48 当時期の建物群中数少ない東西棟である。4間2間、面積約55.7㎡を測る。東側の1間は庇としたが、間尺が4.1mと広いことから、中世溝に切られて分からないが本来4間2間の身舎に庇が1間つく建物であった可能性が高い。また、両桁行の間尺が異なるにも関わらず、桁行は同じになる。西側の棟持ち柱は、SK137に切られる。棟持ち柱は、側柱より小さく浅い。土層が確認できたほぼ全ての柱穴において柱痕が確認できた。柱穴より須恵器杯蓋(228・

遺構	規模	桁1	桁2	桁3	桁4	桁5	桁6	桁Ⅰ	梁1	梁2	梁Ⅰ	桁①	桁②	桁③	桁④	桁⑤	桁⑥	桁Ⅱ	梁①	梁②	梁Ⅱ	面積(㎡)	身舎規模	身舎面積(㎡)	方位	備考
40	4X2	2.4	2.4	2.4	2.4			9.6	2.7	2.7	5.4	2.4	2.4	2.4	2.4			9.6	2.7	2.7	5.4	51.84	4X2	51.84	N-14'-E	[illegible]10.4m
41	2X2	1.6	1.6					3.2	1.4	1.4	2.8	1.6	1.6					3.2	1.4	1.4	2.8	8.96	2X2	8.96	N-14'-E	
47	2X1	2.2	2.2					4.4	2.8		2.8	2.6						2.6	2.2	2.2	4.4	11.44	2X1	11.44	N-10'-E	SK135に切られる
48	4X2	2.4	2.4	2.7	4.1			11.6	3.1	1.7	4.8	3	2.2	2.3	4.1			11.6	2.3	2.6	4.9	55.88	3X2	38.75	N-107'-E	SK137に切られる
49	2X2	2.8	3					5.8	2.5	2.2	4.7	2.6	3.1					5.7	2.5	2.2	4.7	26.32	2X2	26.32	N-110'-E	
50	6X2	2.6	2.6	2.6	2.5	3	3.6	16.9	2.8	3	5.8	2.6	2.6	2.6	2.6	2.9	3.6	16.9	2.8	3	5.8	98.02	5X2	97.44	N-103'-E	SX39を[illegible]
51	3X2	2.4	2.4	2.4				7.2	2.6	2.2	4.8							0	2.2	2.6	4.8	34.56	3X2	34.56	N-23'-E	中世溝に切られる
52	3X2	2.4	2.4	2.4				7.2	2.3	2.6	4.9							0	2.6	2.3	4.9	35.28	3X2	35.28	N-23'-E	中世溝に切られる
53	3X2	1.9	2.6	1.9				6.4	2.6	2.5	5.1	1.9	2.8	1.7				6.4	2.3	2.8	5.1	32.64	3X2	32.64	N-12'-E	
54	3X2	2	1.9	2.2				6.1	2.2	2.5	4.7	2.1	1.9	2.1				6.1	2.3	2.3	4.6	28.67	3X2	28.67	N-10'-E	
55	2X1	1.8	1.9					3.7	2		2	2	2					4	2		2	7.4	2X1	8	N-25'-E	
57	6X1	1.6	2.2	2.3	1.7	1.7	1.7	11.2	4		4	2.2	1.4	1.7	1.9	1.7	1.8	10.7	4.1		4.1	44.8	6X1	44.8	N-18'-E	
58	3X1	2.4	3	2.6				8	2.8		2.8	2.2	3.9	1.7				7.8	3.2		3.2	22.4	3X1	22.4	N-18'-E	

表2 古代掘立柱建物一覧

・桁行1～6は東もしくは北側、梁行1・2は西もしくは北側の柱間である
・桁行①～⑥、梁行①～⑥は、それぞれ桁行1～6、梁行1・2に対応する柱間である
・方位は全て北を基準とする

229)・身（225・226・230）、土師器椀（227）等が出土している。

ＳＢ50・ＳＸ39　6間2間の東西棟、面積約97.5㎡を測り、建物群中最大規模の建物で、数少ない東西棟である。東側に間尺が広い1間分の庇がつく。棟持ち柱は、側柱の柱穴より規模も小さく浅い。また、底部分の柱穴も同様である。建物に伴うと思われるSX39が、建物内部中央やや西側にある。SX39は、南北に並んだ焼土の詰まった2か所の浅く窪んだ部分である。いずれの窪みにも、非常によく焼けた厚い焼土面が検出され、須恵器杯身（292）、土師器椀（299）・内黒椀（304）・鍋（293・295～298）・甕（294）、緑釉陶器（303）、土錘（576・589・590・600・603）等の遺物の集中がみられた。これは、それぞれ置きカマドの跡かと思われ、焼け具合等より西側が焚き口と考えられる。また、SX39は、SK141に切られる。SD127～129は、確証はないが、SB50に伴う可能性がある。これらの溝が伴うとすると、SX39の存在とあわせて厨屋としての性格を思わせる。しかし、この建物に伴う置きカマドとした場合、建物の中心部分が土間でなくてはならず、建物の構造等を考える上で興味が持たれる。庇部分を除く7割程度の柱穴で柱痕が確認できた。柱穴およびその周辺から須恵器円面硯（231）、土師器椀（232）・赤彩椀（233）・赤彩高台付皿（235）・小甕（236）等が出土している。

ＳＢ51・52　共に3間2間の南北棟で、面積は西側の1列を中世の溝に切られているが、推定35㎡前後を測る。両建物は2.6mの間をもって並び、建物群の東端を区画する。SB51の東側柱には柱痕もしくは掘り方が二つ確認され、建て替えがあったことを窺わせる。柱痕は、両建物ともにほぼ全ての柱穴において確認できた。SB51の柱穴から須恵器杯身（240）・土師器甕（239・241）等が出土している。

柵列　SA1～4およびSB40の南側には柵列がみられる。それぞれSB50・48・47・40にほぼ平行に設けられているが、ロの字状の建物群の中と外を区画しているわけではではなく、どういう目的で設けられたのかは疑問が残る。図示していないが、5割程度のピットにおいて柵杭痕が確認できた。SA1のピットの柵杭痕の規模は、建物の柱痕ときほど差はみられないものであった。

ＳＢ55　SB51・52の東約9mに位置する。2間1間の南北棟、面積約8㎡を測る。東西の桁行にズレがあり、歪んだ建物になる。柱穴の規模もひときわ小さく浅い。SB54Ｐ5を切る。明確な柱痕は確認できなかった。

Ｂ　下層掘立柱建物群

この時期の建物は、上層掘立柱建物群の前身の建物群と考えられるが、占有場所は東にずれる。SB57・58を西端としSB53・54を東端とする不完全ではあるがロの字状に配置されている。SB57・58の、南側約10mにもはっきりとしないが柱列を拾うことができ、桁行4間程度の東西棟の建物が配置されていた可能性がある。なお、当時期に含まれるか不明だが調査区の北端に掘立柱建物の一部と思われる柱列が確認されており、建物群がさらに北に伸びる可能性がある。

ＳＢ49　先述のとおり、当初上層掘立柱建物群と考えていた建物である。4間2間の東西棟、面積約26.5㎡を測る。柱穴は、他の建物より小さく比較的浅い。また、桁行き・梁行きの間尺が異なっており、束柱をもった建物であったのだろうか。柱痕は1／4程度の柱穴において確認できた。

ＳＢ53・54　SB49の東約9.5mに位置し、両建物は4.5mの間をもって南北に並ぶ。いずれも3間2間の南北棟、面積はそれぞれ約32.6㎡・28.7㎡を測る。桁行きの間尺にばらつきがあり、全体に上層掘立柱建物群のそれよりやや狭い。さらに、SB54の建物内部には、建物に伴うと思われるいくつかの柱穴状の小穴がみられる。このうち、Ｐ6は、棟持ち柱列上にあるものの側柱列からはずれる。SB53・54において明確に柱痕が確認できたものはSB53では3割、SB54では1割にも満たない。しかし、柱穴内には大小の石や須恵器の大甕・円面硯がまとまってみられ、柱を抜いた後に投げ込まれたとみられる。SB53の柱穴からは須恵器杯Ｂ（243）、甕（569）・土師器小甕（244）等が、SB54の柱穴からは須恵器杯蓋（246）・円面硯（247）、土師器甕（249）・小甕（245）・鍋（248）等が出土している。

SB57・58　両建物は、把握が遅れたため上層を確認できなかったため覆土・遺物の出土状況等についての詳細な検討はできない。SB58P2はSI39を切り、同P6はSK136に切られる。また、SB57P12はSI42に切られる。両建物は、棟方向が同じであることや切り合い関係がなくSB57の内部にSB58がすっぽり入ること、SB57の面積が約45㎡と当時期の建物中ずば抜けて大きいこと、逆にSB58の面積が小さすぎること等から1棟の建物の可能性がある。さらに、1棟の建物としたとき、次のような可能性がある。1．SB57をSB58の庇とする場合、2．SB58をSB57の床持ちとする場合、の2通りである。しかし、前者の場合は、SB58がSB57の中心にないことが、後者の場合は、SB57の梁行きが4mと長すぎることやSB58の柱穴の規模がSB57と較べて遜色がないこと等、問題点もある。SB57の柱穴からは土師器小甕（327）・鍋（330）等が、SB58の柱穴からは須恵器鉄鉢（325）等が出土している。（越前）

(4)　その他の遺構

A　配石（第16図・写真図版8）

中世溝SD5・38に挟まれたX59Y72区で検出された。上部は、SD5とほぼ同じ流路を持つ用水路により攪乱されており詳細は不明である。配石は、長さ約60cmの河原石3個をコ状にならべ小さな石数個を添わせる。この石囲中および周りから緑釉などの遺物が出土した。また、この配石の下からは、焼土（SX40）が検出される。関係は、はっきりしないが、配石は祭祀などに利用された可能性が高い。（酒井）

B　土坑・穴

SK72（第22図）

「城長」の墨書土師器が出土した土坑である。中世の遺構検出面で確認できた遺構で、中世の溝SD100に切られる。覆土はシルト質砂土で、下層からにぶい黄橙色・黄褐色・にぶい黄褐色の順に堆積している。墨書土器は、黄褐色の層を除去した土坑の肩の位置から出土した。この一番上の層は中世遺構の覆土に似ているが、これより下の層は古代遺構の覆土と考えられることから古代の遺構として捉えた。

SK138～140（第22図）

いずれも古代上層の遺構である。SK138は調査区東側の北寄りに位置し、平面形は3m×1.7mの長方形を呈し深さは30cm～84cmである。SK139はSB50の南に位置し、平面形は不整形で、深さは最深部で約30cmである。SK140は平面形は楕円形、断面は方形を呈し、深さは16cmである。

SK141（第16図）

古代上層で確認できた遺構で、SB50に伴うSX39の西端にかかっており、SK141が埋まってからSX39が形成されている。平面形は長軸約1.2m短軸約0.8mの楕円形を呈する。

SK150（第22図）

SB53の中にあり、遺構の中央部の土には炭化物を含んでいた。SB53との関連性を考慮する必要がある。

P370・381・395（第22図）

いずれも古代上層の遺構でP370は径67cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土は、にぶい褐色・褐色シルト質砂土である。P381は径30cm深さ54cmと径約70cm深さ30cmの穴が2つ重なっている。覆土は、褐色・灰褐色・にぶい褐色砂質土と褐色砂土である。P395は径約80cmを呈し、深さは54cmを測る。覆土は、明褐色・にぶい橙色・褐色・にぶい褐色シルト質砂土である。

C　溝

SD127～129（第26図・写真図版4・5）　SD127は、SX29を切りL字状に折れ曲がってさらに北側に続く溝で、幅約50cm、深さ約30～40cmである。SD128は幅約50cm、深さ約30～40cmで、SD127から直角に延びる溝でSD129に切られる。SD129は、幅約60cm、深さ約30cmである。（境）

ＳＤ132・139（第22図・付図２・写真図版６）

Ｙ100ラインにほぼ南北にみられる自然の谷（SD139）と溝である。

SD139 南から北に向かって扇状に窄まり幅４ｍほどの溝となる。最も深い部分は、Ｘ53Ｙ100区あたりとなり、谷は南から東に向きを変えながら、東の大きな谷へと抜けていた可能性がある。また、このSD139の中や西際にみられる土坑SX32・33・38は、灰褐色土を覆土に持つ不整形なもので、遺構であるかどうかは不明。この灰褐色土は、古代上層の掘立柱建物の柱穴上層にみられる土と同じもので谷の窪地に川の氾濫で堆積した灰褐色土が残ったものかもしれない。方形のプランを持つSX34も同様の性格のものである可能性が強い。

SD132 SD139 の中に南東から南東から北西に向かって確認された溝で、約20m長さで幅１～２ｍでみられる。溝底は、堅く締まった凝喰状となっている。溝には、礫の投げ込みがみられＸ63 Ｙ100付近が特に顕著である。（酒井）

ＳＤ148（第27図・写真図版15）

調査区西側の南寄りで、古代下層面にある。幅 1.5m深さ10～30cmで、南から北へ流れる自然流路である。覆土はにぶい黄褐色砂質土を主体とする。溝がほとんど埋まった後に整地が行われている。時期は１期またはそれ以前。

Ｄ　畠

ＳＦ１・２（第28図・写真図版４）

調査区東側南寄りで、古代上層面にある。幅20cm～50cm深さ５～10cmの溝が50cmから１ｍの間隔をおいてほぼ平行に並んでいるものである。溝の方向は、北から約30～35度西にふれる。ほぼ中央で間隔の広いところがあり、東と西の２ブロックに分かれる。

ＳＦ１は東側の25条を一ブロックとするもので、西から東へゆるやかに傾斜するところにある。溝は傾斜方向に直交して掘られている。その範囲は東西約16m南北約20m面積約320㎡である。

ＳＦ２は西側にある21条を一ブロックとするもので、ほぼ平坦なところにあるが、溝の方向はＳＦ１とほぼ同じである。その範囲は東西約20m南北約20m面積約400㎡である。（久々）

Ｅ　不明遺構

ＳＸ29（第26図）

古代上層の遺構で、方形に近いプランを呈するが、住居跡ではない。遺物が多く出土しており、自然の窪地に遺物を投げ入れた跡として捉えた。SD127に切られる。

ＳＸ30・31（第22図）

調査区東側の谷のほぼ中央の最深部にＸ61・62Ｙ133・134区に確認された。いずれも不整形な方形プランを持ち、焼土を伴う。重複関係は、SX30新→SX31古となる。いずれも住居とは断定できない。

SX30は、2m×2.2mの不整形で、検出面から約20cmの掘り込みを持つ。焼土は、80cm×１mの規模で東側にみられる。床は、比較的軟らかい。

SX31は、3m×2.4m規模で北西の隅に焼土を持つ。掘方は、検出面から約30cm。床は比較的軟らかい。焼土は、40cm×80cmほどの楕円形の穴状の部分にみられる。（酒井）

ＳＸ41（第22図）

調査区中央で、古代下層面にある。幅約４m深さ約20cmの、南から北へ流れる自然流路である。水が流れていた時はかなりの水圧があったらしく、底は貼床状に堅く締まっている。SK142・143などの穴が重なる。

SK142は東西1.8m南北９m深さ約20cmの長円形の穴、SK143は東西1.2m南北1.3mの深さ約23cmの穴である。覆土はいずれも焼土を多く含む赤褐色砂質土で、その中で火を焚いたものと考えられる。河跡の窪地でゴミを燃やした穴であろう。SB53・54に伴うものと考えられる。時期は１期である。（久々）

2　中世の遺構

(1)　中世の概要

遺構は、掘立柱建物７棟、溝、井戸１、土坑などが確認される。建物は、遺跡の中央を北流する溝SD５の西側とその東側にみられる。建物は、それぞれ１～２棟が存在したと考えられる。また、SD５は昨年の調査区から引き続確認されているが、時代を特定するに至らなかった。しかし、今年度の調査では、中世に作られ、近世・現代に至るまでほとんど流路を変えずに利用されていたことを確認した。その結果、集落変遷などに新たな所見がみられる。（酒井）

(2)　掘立柱建物

中世の掘立柱建物は６棟確認された。SB42を除くといずれもSD５の東側に位置する。SD５から水を取り込んでいるSD100が東西方向にのび、SB43・45のすぐ北側に流れる。SB43付近では建物にほぼ平行に流れるが、SB45を迂回するように流れを変えている。このことから、溝が設けられたときに、既にSB45は建っていたと思われる。なお、SE２はSD100の水を引き込んでいたと思われる。

なお、建物時期は二時期に大別される（第14図）。

ＳＢ42　４間３間の南北棟、面積は約73.5㎡を測る。６棟中最も古い。東側に梁行き１間分の庇が付くが、柱穴の規模等に身舎部分の柱穴との間に差はみられない。身舎部分のみの面積は50.6㎡である。身舎部分の柱穴をみてみると、Ｐ９は確認されず、Ｐ７・８・10の柱穴も規模が小さく極めて浅い。さらに、Ｐ14の西側 1.2mには焼土がみられる。これらのことから、Ｐ３・５・15・13に囲まれた空間を土間に、Ｐ１・３・13・11に囲まれた空間は床を張った部分と想定できる。南北には建物に伴うと思われるSK77･78がある。両土坑とも底の平面形が方形を呈する。柱の並びをみると、側柱の柱列はともにばらつきがみられ、全体に歪みがみられる。６割程度の柱穴で柱痕が確認できた。

ＳＢ43　５間４間の南北棟、面積は約 101.4㎡を測り、今回の調査区中最大の建物である。このうち東西梁行き１間分を庇と考えた。身舎部分のみの面積は約51.2㎡となる。この建物においても身舎部分と庇部分の柱穴との間に規模等の差はみられない。ただし、この建物については、北側３間の間尺より考えると、建て替え・増築の可能性も考えられ、その場合、II b期の段階で建てられた建物が、増築されてII c期まで存続したと考えられる。しかし、同様な構造の建物は吉倉Ａ遺跡でも確認されており[県埋文センター1993]、１棟の建物とした。ただし、Ｐ13が棟持ち柱列よりずれるため、棟をもたせるためには束柱が必要となる。すぐ西側にはSE２があり、建物に伴う可能性が高い。建物の把握が遅れたため土層を確認できた柱穴は約半分であったが、ほとんどで柱痕が確認できた。

ＳＢ44　SB43のすぐ南側に約 0.6mに位置し、SB43に伴う倉庫と思われる。１間２間の南北棟、南側に柵列を伴う。南側に１間分の庇をもった２間２間の南北棟も想定できるが、Ｐ３・６・９列は桁行き・棟持ち列から大きくずれ、小規模で浅い。なお、土層の確認はできなかった。

ＳＢ45　SB46と切り合い関係はないが、他の建物との関係等よりSB46より新しいと考える。４間２間の東西棟、身

遺構番号	規模	桁1	桁2	桁3	桁4	桁5	桁I	梁1	梁2	梁3	梁4	梁I	桁①	桁②	桁③	桁④	桁⑤	桁II	梁①	梁②	梁③	梁④	梁II	総面積(㎡)	身舎規模	身舎面積(㎡)	方位	備考
42	4X3	3	2.8	2.7	2.5		11	2.3	2.3	2.3		6.9	2.9	2.9	2.3	2.2		10.3	2.4	2.4	2.1		6.9	73.49	4X2	50.6	N-2°-W	庇と土坑を伴う
43	5X4	1.9	1.1	2.1	2.9	2.9	10.9	2.3	2.4	2.3	2.3	9.3	2.2	0.8	2.1	2.9	2.9	10.9	2.1	1.5	3.2	2.1	8.9	101.37	5X2	51.23	N-18°-E	SE-2を伴う
44	2X2	2.5	1.9				4.4	2.3	2.1			4.4	2.4	1.4				3.8	2.6	1.8			4.4	19.36	2X2	19.36	N-15°-E	
45	4X2	2.3	2.6	2.6	2.1		9.6	2.8	2.6			5.4	2.3	2.6	2.6	2.1		9.6	2.6	2.7			5.3	73.94	4X2	51.84	N-2°-E	
46	4X3	2	1.9	3	2.3		9.2	2.3	2.7	2.7		7.7	2.3	2.3	2.3	2.3		9.2	2.3	2.7	2.7		7.7	70.84	4X2	49.68	N-11°-E	
56	2X2	2.1	2.2				4.3	2.1	2			4.1	2.1	2.2				4.3	2.1	2			4.1	27.06	2X2	27.06	N-18°-E	

表３　中世掘立柱建物一覧

・桁行１～５は西もしくは南側、梁行１～４は北もしくは東側の柱間である
・桁行①～⑤、梁行①～④はそれぞれ桁行１～15、梁行１～４に対応する柱間である
・方位は全て北を基準とする

舎部分の面積は約52㎡、北側張り出し部分を含めた総面積は約74㎡を測る。張り出し部分と身舎部分の柱穴に規模等の差はみられない。身舎のすぐ北・東側には棚列がある。北側の棚列は建物の張り出し部分と重複する。切り合い関係はないが、北・東側の棚列がまずあり、北側の棚列を廃して後、張り出し部分を増築したと考える。切り合い関係は確認できなかったが、P 7・10・12・13・14・15には建て替え、もしくは補強のための柱（杭）の跡がみられる。P 6は、梁行き列からややずれる。P 2・3・8・9に囲まれた空間は、土間としての空間を想定する。建物内部にあるSK128の覆土には焼土・炭化物が多くみられた。その中からは、若干の土師質土器（607・609・610）のほか、炭化した米・豆・麦等が出土した。柱穴の並びにはばらつきがみられ、全体にやや歪む。土層を確認できた14の柱穴のうち7割で柱痕が確認できた。

SB46　4間3間の東西棟で、うち北側1間は庇とした。身舎面積は約49.7㎡、庇を含めた面積は約70.8㎡を測る。身舎部分と庇部分の柱穴に規模等の差はみられない。なお、P 3・4・8・12部分は上部が削平されていたため残りはよくなかった。切り合い関係は確認できなかったが、P 9・13・17には、建て替えもしくは補強のための柱（杭）の跡がみられる。P12は、梁行き列からややずれる。P 7・8・15・16に囲まれた空間は土間としての空間を想定する。建物内部にあるSK130・131の覆土には焼土・炭化物が多くみられた。その中からは、青磁（612）・土師質土器のほか、炭化した米・豆等種子類が出土した。建物の柱穴からも若干の土師質土器（608）が出土している。土層が確認できた柱穴のうち、柱痕は約5割で確認できた。抜き取りが行なわれたと思われる柱穴もみられた。

SB56　2間2間の南北棟、面積約27.1㎡を測る。SB43の西約16mに位置する。柱穴の規模も小さく、倉庫のような建物と思われる。柱痕は約5割の柱穴で確認できた。他の建物との関係等よりⅡb期と考える。（越雍）

(3) その他の遺構

A　土坑

掘立柱建物に伴う土坑　SK77・78・80・127・128・130・131（第31図・写真図版2）

今年度の調査区における建物に伴う土坑は、南中田D遺跡や昨年度の調査区でみられたような建物の一区画を占めるような土坑はなく、外部施設もしは内部施設として使用していたと考えられる規模の小さなものであった。

SK77・78・80　SB42の南北に位置し、SB42に伴うと考えられる。どちらも肩部は崩れて不整形であるが、中央部の深い部分はほぼ方形に掘り込んでいる。このことから当初は方形の施設として作った外部施設と考える。覆土を水洗したところ、SK77からは炭化した米・麦・豆等が、SK78からは炭化した米・麦等を検出できた。また、SK78からは土師質土器（606）が一点出土した。SK80は、SB42内にある土坑で径約70cmの円形で深さは約25cmである。覆土は、①黒褐色粘質シルト（炭化物混）と②灰黄褐色＋明黄褐色粘質シルトで、これを水洗したところ骨片を検出した。

SK126・127・128・130・131　SB45・46のいずれかに伴うと考えられる。特にSK128・131は、それぞれSB45・46の中の南から2間目で東からも2間目という建物内においてほぼ同じ位置にある。また、どちらの土坑も平面長方形を呈する。SK128は短辺94cm×長辺約160cm×深さ約20cm、SK131は短辺76cm×長辺約130cm×深さ34cmである。SK131は、粗砂に掘り込んでおり、土層は黒褐色シルト質砂土とこの粗砂が互層をなす。崩れやすいところであることから木枠等をはめ込んで支えていたと思われる。この土坑からは青磁椀の破片が出土した。SK128の水洗土壌中からは炭化した米・豆等と骨片を検出した。SK127は、SK128の斜め北に位置する土坑で、覆土には一様に炭化物が混在している。この土坑から出土した土師質土器（607）の底部がSK127から出土していることから、この土坑もSB45に伴うと考えられる。水洗土壌中からは小量の炭化米・豆等を検出した。SK126もSB45内にあり、ほぼ円形を呈し、深さは6～7cmと浅いが、東側に焼土層があり、周辺には炭化物が広がる。このことからSB45に伴うカマド関連の遺構である可能性がある。SK130は、SK131の北側に位置する土坑であるが、不整形で浅い。覆土中には小量の炭化物が見られた。

SK73（第31図・写真図版3）

SD27の西側に近接してある土坑で、短辺86cm×長辺130cm×深さ約30cmの箱形になる。SD27との関連性を示唆するような痕跡はなく、枠をはめ込んだだようにに壁が垂直に立つ。昨年度の調査区のSK14・15はこれとほぼ同じ規模、同じ形であり、この2基の土坑からは土師質土器がそれぞれ数点ずつ出土していることなどから墓穴の可能性があるとした。墓穴については、今後の検討を要すると考えるが、形状がほぼ一致することから、その機能自体は同じであると考えてもいいのではないだろうか。ただし、SK14・15とは違い遺物の出土はなかった。

その他の土坑（第31図）

SK66は、調査区西側の北寄りにあり楕円形で深さは約40cmを測る。**SK67**は、楕円形で深さ約20cmの土坑である。**SK71**は、SK67の東に位置し、楕円形で深さは約40cmを測る。**SK74・SK75**は、SB42の東に近接する土坑でSK74は不整形で深さは約15cm、SK75は楕円形で深さは約30cmである。SK76は、SB42の西側に近接し、深さは約30cmを測り、不整形である。覆土には小量の炭化物が混ざる。**SK79**は、調査区の東側の礎物遺構のない地区にあり、不整形で深さは15cm程度である。SK83は、SB43の西側に近接するL坑で円形を呈し深さは約25cmである。**SK87**は、調査区中央にある土坑で円形を呈し深さは約20cmである。**SK95**は、調査区東側の北側にある土坑で、深さ約30cmである。**SK101**は、調査区東寄りにある遺構で6cm程度の浅い土坑である。**SK107**は、SB43P25に切られており、楕円形を呈し深さは約30cmである。土師質土器が(611)が出土した。**SK108**は、SD101に切られる土坑で、深さは約40cmを測る。**SK110**は、調査区中央北よりにあり、不整形で深さは約20cmである。**SK132**は、SB45の北側に近接し不整形で深さは約15cmである。**SK133**は不整形で、深さは約30cmである。SB43内にあるが、伴うものではないと考える。

B　穴（第31図）

P345・347は、共に調査区西側の北寄りにある穴で、P345は深さ約20cm、P347は深さ約15cmである。

C　井戸（第31図・写真図版2）

SE2　SB43の西側にあり、SD5から直角に伸びるSD100を利用して水を引き込んでいる。短軸2m×長軸2.5mの楕円形で、深さは約50cmである。取水口は、上幅約30cm深さ25cmのU字状を呈する。この取水口の上から礫が浮いた状態で出土しており、SD100から引き込む水量を調節するのに使用していた可能性が強い。井戸の底の地山は粗砂であることから貯水するために何らかの設置物があったと考える。また、昨年度の調査で検出したSE1これと同じような施設であった。SE2よりも規模は大きいが形態的には同じと言えるものである。当遺跡の立地するところでは現在湧水がないことと、川水が豊富であったことから大小の溝を利用してこのようなため井戸を設置していたと考えられる。(境)

D　溝（第24図・写真図版3）

溝には、微高地上を区画する区画溝（SD5・38-3）などと水路・雨落ち溝など機能を持つ（SD27・101・118）ものがある。

区画溝　SD5は基幹用水とも考えられるもので南北に流れ微高地上を東西に二分する。幅約2.5m、深さ80cm。SD38-3は、このSD5に沿って設けられた幅約50cm、深さ50cmの溝で、両溝間約4mは道路と考えられる。この2条の溝は、昨年の調査区から続いて検出される。

SD100は、SD5から東に直行して分かれ、SD38-3と合流して東へ延びる南北の区画溝で東に行くに連れ浅くなる。また、SD5との合流点には、礫を積んだ水口が作られる。また、SB43・45などの建物群を迂回する。溝は、西側で幅約70cm、深さ60cm、東では幅30cm、深さ10cmとなる。

用水溝　SD27は、南から北へと流れる溝で区画溝などに切られることから古い溝と考えられる。また、昨年の調査区から続き検出される。SD38-1・2・39・97・99・101は近世以降の溝では場整備以前まで利用されたものもみられる。

雨落ち溝など　SD113・118・119などが建物と関係を持って作られたと考えられる。

その他、用途不明の短い溝が20条ほどある。　（酒井）

V 遺　物

1 古代

古代の遺物は、須恵器、土師器、土錘、紡錘車、鉄器、砥石がある。遺物量は整理箱（長さ64cm幅37cm深さ10cm）約250箱である。その時期は、奈良時代中葉から平安時代末までのものと考えられる。須恵器は杯蓋、杯、壺、瓶、高杯、甕、鉢の器種があり、土師器は椀、甕、鍋、高杯、鉢の器種がある。須恵器杯・杯蓋と土師器甕・鍋は、形態や体部整形手法に違いがみられる（第5図）。その違いにより次のように分類した。なお、器種分類は、1993年度分類に新しいものを加えた。そのため、今回出土しなかったものも分類の中に含まれている。

須恵器杯蓋　口縁端部の形態から5類に分ける。1類・2類はともに口縁端部が断面三角形のものであるが、口径に対して器高が高いものを2類とした。3類は口縁端部が丸いものである。4類は口縁端部がやや細長く立ち、やや外へでるものである。5類は体部が低平で、口縁端部がわずかに出るものである。1類・2類は2期・3期、3類は4期、4類は1期の特徴とみる（4類は1993年度報告では1類・2類より新しいとしたが改める。）。

須恵器杯・皿　高台のつかないものを杯A、高台のつくものを杯Bとし、さらに体部の形態から A 類を 8 類、B 類を 5 類に区分した。A 1 類・A 3 類は底部がやや湾曲し体部との境が丸いもの。体部の立ち上がり角度は60～70度である。口径は10～20cmで器高が3cmほどの浅いものを A 1 類、3cmを越える深めのものを A 3 類とする。A 2 類・A 4 類は底部が平坦で体部との境が角ばるもの。体部の立ち上がりは60度前後である。口径は 9～12cmで器高が3cmほどの浅いものを A 4 類、3cmを越える深めのものを A 2 類とする。A 5 類は口径が10～12cm前後器高が3cm前後で、体部の外傾度は50度前後のもの。A 7 類は口径10～12cm器高3cmを越えるもの。A 6 類は口径12cm器高 4 cmで底部に回転糸切り痕を残すもの。A 8 類は口径が14cm器高が3cmの盤または皿とも呼べるものである。A 9 類は A 8 類と似るが体部の立ち上がり角度が約50度のもの。A 1 類・A 3 類は 1 期、A 2 類・A 4 類・A 8 類は 2 期、A 5 類・A 7 類・A 9 類は 3 期・4 期の特徴とみる。

B 1 類・B 2 類は底部と体部との境が丸いもの。体部の立ち上がり角度は60～70度である。口径は10cm～15cm器高が3.5cm前後の浅いものを B 1 類3.5cmを越える深めのものを B 2 類とする。B 3 類は口径が13cm～14cm器高が 5 cm～6 cmの大型のもので、体部の立ち上がり角度は75度前後のもの。これには、底部と体部の丸いものと角張るものがある。B 4 類は底部に回転糸切り痕を残すもの。B 5 類は口径10～11cm器高約 4 cmで、体部の立ち上がり角度は60度前後である（今回出土していない。）。B 6 類は口径約20cm器高 9 cmの大型のもの。

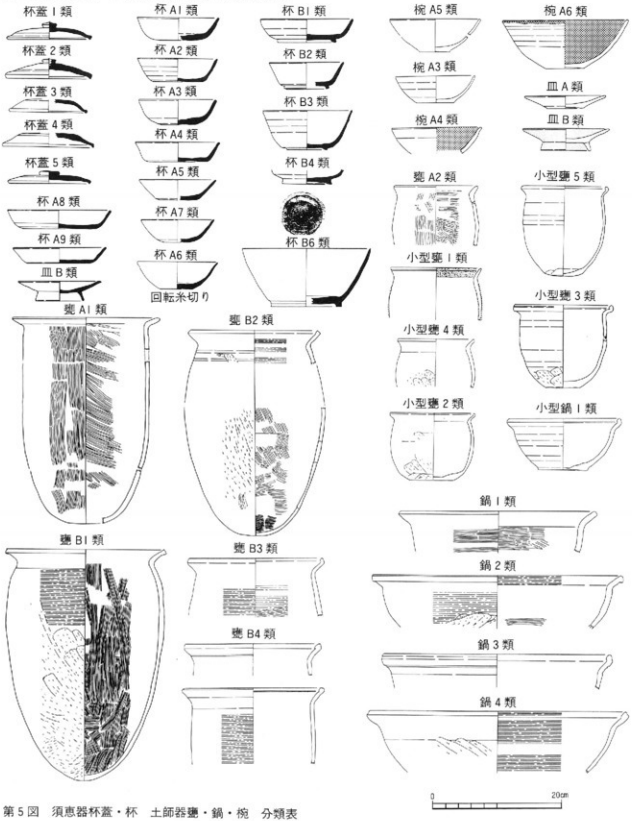
皿は口径13cm器高約 3 cmの台付きのものがあり、皿 B 類とする。

B 1 類は 1 期、B 2 類・B 3 類は 2 期・3 期、B 4 類・B 5 類、皿 B 類は 4 期の特徴とみる。

土師器甕・鍋　内外面の調整手法・口縁部の形態・大きさの違いでわける。甕 A 類は体部の内外面ハケメ調整のもので、口縁部はつよく外反し端部はまるい。24cmの長胴で大型の A 1 類と口径 7 ～10cmの小型の A 2 類がある。甕 B 類は口径15～20cm器高28～30cmの長胴甕で、体部はカキメ、タタキメ、ヘラケズリ調整のもの。口縁端部の違いで 5 類にわける。断面が四角い B 1 類、断面が三角形の B 2 類、内側に段をなして立つ B 3 類、段をなして立つ口縁部が内側に丸く肥厚する B 4 類、口縁部が肥厚するが内側が段をなさない B 5 類である。小型甕は口径 8 ～12cm器高 7 ～12cmで、体部はナデ、ヘラケズリ調整のもの。口縁端部の違いで 5 類にわける。口縁部断面が丸い 1 類、内側に段をなして立つ 2 類、断面が丸く肥厚する 3 類、断面が三角形の 4 類、口縁部は段をなして立つが端部が内側に折れる 5 類がある。5 類は糸切り底である。

鍋は口径22～35㎝器高12～19㎝で、体部はカキメ、ヘラケズリ、ハケメ調整である。口縁端部の違いで4類に分ける。断面が四角い1類、断面が三角形の2類、内側に段をなして立つ3類、断面が丸く肥厚する4類である。小型の鍋がある。口径17㎝器高8㎝で、口縁部は鍋のと同じものである。底部は平底で回転糸切り痕がある。

甕A類・甕B1類・鍋1類は1期、甕B2類・鍋2類・小型甕4類は2期、甕B3類・鍋3類・小型甕4類は3期、甕B4類・鍋4類・小型甕3類は4期の特徴と見る。



第5図　須恵器杯蓋・杯　土師器甕・鍋・椀　分類表

土師器椀・皿　椀は、高台のつかないものをA類、高台のつくものをB類とする。体部の形態や大きさからA類は6類に区分した。A1類・A2類は今回出土していないので、省略する。A3類は口径12cm～13cm器高は3.5cm～4cm、体部の立ち上がり角度は50度である。A4類は口径14cmの内面が黒色のもの。A5類は口径14cm器高は4cmを越えるもの。A6類は口径18～20cm器高7.5cmの大きいものである。A6類は口径19～20cm器高7～7.5cmの大型で内面が黒色のもの。椀A3・5類は底部に回転糸切り痕があり、その他はヘラキリである。A5類は3期、A3類・A6類は4期である。

皿は、高台のつかないものをA類、高台のつくものをB類とする。A類は口径12.5cm器高2cm、体部の立ち上がり角度は25度のもの。底部は回転糸切り痕がある。B類は口径12～15cm器高3cm前後で、A類に高さ1～1.4cmの高台の付いたもの。内外面赤彩のものがある。A類・B類ともに4期の特徴である。　（久々）

(1)　竪穴住居

SI26（第32図）

遺物には、須恵器（杯A・杯B・蓋）、土師器（椀・皿・甕）がある。須恵器には、杯蓋A3類（2）、杯A5類（3～5・8）、大型の杯B3類（6・7）がある。杯の体部の立ち上がりは全体に緩く外向ぎみとなる。土師器は、椀A5類（9）、皿B類（10）、鍋3類（12）、小型甕の底部（11）がある。

SI27（第32・33・43図）

出土遺物量は多く、住居覆土及び包含層の遺物に接合関係がみられ、住居廃絶後この辺りがL器捨て場として利用されたと考えられる。須恵器には、壷・杯A・杯B・壷・甕、土師器には、椀・内黒椀・皿・甕・高杯脚部などがある。また、椀には23「北か」、29「真」、33「長か」などの墨書土器が4点出土している。鉄製品では、菱形金具（636）、L状の棒状製品（664）が出土している。　須恵器　杯A7類（14・15）、杯B2類（16）、大型の杯B6類（19・20）、台付広口壺（17）、短頸壺（18）、大型の甕（575）がある。19は、2段に稜線がめぐる。119は、体部下半をヘラケズリし、上部は、ナデ仕上げ。高台端部・口縁部は欠損する。土師器は、底部糸きりで口縁端部が外反する椀A3類（21～33）、外面をヘラケズリ、ナデで仕上げる内黒椀A4類（34・35）、底部糸きりで付け高台の皿B類（36～40）、赤彩の台部分（41）、甕B4類（43～45・51～53）、小型甕3類（46～50）、底部糸きりで鉢状の甕鍋3類（42）、SI28と同一個体の鍋3類（59）などがある。椀29、皿36～38は、赤彩土器。その他に細長い両原石の端部を使うたたき石（692）・砥石（693）がある。

SI28（第33図）

遺物には、須恵器（杯・蓋）、土師器（椀）、鉄製品がある。須恵器　杯蓋3類（56）、杯A5類（54・55）。土師器椀A3類（57・58）がある。鉄製品では、鉄斧（665）、刀子（666・686）が出土している。

SK119（第32・33・43図）

遺物は、少なく図示できたのは、土師器椀A3類（1）だけである。　（酒井）

SI29（第33図）

須恵器杯（60・61）、土師器甕・鍋があるが、出土量は少ない。61は杯A2類、60は杯A4類である。土師器甕・鍋は胴部破片である。時期は、底部が薄く平坦な杯A2類・A4類から2期とする。

SI30（第33図）

須恵器の杯（62・63）・甕、土師器の椀（64）・小型甕（65～68）がある。62は杯A9類、甕は叩き目のある頸胴部片である。64は椀A5類、68は甕B3類、65は小型甕2類である。小型甕67は底部に回転糸切り痕がある。時期は須恵器杯7類と甕4類があることから3期とする。

S I 31（第33図）

須恵器の杯（69・70）、土師器の椀（71～73）・甕（74～77）があるが、出土量は少ない。70は杯B２類である。71は椀A５類、75・75は甕B２類である。71は底部に墨書があるが判読できない。時期は、土師器椀A５類・甕B２類から３期とする。

S I 32（第33図）

須恵器の短頸壺（83）・杯（79～82）・杯蓋（78）・甕、土師器の椀（84・85）・小型甕（86～88）・鍋（89）があるが、出土量は少ない。78は杯蓋１類、79・82は杯A５類、甕は叩き目のある甕胴部片である。85は椀３類、84はA５類、88は小型甕４類、89は鍋４類である。時期は、須恵器杯５類、土師器椀A３類・鍋４類があることから４期とする。

S I 33（第33図）

須恵器の杯（91～93）・杯蓋（90）・甕、土師器の椀（95）・甕（96）・小型甕（97～102）がある。92は杯A５類、93は杯B類、90は杯蓋３類、甕は叩き目のある甕胴部片である。95は椀３類、96は甕B３類、97～101は小型甕３類である。97は底部に回転糸切り痕がある。時期は、須恵器杯A５類・杯蓋３類、土師器甕B３類・小型甕３類があることから３期とする。

S I 34（第34図）

須恵器は杯（105）・杯蓋（103）・甕、土師器は甕（107）・小型甕（106・108）があるが、出土量は少ない。103は杯蓋１類、甕は叩き目のある甕胴部片である。107は甕B１類、108は甕A２類、106は小型甕２類がある。時期は、須恵器１類・土師器甕１類があることから１期とする。

S I 35（第34図）

須恵器の杯（110～114）・杯蓋（109）、土師器の椀（115）・甕（114）・小型甕（117）があるが、出土量は少ない。110は杯A１類、114は杯A５類、111は杯B３類、109は杯蓋２類である。115は椀A３類、117は小型甕３類である。時期は須恵器杯A５類、土師器小型甕３類があることから３期とする。

S I 36（第34・41図）

須恵器の杯（119～123）・甕（568）、土師器の甕（118・124・126～129）・小型甕（118・130・131）があり、出土量は比較的少ない。123は杯A１類、119は杯B１類、129は杯A５類である。124・127～129は甕２類、118・130・131は小型甕３類である。時期は、土師器甕B２類、小型甕２類から２期とする。（久々）

S I 37（第34図）

土師器の甕（137・141）・小型甕（138～140）・鍋（136）、カマド袖石に転用した砥石（697）がある。137は甕B１類、141は甕B３類、138は小型甕２類、136は鍋１類である。時期は、甕B３類から３期とする。（境）

S I 38（第34図）

遺物は、少なく端部を丸みを持って収める杯蓋２類（143）、底部が平坦で開口する杯A２類（144）、外面をカキメ調整する鍋２類（142）がある。143は、墨痕が残り杯蓋硯として利用されている。

S I 39（第33・34・43図）

遺物は、須恵器杯蓋A１類（132）、杯A１類（133）、杯B２類（134）がある。その他に土錘（78）が１点出土している。（酒井）

S I 40（第35図）

須恵器の蓋（156）・杯（157）、土師器の甕（160～163）・小型甕（159・164）・内黒高杯（158）、砥石（696）がある。156は杯蓋２類、157は杯A４類、160・162・163は甕B２類、159は小型甕１類である。時期は、杯蓋２類・杯A

4類・甕B2類から2期とする。

SI41（第35図）

土師器の甕（145・146）がある。145は甕A1類、146は甕B1類で、このことから時期は1期とする。

SI42（第34・35図）

須恵器の蓋（147）・杯（148～150）、土師器の甕（152・154・155・700）・小型甕（151・153）・すり石がある。

147は蓋1類、カマドの支脚替わりの148は杯A4類で、これらのことから時期は2期とする。

SI43（第35図）

土師器の甕（166・167）・小型甕（165）がある。166は甕B3類、167は甕B2類、165は小型甕1類で、甕B3類から、時期は3期とする。

SI44（第34図）

須恵器の杯（168～171）・甕（173）、土師器の甕（174）・鍋（172）、鉄製の刀子（669）・紡錘車（670）がある。168は杯A1類、169は杯A2類、170は杯A3類、174は甕B2類、172は鍋2類である。時期は、杯A2類・甕B2類・鍋2類から2期とする。

SK135～137（第35図）

いずれも遺構の時期は5期であるが、遺物には若干古いものが混入するようである。

SK135 須恵器の杯蓋（175・176）・杯（177・178）、土師器の椀（179）・小型甕（182）・鍋（180）、土錘（584・588）がある。

SK136 須恵器の杯蓋（187）・杯（184・185・186）・土師器の赤彩椀（188）・小型甕（189）、土錘（604）がある。

SK137 須恵器の杯蓋（190～198）・杯（199～206）、土師器の甕（210・212・213）・小型甕（214・215）・鍋（212）、すり石（698・699）がある。カマド内もしくはカマド付近からの土器の出土はほとんどなかった。すり石は、住居が廃絶された後に投げ込まれたものである。（境）

(2) 配石（第38・42図）

出土遺物は、配石とその付近から比較的まとまった状態で検出された。器種は、須恵器杯A・B、壺、甕、土師器椀、皿、緑釉椀などである。

須恵器には、底部回転糸切りの杯A6類（346・428）、大型の杯B6類（347）、底部回転糸切りで付け高台の皿B類（349）、小型壺（348）、甕（570）がある。土師器では、椀A3類（350）、口縁断面が三角形となる小型甕（352）で4類とは形状が異なる。351は、底部に回転糸切り痕を残す内外面赤彩の土師器椀。353は、軟質で底部削り出し高台の京都系緑釉陶器で、釉は淡い黄緑色でわずかに残る。口径17cm、底径8.3cm、器高5cmを測る。時期は、9世紀後半と考えられる。

(3) 溝

SD132（第38図）

須恵器杯A1類（364・366）、杯B類、須恵器紡錘車（605）が出土している。8世紀後半の自然流路と考える。

SD139（第39図）

須恵器杯A3類（368・369）、杯A2類（370）、杯A8類（371）、土師器甕B2類（372・373）がある。遺物は、時期幅を持ち、2～3期と考えられる。（酒井）

SD148（第38・39図）

須恵器の杯蓋（374・375）、土師器の甕（356）がある。374は杯蓋3類、375は杯蓋1類、356は甕B1類である。356はほぼ完形で、SD148の覆土上部にまっすぐに埋まっていた。溝が埋まってから覆土を掘って埋められた埋甕らし

い。52は甕B1類であることから1期で、溝はそれより古い時期ということになるが、覆土内の須恵器51も1期にあたり、溝は短期間に埋まったものと考えられる。374は杯蓋3類であるが4期の混入であろう。　（久々）

(4) 土坑他

SX29（第37図）　遺物量が多く、須恵器の蓋（273～281）・杯（282～284）、土師器の甕（287）・小型甕（285・286）・鍋（288～290）がある。273・276は杯蓋4類、274・275・281は同3類、277～280は同1類、282～284は杯A1類、287は甕B2類、286は小型甕2類、288～290は鍋2類で、一部新しい遺物も混入するが、時期は2期と考える。なお、杯蓋281は、墨書土器で大小2種類の同じ文字を書いている。上の字は「逢」であるが、下の字は「山」か。　（境）

SX30・31（第37図）

遺物は、SX30からやや立ち気味な体部の須恵器杯B3類(291)、31から口縁端部をつまみ上げて外反させる土師器小型甕1類（300）が出土している。　（酒井）

SX41・SK142・143（第36・37図）

SX41は自然河川の跡の窪地で、SK142・143はそこに掘られた穴である。SX41の出土土器はその穴の上層に伴うものであり、一緒に扱う。土師器甕（302）・小型甕（269・301）がある。302は甕B1類、269は甕A2類、301は小型甕1類である。時期は、甕B1類と甕A類から1期とする。

(5) 畠

SF1・2（第38図）

SF1は、須恵器の杯（332～336）、土師器椀（331）がある。332は杯A5類、335はB4類、334はB5類である。331は椀A3類である。

SF2は、須恵器の杯蓋（337）、土師器椀（339・340）・皿（338）・甕（341～343）・小型甕（344・345）がある。338は皿A類、339は椀A類、340は椀A3類、344・345は小型甕3類である。

SF1・2の時期は、須恵器杯A5類、土師器椀3類、土師器皿A類、土師器椀A4類、小型甕3類から、いずれも4期ということになる。しかし、SF2が4期と見られるSI27などと並なりがあることから、その後の5期とする。
（久々）

(6) 包含層の遺物

西側遺物集中区（第39・40・43図）

X55～70Y55～70付近を中心に出土した遺物で今年度の調査では最も大量に検出された。出土層位は、第3図に示した古代上層（褐色砂質土）と下層（灰褐色砂層＋明褐色砂土）の概ね2層である。下層出土品は、391・394・396～398・404・406・408・414・423・430・446・461・463・464・479・481・493で、その他は上層出土のものである。

下層の遺物　須恵器杯蓋1類（391・396～398）、杯蓋2類（394）、杯A2類（423）、杯A3類（430）、杯A4類（479・498）、杯B1類（404・406・481）、壺蓋（408）、壺口部分（414）、赤彩土師器蓋（446）、鉢（461）、小型甕1類（464）、小型甕2類(463)がある。遺物には混じりがあると考えられるが下層の遺物は、1～2期のものが多い。471・481は、墨書土器。430は、内底面にヘラ記号を持つ。

上層の遺物　須恵器杯蓋・杯には、杯蓋1類（384・385・387・390・477）、杯蓋2類（382・383・387・392・475）杯蓋3類（381・386・388・389・393・259）、杯蓋5類（395・399・491）、壺蓋（409・411・412）、259は無摘の蓋。杯A1類（417～420・422・429）、杯A3類（427・476）、杯A4類（415・416・424・425・479）、杯A6類（428）、杯A8類（421・426）、杯B1類（378・403・405）、杯B2類（431・432・400～402）、杯B6類（380）がある。429・433～435・436はヘラ記号が描かれた杯。その他、甕（572・547）、壺底部（413）、鍋の持ち手（468）透かし窓を持つ円面硯（407）などがある。

土師器には、棒状尖底の製塩土器（474）、鉢（460）、高杯（449）、蓋（447・410）などの他、杯・甕・椀がある。土師器椀A 3類（437～440・442～445・478・484～489）、椀A 5類（441・480）、皿A類（450）、皿B類（451～459）、椀・皿の中で、451・452・458・459・480・487～489は赤彩土器。甕B 1類（467・469）、甕B 2類（465・466）、小型甕1類（462・464）、小型甕3類（463）、鍋2類（470・471）などかなりの混ざりをもって出土している。墨書土器は、475「平」（くずし字か）、476（不明）、478「北か」、483「真か」、484「真」、488「柴か」、489「柴土」などが解読できるが、その他の7点は不明。その他、軟質の緑釉椀（354・355）が2点ある。354は、削り出し高台。

東側遺物集中区（第41～43図）

X50～70Y110～130にかけての小さな谷を中心として遺物が集中する。一部の遺物は、SI27と接合関係を持つ。また、比較的新しい様相の遺物がまとまっている。

須恵器には、杯蓋1類（495）、杯蓋2類（490・496）、杯蓋3類（492・494）、壺蓋（509）、杯A 1類（499・501）杯A 3類（497・502）、杯A 4類（500）、杯A 6類（503）、杯B 2類（504・507・508）、507・508は、高台がやや踏張る。底部回転糸切りの杯B 4類（505・506）、短頸壺（510・511）、細頸壺（512・515）、小型の長頸壺（513・514）、双耳瓶（517・518）、凸帯付四耳壺（516）、甕（571・573）がある。

土師器には、椀A 3類（519～533・535～538・564～566）があり、533は赤彩。534は、赤彩の椀A 5類。椀A 4類（539・542・567）、皿B類（543～546）、544は内黒、546は赤彩。甕A 1類（561）、小型でハケメ調整の甕A 2類（551）、甕B 3類（560）、甕B 4類（552～559）、小型甕3類（549・550）などがみられる。また、棒状尖底の製塩土器（563）がある。

墨書土器は、564「北」、566「柴」と読めるが他2点は不明。蓋494は、立山町上末窯の特徴を持つものでこの他にもみられる。516は、肩に2条の凸帯をめぐらせ小さな耳を付ける壺で信州を中心として出土例が知られている。県内での出土例は、運動公園内遺跡栗山椹原遺跡で1例、吉倉B遺跡で2例（昨年の調査で耳の部分の小破片が1点出土）、大島町北高木遺跡に1例知られている。231の円面硯破片は、包含層出土のものと接合する。

(7) 金属製品（第45図）

金属製品は、上層から下層出土のものを含んでおり刃物・金具・釘・銅物製品・銅銭などがある。下層からは、676・677・681・683・687・688が出土し、古代の鉄製品と考えられる。その他は、中世のものも含んでいる。676・677は、内屈する2枚の菱形の板を目釘で止める金具で、断面円形のものに付けられた飾りあるいは留め金具と考えられる。刃物と考えられるものは、675・679・681～686・690で、刀子であろう。679は、生反りの刃部か。釘と考えられるものは、674・678・687である。673は、板状の銅物破片で鍋の一部かもしれない。688は、一部が、曲げられたようになっており鍵の可能性がある。689は、断面長方形の棒状製品。691は北銭「聖元栄寶」で、初鋳造年は1101年、文字は篆書体である。

古代の鉄製品は、菱形金具（663）・鉄斧（665）・L状の製品（664・671）・刀子（666～669）・紡錘車（670）がある。いずれも遺構覆土からの出土品。

(8) 石器（第44図）

石器には、砥石2点、たたき石4点、すり石6点がある。ほとんどが住居覆土からの出土で、SK137からはすり石が4点まとまってみられた。砥石は、緻密な泥岩製の693・696と河原石の砂岩を利用する697があり、697はSI37のカマド袖石に転用していた。たたき石は、細長い河原石の端部を利用するもので692・694がある。すり石は円形の河原石の縁片部を利用するもので698・699を含め多くみられる。また、SI42ではカマド支脚として利用されていた。（満井）

2　中・近世（第43・44・45図・写真図版24・25）

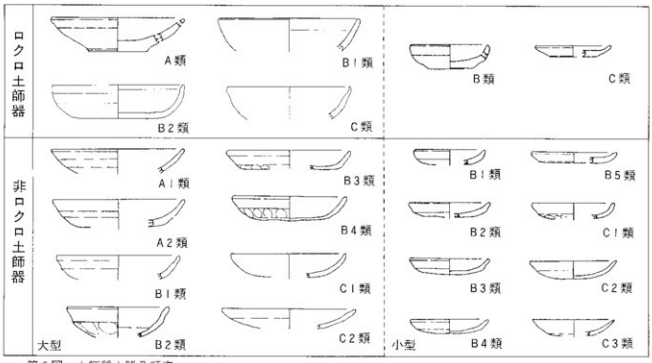
中世の遺物は、土師質土器・珠洲・八尾・青磁・白磁・瀬戸美濃・砥石・銅銭・鉄製品・鉄滓などがある。また、近世の遺物は、越中瀬戸・伊万里などがわずかに出土している。全体の遺物の量は、少ない。

土師質土器　全器形を知ることのできる遺物は少なくほとんどが小破片であるが、ロクロ土師器が全体の半数以上を占める。口径は、約17cmと14cmの大型のものと、口径約10cmの小型のものがある。

ロクロ土師器　大型のものは、口縁がわずかに丸みをおびて直線的に外広するＡ１類（606・634）、やや深めで丸みをおびて外広するＢ１類（636～638・641・642）、椀状となるＢ２類（607）がある。643～652は、Ａ・Ｂ１類の底部と考えられるもの。Ｃ類（639）は、口縁端部を内側する深いもの。小型品では、Ｂ類の640がある。ロクロ土師器は、大型のＣ類が15世紀末～16世紀のもので、あとは12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。中でも、607・642は、ていねいにナデ仕上げされており古い要素と考えられる。

非ロクロ土師器　大型のものは、Ｂ１類（701）、丸みをおびて外広するＣ１類（630）、口縁端部が尖る631・632などがある。小型品は、口縁面取り、強い１段ナデを施すＢ３類（608・623～625）、面取りがゆるくナデを施すＢ２類（627）、丸みをおびた面取りが施されるＢ４類（609）、皿状のＢ５類（610）、丸みをおびて外広するＣ２類（626・628・629）、口縁が折れて外広する611などがある。年代は、大型のＡ・Ｃ３類が12世紀後半～13世紀前半、Ｂ１・Ｂ３類が13世紀前半～中頃、Ｂ２・４類が13世紀中頃～14世紀初め、小型のＢ１・２・５類が12世紀後半～13世紀前半、Ｂ３類が13世紀前半～中頃、Ｂ４類が13世紀中頃～14世紀初め、Ｃ１・２類が14世紀前半と考えられる。（酒井）

その他の遺物　653・654は珠洲の甕、655～658は珠洲片口鉢、659は八尾の甕底部、612・614～618・620は、青磁で、612は劃花文の椀で、614は皿、615～618・620は椀で618・620は蓮弁文、619は白磁の合子蓋、621は瀬戸の瓶子で、613は瀬戸の鉢で火を受けている。660～662は、越中瀬戸で660の内面には印花文がある。　中世の遺物について時期的にグループ分けをすると、612・614・617が12世紀後半～13世紀前半、616・618・620・621・653～659が13世紀後半～14世紀初頭で、613はもう少し降ると思われる。写真図版25中の704～707は中世の鉄滓で、第45図の693・695・708は砥石である。（境）



第６図　土師質土器分類表

VI　まとめ

吉倉B遺跡の出土遺物は、奈良時代・平安時代（8世紀中葉～9世紀末）、平安時代末～鎌倉時代（12世紀後半～13世紀後半）、南北朝時代、室町時代、江戸時代以降のものがある。遺構は、奈良時代・平安時代の竪穴住居・掘立柱建物・穴・溝・河跡と、平安時代・鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・穴・溝がある。そのようなことから、遺跡の中心となる時代は、奈良時代～平安時代と平安時代末～鎌倉時代の二時期である。その二時期の遺構は発見される深さが異なり、遺構が確認される面は約20～30cmの間層がある。また、奈良時代～平安時代も約30cmの間層をはさんで上層と下層の二面の遺構面がある。以下ではそのような遺構の層位的な違いや出土遺物の特徴から、遺構の時期区分を行い、その変遷と遺構の性格について考えたみたい。

(1)　古代遺構の変遷（第7図）

この時代の遺構は、竪穴住居23棟、掘立柱建物11棟、畠2か所、土坑30か所、溝・河20条がある。1993年度の調査と合わせると、竪穴住居47棟、掘立柱建物12棟となる。これらは5期に分けることができる。

時期区分と遺構の変遷　1期は竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、溝・河、土坑がある。2期は竪穴住居7棟となる。1期の掘立柱建物は継続してあったとみたい。3期は竪穴住居6棟となる。河跡の堆積は進み、細いものとなるらしい。4期は竪穴住居4棟、掘立柱建物10棟となる。5期は竪穴住居3棟、畠跡がある。3期と4期の間は間層があり層位的にはっきりと区分される。この間に氾濫などにより多量の土砂が流入したと考えられ、遺跡の継続性においてこの間に他時期とは異なる断絶があった可能性がある。

遺構の年代　各時期の土器を県内の遺跡の土器に対比すると、集落跡では、1期は富山市長岡杉林遺跡の奈良時代の遺構［富山市教委1897］（1992年度報告では長岡杉林遺跡を1期の前に置いたが訂正する）、2期は大島町北高木遺跡［安念1993］（1992年度報告では砺波市高沢扇Ⅱ遺跡［砺波市教委1978］にあてたが、高沢扇Ⅱ遺跡は2期と3期の間または2期の後半から3期にかけての時期にあてたい）、3期は富山市南中田D遺跡SI21、4期は富山市南中川D遺跡SI19、5期は富山市長岡杉林遺跡の平安時代の遺構［富山市教委1897］にあたる。

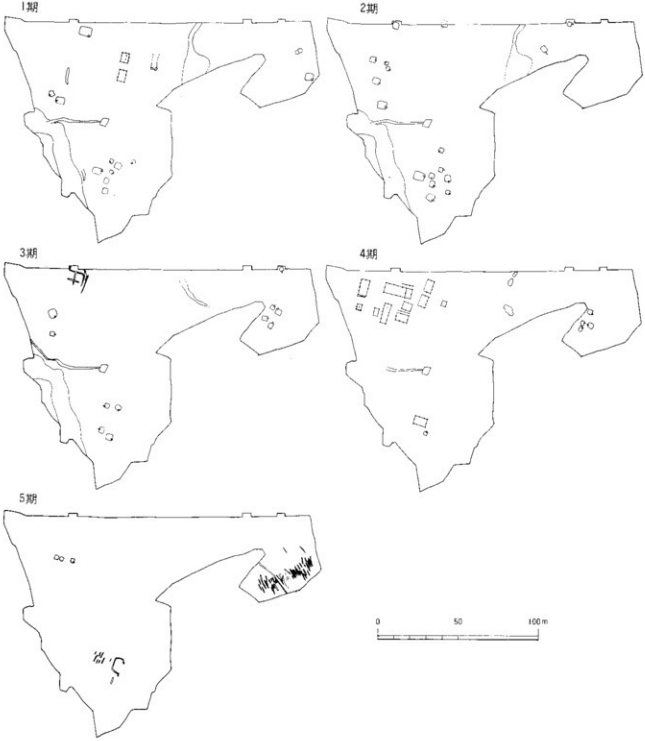
窯跡では、1期は小杉町流通業務団地内№16遺跡2号窯跡［県教委1980］・古沢3・4号窯跡［富山大学考古1989］2期は上末窯谷1号窯跡［富山大学考古1989］、小杉町石太郎J遺跡1号窯跡［県埋センター1992］、3期は富山市室住池1窯跡［池野1988］、4期は井波町大藪遺跡［上野1985］、福光町ハクラクデン窯跡［福光町・医王山文化調査委員会1993］にあたる。

各時期の年代については、1期は8世紀中葉（小杉町流通業務団地内№16遺跡2号窯跡は平城京跡のⅡ段階730年前後にあてられている）、2期は8世紀後葉、3期は9世紀中葉、4期は9世紀後葉、5期は9世紀末から10世紀前葉（富山市長岡杉林遺跡の平安時代の土器は美濃光ヶ丘式灰釉陶器が伴うことから9世紀末から10世紀初めにあてられている）と考える（1992年度報告では、1期は8世紀後葉、2期は8世紀末、3期は9世紀前葉、4期は9世紀中葉、5期はそれ以降としたが少し改める）。

遺跡の性格　1992年度の調査では、竪穴住居が多いこと、出土遺物が食器である須恵器杯・杯蓋・土師器椀、煮炊き用の土師器甕・鍋が主体であること、その他の性格を推測させる特殊な遺物がみられないことから、一般的な集落と考えた。しかし、今年度の調査では掘立柱建物が多く発見され、竪穴住居との関係が問題となった。

掘立柱建物は1期に2棟、4期に9棟がある。1期のSB54とSB53は、いずれも南北棟に主軸を揃え、約4mの間をおいて並んでいる。SB54は建物中央にも柱穴があることから床がある建物と考えられ、高床倉庫と考える。SB53は建物の内側東北隅に炉またはカマドと見られる焼土穴があり、土間の住居または事務所的な建物と考える。SB54の柱穴

から円面硯が出土していることからみて、古代において二宅とか庄所と呼ばれる農業経営の拠点施設であったと考えられる。4期の建物は、SB41は建物の中央にも柱穴があり、高床倉庫と考える。SB50は、建物の中央にかかカマドと見られる焼土があり、七間の住居または事務所的な建物と考える。SB40・48・49・51・52・57・58は倉庫、SB47・55は小さいので納屋のようなものと思われる。これらの建物は重なりがなくしかも棟方向が同じか直交していて、整然と配置されている。建物群は東西の幅が約60mであることから、方形であればその敷地は約4,000㎡（1町の約4分の1）である。建物群に伴うとみられる遺物には、円面硯、緑釉陶器がある。以上のように4期の建物群も2期の建物



第7図　吉倉B遺跡古代遺構の時期別配置

と同様な性格が想定される。掘立柱建物群の周辺には、同時期の多くの竪穴住居が存在していた。竪穴住居は一般農民のすまい（古代の家族単位である戸戸にあたると考えられる群をなす）であり、掘立柱建物は竪穴住居に住む人々の生産活動を支援し、生産物を収納する施設と考える。竪穴住居に住む人々の生産活動を考えるうえで注目される遺物には、漁網用の土錘、糸をつくる道具である紡錘車などがあげられる。この集落では、鮭や鮭などの捕獲や布の生産が行われていたことを物語る。古代にはこれらは調や庸と呼ばれる税であった。掘立柱建物では、租稲の収納・管理のほかにもそのような生産物の収納・保管、祭祀などへの送付などの作業が行われていたのであろう。

吉倉B遺跡は、東大寺などの庄園設定以前から集落の形成が始まることや、この地域が中世には太田保と呼ばれ、もとは国衙領であったと考えられること［富山市史編纂委1987］などから、国衙または郡衙の主導により誕生した開墾集落と考えたい。ここは神通川の氾濫原にあたり、奈良時代以前には集落がみられないことからわかるように、自然に集落ができるような環境ではない。その意味で今年度発見された墨書土器「城長」は注目される。これを「きのおさ」と読むと、郷長、里長などと同じ職名とみることができる。城は、沼垂城（柵）や多賀城にみられるように東北地方に築かれた国府クラスの開発・統治拠点であるが、近年、新潟県八幡林遺跡では、「石屋木」と記した墨書土器が出土し、木が城や柵の当て字である可能性が指摘されている。［新潟県・和島村教委1993］文献に見られないような小さな城があったことが予想される。今回の掘立柱建物が城にあたるのかどうかは今後の調査で明らかになるであろうが、このような開墾集落の開発拠点が城と呼ばれていた可能性があろう。（久々）

(2) 墨書土器について

吉倉B遺跡では、今年度の調査で31点の墨書土器が出土し、試掘調査時の4点［富山市教委1989］、一昨年度の8点［県埋文センター1992］、昨年度の14点［県埋文センター1993］と合わせ57点が出土した。これまでの富山県総合運動公園建設に伴う調査によって墨書土器が出土した遺跡は、他に栗山権原遺跡［富山市教委1989・県埋文センター1990］・南中田D遺跡［富山市教委1989・県埋文センター1991］がある。第8図・表4では吉倉B遺跡出土の墨書土器中、今年度分と昨年度分を示した。

出土した墨書土器中特に注目されるのは、「城長」（7）であろう。また、「長」（4・5？）のみ書かれたものも出土しており、「城長」と同様の意味を持つものと思われる。当遺跡の北に隣接する任海宮田遺跡からも「城長」「長」の墨書が出土しており［県埋文センター1992］、関連が注目される。この文字は役職を表すものと考えられるが、文献等によると付近に城・柵等があったという記述はみられない。ただし、時期的にはかなり新しくなるが、当地域は平安時代末、寿永3年（1184年）の後白河法皇の院宣を奉じて源頼朝が沙汰させた「賀茂社領新保御厨」の比定地の一つとして挙げられている［富山県1976］。直接的にでも間接的にでも関係があるかどうかは不明であるが、何らかの形での荘園形成等が営まれ、付近を統括するような施設があったのではないかと思われる。

次に「柴」（20・21・31・36・42）・「真」（3・13・25・39）が多く出土している事例が挙げられる。今年度出土した「柴」の文字に、「柴土」（20）と読めるものがある。ただし、「柴」と「土」の文字のバランスが不釣り合いであり、欠損している高台部分にも続いていた可能性を考えると、「土」の部分は「寺」の一部の可能性がある。

「寺」だとすると、任海宮田遺跡では「観音寺」・「寺」の文字が出土していることから付近に古代寺院が存在した可能性が挙げられる。また、「柴」の文字は、一昨年度の調査においても出土しており、うち1点には「柴家」と書かれている。同じ「柴」の文字でもそれぞれの筆跡はまちまちで、同一人物によって書かれたとは考え難い。このことから、「真」の文字も同様に、一昨年度の調査で2点出土している。今年度・昨年度の調査では1字のもののみであるが、一昨年度の調査ではいずれも「真中子」と書かれている。また、「中子」とのみ書かれたものも2点出土している。「真」は人名を表していると思われ、昨年度の調査で発見された「山？吉万呂」（35）・「□子」（34）・「子」（18）「林」（26）なども同様と思われる。「林」は、栗山権原遺跡・南中田D遺跡から「子林」「□林」が多く出土している

ことから、人名を表しているものと考えるものである。字体は、これらの遺跡出土のものとはやや異なる。栗山楮原遺跡と南中田D遺跡のものは筆跡が似ているとされている。[県埋文センター1991]

吉谷B遺跡出土の墨書土器は、須恵器51%・土師器49%の割合で書かれており差はみられない。南中田D・任海宮田遺跡においても同様に差はみられないが、栗山楮原遺跡では全てが土師器に書かれている。器種ごとにみてみると、須恵器杯78%・杯蓋22%、土師器椀95%・皿5%の割合になり、須恵器においては杯に書かれているものが多く、土師器においては圧倒的に椀に多く書かれる。これは、栗山楮原・南中田D・任海宮田遺跡においても同様の傾向がみられる。さらに、土師器の場合、赤彩22%・内黒5%・その他73%の割合になる。南中田D・任海宮田遺跡は、赤彩・内黒土師器が1点ずつあるのみだが、栗山楮原遺跡では赤彩土師器が全体の40%を占める点が興味深い。書かれている部位をみてみると、底部外面に書かれているものが多く、他の遺跡においても同様な事がいえる。体部に書かれているものの多くは土師器椀である。文字の向きは正位・横位・逆位のいずれもほぼ同じ割合になる。このようにみて

第8図　墨書土器一覧・分布図

表4　墨書土器一覧

いくと、栗山楮原遺跡を除く3遺跡はほぼ同じ特徴を持つ。これは、栗山楮原遺跡の時期が新しいためなのか性格によるものなのかは今後の検討としたい。

吉谷B遺跡でこれまで出土した墨書土器は、大きく5か所に分布の集中がみられる。うち、1か所は北側一昨年度調査区西側、2か所は昨年度の調査区、2か所は今年度の調査区である。また、今年度調査区の北端付近には比較的多い分布がみられ、来年度以降の調査で多くの出土が予想される。4か所は掘立柱建物・竪穴住居の集中がみられる所である。しかし、出土量の多い「栄」「真」がある特定の集中地点にのみ分布するというわけではない。時期的には、昨年度調査区内の竪穴住居群周辺のものが最も古く8世紀後葉～末、その他はおおよそ9世紀中頃以降である。時期的に文字の差もみられない。

当遺跡の黒書土器は、富山県総合運動公園建設に伴い調査され墨書土器が出土した他の遺跡と比べ、量・書かれた文字の種類共に群を抜く。周辺の遺跡をみてみても40点近い数の墨書土器が出土した任海宮田遺跡に匹敵するものである。任海宮田遺跡は、一部が調査されただけであるがこの周辺における中心的な役割を果たしていた集落であった可能性が高い。当遺跡も、「城長」の文字や掘立柱建物群等からみて、やはりある程度中心的な役割を持った集落であったと考えられる。

(3) 土錘について

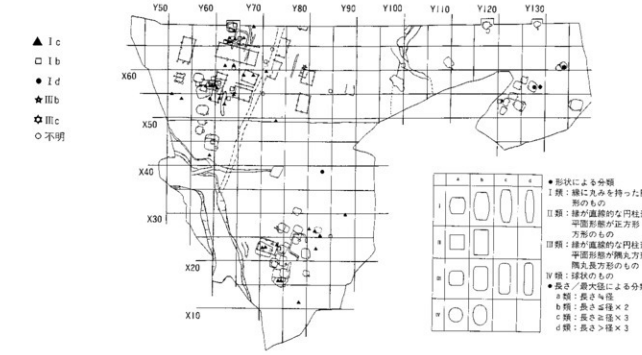
昨年度・今年度の調査で、吉谷B遺跡からは79点の管状土錘が出土している。これらは、9C後半のものがほとんどである。この数は、これまでの富山県総合運動公園建設に伴って調査された遺跡中、栗山楮原遺跡の96点に次ぐ多さである。その他の遺跡を見てみると、多くて20点程度で、せいぜい数点の所が多い。特に、栗山楮原遺跡は約5,000㎡の遺跡の出土量であり、面積当たりの出土量は吉谷B遺跡に比べぐんと高くなる。このことは遺跡の性格を考えるうえで興味深い。ここでは、まとまった量が出土した吉谷B遺跡と栗山楮原遺跡の土錘の比較を行なう。当遺跡と栗山楮原遺跡の存続時期を見ると(第9図下)、古代において吉谷B遺跡が衰退してゆく9世紀の終わり頃の時期に、栗山楮原遺跡において集落の形成が始まる。そして、比較的短い期間で衰退する。吉谷B遺跡の土錘の多くは、9世紀後半の遺物包含層及び遺構内より出土しており、時期的には栗山楮原遺跡と一部重なるか連続する。

まず、両遺跡より出土した土錘を見てみると、その多くが欠損品である。さらに、吉谷B遺跡において特に顕著であるが、手で握るなどして整形した断面がやや歪んだ楕円形をしているものが比較的目に付く。欠損の仕方は、データーとしては取っていないが、端部の欠損・真二つに縦に割れたものが多い。土錘を網に固定して使用したための欠損と思われるものが幾つもみられた。なお、細かく砕けたものは、栗山楮原遺跡に多い。使用によって側縁が摩滅したものがみられた。摩滅の仕方は土錘の使用法を考えるうえで重要と思われるが、この検討においては機会を改めたい。また、両遺跡の土錘をみてみると、栗山楮原遺跡の方が丁寧に作られたものが多い。まず、両遺跡の土錘を側面からみた形態によって分類した(第10図・表5)。分類については、山本直人氏の分類「山本1986」に沿って分類し、さらに両端部を面取りしたもの(①)・片方の端部のみを面取りしたもの(②)・面取りしないもの(③)に分けた。これは、製作時の技法によるものと思われる。吉谷B遺跡では①が多く半数以上を占め、次に②③の順になる。しかし、栗山楮原遺跡では全く逆の順で③が最も多くなるが、②・①との差は少ない。

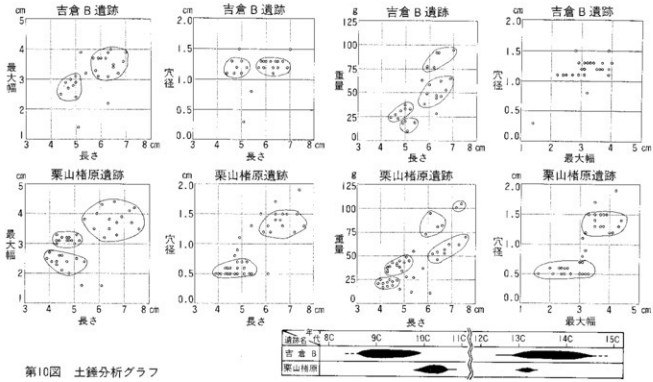
また、①のタイプのものには、吉谷B遺跡ではみられない両端が細く胴部が大きく張った形態のものが比較的多くみられる。土錘の形態をみてみると、吉谷B遺跡ではⅠc類が圧倒的に多く、次にⅠb類が多い。他の形態のものは極少ない。次に栗山楮原遺跡ではⅠb類がほとんどを占め、Ⅰc類はぐんと少なくなる。また、Ⅰa類・Ⅰd類といった吉谷B遺跡ではまったく見られなかったり、数が少ない形態のものが比較的目につく。Ⅲ類の土錘は、薄く作りも丁寧で他の土錘とは異質の感があることから混入の可能性もあると思われる。

次に、長さ・最大幅・穴径・重量のデーターを基に分析をした。第9図の分布図を見ると、両遺跡の分布状況が大

きく異なる。長さは、両遺跡ともに長・短２種類が認められた。しかし、長さを基準として最大幅・穴径についてみてみると、両遺跡の間で差が現れてくる。まず、最大幅についてみてみると、吉倉Ｂ遺跡においては長いものは最大幅も大きく短いものは最大幅も小さい。しかし、栗山楮原遺跡では長さの短いものが最大幅の大・小で更に２つに分かれる。次に、穴径についてみてみると、吉倉Ｂ遺跡では長さに関わらずほぼ1.1～1.3cmの間であるのに対し、栗山楮原遺跡では長さが長いものが１～1.5cmに、短いものが0.5～0.7cmに分布する。さらに、最大幅と穴径に関わらず同じであるのに対し、栗山楮原遺跡では最大径が大きいものは穴径も大きく、最大幅の小さいものは小さい。このとき



第９図　土錘分類・分布図



第10図　土錘分析グラフ

遺跡名	番号	出土区	長さ(cm)	最大幅(cm)	最小幅(cm)	穴径(cm)	重量(g)	タイプ
[illegible]	1	54・55,121	6.5	3.5	1.2	1.2	82	b-①
[illegible]	2	57,129	4.9+	1	1.5	0.4	10	b
[illegible]	3	70,68	4.6	2.9	2.1	1.3	27	c-①
[illegible]	4	70,54	5.1+	2.3+	1.8+	1.2	10+	b
[illegible]	5	67,64	5.0	2.4	1.7	1.1	20	b
[illegible]	6	53,62	5.1	2.7	2.0	1.1	17+	c-②
[illegible]	7	59,68	4.8+	2.9	2.2+	1.2	10+	c
[illegible]	8	54,121	6.9	3.6	2.2	1.2	65	c
[illegible]	9	62,71	3.8+	3.3	2.2	1.3	33+	b?
[illegible]	10	SK139	3.7+	3.7	1.7	0.9	33+	b-②
[illegible]	11	54,61	5.9	3.1	2.3	1.3	49	c-①
[illegible]	12	67,63	5.8	3.3	2.0	1.3	38	c-①
[illegible]	13	61,62	7.0	3.9	3.0	1.5	95	c-①
[illegible]	14	61,64	3.8+	3.9	2.2	1	35+	c-②
[illegible]	15	67,64	5.7	3.7	2.0	1.2	6.3	c-②
[illegible]	16	SK135	5.3	4.3	2.9	1.5	62+	c
[illegible]	17	55,70	5.3+	2.7	2.3	1.2	14+	b-②
[illegible]	18	SK138	4.8	3.0	1.8	1.2	31	c
[illegible]	19	67,65	5.6+	2.4+	2.1+	1.3	12+	b-②
[illegible]	20	62,64	2.4+	2.2+	1.5+	0.8	6+	-
[illegible]	21	68,64	1.2+	2.1+	-	1.2	2+	-
[illegible]	22	59,69	6.5	3.4	2.0	1.3	46	c
[illegible]	23	67,69	4.0+	2.9+	1.6+	1.4	12+	c
[illegible]	24	66,60	2.9+	3.2+	-	1.5	12+	-
[illegible]	25	64,62	3.2+	2.8+	-	1.2	8+	-
[illegible]	26	68,63	6.2	3.7	2.2	1.3	77	c-①
[illegible]	27	68,63	6.3	3.1	2.1	1.1	47	b-②
[illegible]	28	70,64	6.1	2.4+	1.8+	1.2	17+	b-②
[illegible]	29	60,71	3.6+	2.4+	1.9+	1.5	11+	-
[illegible]	30	58,64	3.9+	2.0	1.9	1.1	7+	b.c?
[illegible]	31	70,64	2.8+	2.3+	2.0+	1	9+	-
[illegible]	32	57,57	5.5+	2.9	2.1	1.1	33+	b-②
[illegible]	33	69,64	6.7	3.2	2.0	1.3	53	b
[illegible]	34	67,57	4.9+	3.6	2.2	1.3	49+	c
[illegible]	35	69,64	6.4	4.0	2.2	1.3	92	c
[illegible]	36	57,58	6.2	3.3	2.1	1.1	44+	c
[illegible]	37	68,63	5.0	3.1	2.0	1.3	33	c-①
[illegible]	38	SK137	3.9+	2.3	2.0	1.2	11+	-
[illegible]	39	60,71	3.6+	3.4+	2.4+	1.2	17+	-
[illegible]	40	60,71	5.2	3.9	2.0	1.2	33	c
[illegible]	41	61,79	5.4	2.3	2.0	1.1	24+	b
[illegible]	42	57,60	4.9	2.8	2.0	1.5	18	c-①
[illegible]	43	55,64	6.4	3.7	2.1	1.1	68+	c-①
[illegible]	44	54,59	4.8	3.1	2.1	1.1	29+	c-②
[illegible]	45	-	5.9	3.7	2.3	1.2	76	c-①
[illegible]	46	66,49	4.3+	3.2+	-	1.5	11+	-
[illegible]	47	65,66	8.1	2.5+	2.0+	1.1	21+	b
[illegible]	48	54,63	7.0	3.2	2.5	1.5	34+	b
[illegible]	49	64,72	5.5+	4.1	2.6	1.6	35+	c-①
[illegible]	50	SK135	6.3	3.1	2.0	1.2	44	b
[illegible]	51	SK135	5.0	2.4	2.2+	1.4	15+	c-②
[illegible]	52	SK137	5.3	2.8	2.0	1.3	22+	b-①
[illegible]	53	58,60	5.2	-	1.9+	1	10+	b-②
[illegible]	54	55,51	4.8+	3.4	2.4+	1.2	21+	c-①
[illegible]	55	67,62	2.9+	-	1.7+	1.2	4+	-
[illegible]	56	S101	5.0	2.9	1.9	1.1	37	c-①
[illegible]	57	23,82	5.9	3.7	2.4	1.2	77.5	c-①
[illegible]	58	39,83	5.1	1.4	0.9	0.3	10	d
[illegible]	59	S11	4.4	2.5	1.8	1.1	24	c
[illegible]	60	P148	6.0	3.6	2.3	1.2	41+	c-①
[illegible]	61	23,74	3.3+	2.8	2.0	1.2	19+	b-①
[illegible]	62	S16	6.3	3.9	2.2	1.1	92	c-①
[illegible]	63	SK2	4.7	2.7	2.0	1.1	23	c
[illegible]	64	S11	4.7	2.5	2.1	1	24+	b
[illegible]	65	SK1	5.3	3.2	2.1	1.2	38	c-①
[illegible]	66	SK67	6.0	3.2	2.1	1	31+	c
[illegible]	67	54,53	6.7	4.0	2.5	1.3	91	c-①
[illegible]	68	S18	3.0+	3.0	2.0	1	14+	c
[illegible]	69	42,59	3.8+	3.1	1.9	1	26+	c-②
[illegible]	70	30,88	6.0	3.7	2.1	1.3	58	c
[illegible]	71	SK1	4.2+	3.4	2.0	1.2	32+	b
[illegible]	72	SD89	6.3	3.4	2.1	1	51+	c
[illegible]	73	27,80・81	8.3	3.7	2.2	1.2	65	c
[illegible]	74	44・46,58・61	5.8+	2.8	2.0+	1.5	21+	b
[illegible]	75	13,81・26	3.1+	2.0+	1.4+	1	5+	-
[illegible]	76	22,76	2.6+	2.5+	2.0+	1.1	6+	-
[illegible]	77	61,134	6.3	2.2	1.6	1.1	28	c-②
[illegible]	78	S139	5.4	3.2	1.3	0.8	-	b
[illegible]	79	57,128	2.7	1.5	1.0	0.5	-	d
[illegible]	1	39,21	5.4	2.4	1.1	0.5	27	c-②
[illegible]	2	41,22	5.2	3.1	1.2	0.7	45	b-②
[illegible]	3	40,23	5.9	4.0	2.0	1.2	73	b-②
[illegible]	4	39,21	6.4	3.5	2.0	1.4	46	b-①
[illegible]	5	38,25	5.0	3.0	1.4	0.7	43	b-①
[illegible]	6	40,19	4.0	2.7	0.7	0.5	25	b-①
[illegible]	7	41,22	7.2	4.1	1.8	1.2	101	b-①
[illegible]	8	40,21	6.4	3.8	2.3	1.5	81	b-②
[illegible]	9	38,21	6.9	3.9	2.1	1.5	62	b-②
[illegible]	10	37,19	6.7	3.7	1.7	1.3	53	b

遺跡名	番号	出土区	長さ(cm)	最大幅(cm)	最小幅(cm)	穴径(cm)	重量(g)	タイプ
[illegible]	11	-	4.9	3.1	1.8	1.1	34	b-②
[illegible]	12	41,22	4.5	2.1	0.8	0.5	19	c-②
[illegible]	13	41,22	4.1	2.4	0.7	0.5	21	b-①
[illegible]	14	40,23	3.9	2.5	0.7	0.5	21	b-③
[illegible]	15	41,23	4.1	2.4	0.8	0.5	17	b-③
[illegible]	17	39,26	5.8	3.5	1.8	1.5	37	b-②
[illegible]	18	43,20	6.1	4.3	1.8	1.3	95	b-②
[illegible]	19	43,21	5.1	3.3	0.8	0.6	49	b-①
[illegible]	20	43,21	4.4	3.1	0.8	0.5	39	b-①
[illegible]	21	43,21	4.5	3.2	0.9	0.5	43	b-①
[illegible]	22	43,21	4.3	3.1	0.8	0.5	38	b-①
[illegible]	23	43,21	4.3	3.0	1.0	0.5	33	b-②
[illegible]	24	43,20	4.7	3.2	0.8	0.5	42	b-②
[illegible]	25	43,21	4.8	3.2	0.8	0.5	38	b-①
[illegible]	26	43,21	2.7+	3.0+	0.9+	0.5+	27+	a
[illegible]	27	33,24	7.4	4.2	2.4	1.9	105	b-①
[illegible]	28	34,22	5.4	3.8	1.8	1.3	55	b
[illegible]	29	34,33	6.7	3.3	2.0	1.5	57	c-②
[illegible]	30	-,29	6.4	3.5	2.4	1.7	54	b
[illegible]	31	41,21	6.2	3.2	1.7	1.2	52	b-②
[illegible]	32	43,20	4.8	3.1	1.1	0.7	38	b-①
[illegible]	33	47,-	6.1	1.6	0.9	0.5	11	d
[illegible]	34	43,19	5.3	1.6	0.9	0.5	12	d
[illegible]	35	49,22	4.9+	1.7	1.1	0.5	12+	c
[illegible]	36	45,24	6.6	4.4	2.7	1.4	82	b-②
[illegible]	37	43,25	6.0+	3.7+	2.2+	1.7+	60+	b
[illegible]	38	51,30	6.0+	4.0+	1.7+	1.2+	52+	b
[illegible]	39	27,21	6.5+	1.8+	1.8+	1.3+	47+	b
[illegible]	40	48,25	5.8+	3.0+	1.9+	1.6+	33+	b-②
[illegible]	41	47,26	6.2+	3.3+	1.8+	1.6+	34+	b-①
[illegible]	42	[illegible]	4.6+	2.6+	1.6+	1.2+	22+	b
[illegible]	43	44,26	3.8+	3.2+	1.5+	1.3+	21+	b
[illegible]	44	50,25	5.2+	3.1+	1.5+	1.3+	19+	b
[illegible]	45	40,23	6.1+	3.4+	2.3+	1.5+	36+	b-②
[illegible]	46	45,19	5.9+	3.4+	2.0+	1.5+	37+	b-①
[illegible]	47	28,26	6.1+	3.2+	2.2+	1.5+	33+	b
[illegible]	48	41,21	3.8+	3.2+	1.9+	1.5+	16+	-
[illegible]	49	40,22	3.5+	3.0+	2.2+	1.6+	17+	b
[illegible]	50	37,28	4.4+	2.8+	1.5+	1.4+	15+	b
[illegible]	51	57,30	6.3+	3.5+	1.9+	1.3+	39+	-
[illegible]	52	40,24	5.6+	2.8+	1.4+	1.4+	18+	c
[illegible]	53	SD139	3.7+	3.6+	1.5+	1.4+	9+	b
[illegible]	54	SK66	4.6+	2.7+	1.7+	1.8+	14+	b
[illegible]	55	SK174	6.3+	2.5+	1.3+	1.1+	27+	c
[illegible]	56	SK195	5.4+	2.9+	1.6+	1.3+	20+	b
[illegible]	57	SK243	5.8+	3.2+	1.8+	1.2+	37+	b-②
[illegible]	58	SK245	5.2+	3.5+	2.4+	1.7+	47+	b
[illegible]	59	SD172	4.3	3.0	0.8	0.5	34	b-②
[illegible]	60	SD172	4.3	3.3	0.8	0.5	37	b-①
[illegible]	61	SD172	5.1	2.5	0.9	0.6	28	c-①
[illegible]	62	SD172	4.5	2.6	0.9	0.6	23	b-①
[illegible]	63	SD172	4.3	2.4	0.8	0.6	22	b-②
[illegible]	64	SD172	4.0+	2.7+	0.9+	0.5+	16+	b-②
[illegible]	65	SD172	4.7	2.4	0.7	0.5	24	b-②
[illegible]	66	SD172	4.3	2.3	0.9	0.6	18	b-①
[illegible]	67	SD172	4.8	2.0	0.8	0.6	15	c-②
[illegible]	68	SK405	4.7	3.1	1.2	0.8	40	b-②
[illegible]	69	SK405	4.4	2.6	0.9	0.6	25	b-③
[illegible]	70	SK239	6.3+	4.0+	2.1+	1.5+	45+	b
[illegible]	71	SK239	6.0+	2.7+	-	1.3+	17+	b
[illegible]	72	SD173	7.8	3.5	1.8	1.3	70	c-②
[illegible]	73	SD173	4.8	3.2	1.1	0.9	46	b-②
[illegible]	74	SD173	7.3	3.7	1.7	1.5	62	b-①
[illegible]	75	SD173	5.1+	2.8	1.8	1.4	25+	b-②
[illegible]	76	SD173	4.7	3.1	2.0	1.4	24+	b-②
[illegible]	77	46,24	5.8+	3.2+	1.7+	1.5+	23+	b
[illegible]	78	39,21	5.5+	3.2+	1.5+	1.1+	22+	b
[illegible]	79	48,25	5.6+	3.3+	1.8+	1.2+	29+	b
[illegible]	80	40,25	4.5+	2.4+	1.5+	0.8+	16+	b
[illegible]	81	49,29	4.4+	3.1+	1.3+	1.2+	12+	-
[illegible]	82	48,27	3.6+	2.6+	1.6+	1.1+	13+	-
[illegible]	83	39,20	3.0+	2.5+	1.4+	1.3+	8+	-
[illegible]	84	43,24	3.8+	2.7+	1.4+	0.7+	11+	-
[illegible]	85	40,25	3.1+	2.8+	1.4+	1.1+	9+	-
[illegible]	86	38,24	3.1+	2.3+	1.1+	1.1+	5+	-
[illegible]	87	-	3.2+	2.6+	1.2+	1.0+	9+	-
[illegible]	88	37,24	3.6+	2.0+	0.8+	0.9+	5+	-
[illegible]	89	54,24	3.7+	2.4+	1.3+	1.1+	8+	-
[illegible]	90	37,27	3.7+	2.2+	1.4+	0.7+	8+	-
[illegible]	91	38,24	3.4+	1.8+	0.9+	1.0+	4+	-
[illegible]	92	35,26	2.5+	2.5+	1.1+	1.0+	5+	-
[illegible]	93	-	3.0+	1.8+	1.1+	0.8+	6+	-
[illegible]	94	-	3.1+	1.5+	1.1+	0.8+	5+	-
[illegible]	95	SD173	5.3+	2.5+	1.2+	1.1+	13+	-
[illegible]	96	SK239	4.6+	3.4+	1.8+	−	17+	-

表5　土錘一覧

最大幅の小さい2つのグループは、穴径においては差がみられない。

さらに、出土状況をみてみると両遺跡ともに包含層出土のものが多く、遺構内出土のものは全体の1／4程度である。かつ、吉倉B遺跡において遺構内より出土したものは、そのほとんどが竪穴住居内出土である。吉倉B遺跡の分布状況を第10図でみてみると、遺構が集中する西側2か所に大きな集中がみられる。東側の竪穴住居集中地でも若干の分布がみられるが数は少ない。さらに、形態と分布の状況の関係をみてみると、圧倒的に数の多いⅠc類は、西側2ヶ所の集中地点に比較的まとまってみられる。Ⅰb類は、基本的にはⅠc類の分布に重なるが、より狭い範囲に集中してみられる。Ⅰd・Ⅲb・Ⅲc類は、絶対数が少なく特徴をとらえられない。

散布図による結果をみると、柴山権原遺跡の方が吉倉B遺跡より分化が進んでいるといえる。形態分類をみると栗山権原遺跡の方が吉倉B遺跡よりずんぐりした形態のものが圧倒的に多くなる。その中で、長さや穴径・最大幅を変え、各種用途にあった形態の土錘を作ったと考えられる。このような土錘の形態の変化の背景には、漁の対象の変化や新しい漁の方法の開発があったものと思われる。（越前）

(4) 古代遺物の分布

ここでは、平成4年度の調査区も含めて、古代遺物の同一個体の破片の分散状況についてみてみたい。いくつかの個体について接合関係を調べ第11・12図に示した。

第11図には須恵器蓋・杯・壺、土師器椀の25点について分散状況を示した。図示した遺物は、26・78・143・311・347・349・385・386・391・392・393・397・408・409・431・440・454・488・490・494・503・511・515・517・524である。これらのうち26はSI27に、78はSI32に、143はSI38に、347・349は配石遺構にそれぞれ伴うと思われる。

それぞれの遺物はある程度の広がりをもって分散するものの、西側の遺構群と東側の遺構群でまとまりをもちY95～Y120の遺構が少ない地区にはその広がりは及んでいないのがみてとれる。これはこの古代の段階において東側居住区と西側居住区（あるいは公的利用区域）との間を遮るものがあったことを示しており、それがSD132・139などの自然流路であったと思われる。この流れは長い間日常生活において利用されていたと考えられるが、同時に東西の往来に制約を加えていたとも考えられる。

第12図には、須恵器甕の分散状況を図示した。568（■）は、SI36に伴う。土器破片数が少ないのは、それぞれの破片がかなり大きかったからである。569（▲）は、SB53の柱穴内から出土していることからSB53・54の建物群に伴う土器と考えられる。570（△）は、配石遺構の中央から大きめの破片がまとまって出土していることからこの遺構に伴うと考えられる。573（□）は、調査区東側北寄りの包含層に分散する個体である。574（○）は、平成4年度調査区における、河跡際から多くの破片が出土した個体である。口縁部など図示した部分は、平成4年度出土のものである。575（●）は、SI27に伴う土器で、多くの破片が住居内から出土している。

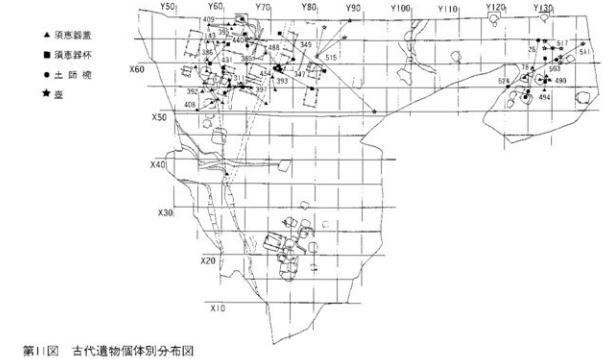
各個体は第11図の結果と同じく、東側と西側でそれぞれまとまりをみせる。さらに東側では分散しながらも遺構を中心としてある程度のまとまりをもつようである。最も広範にしかも乱雑に分布する569もSD132・139を越えることはなく、このことからも西側区域と東側区域が分断されていたことがわかる。

また、569は第1期で、570・575は第4期であることから考えると、古いものほど広範に分布する傾向があると言える。遺跡が集落としてのひとつのまとまりを持って存続していた以上、古いものほど激しく分散する可能性があるのは当然のことであろう。残念ながら南中田D遺跡との遺物の接合関係を検討する余裕はなかったが、当遺跡の南側から出土する遺物に関しては、南中田D遺跡と接合関係を持つものもある可能性があり、この点については今後検討していきたい。

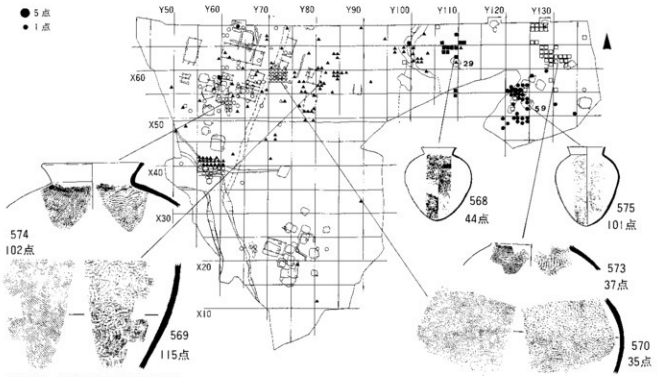
SB53・54に伴う569と574はともに昨年度の調査区の河跡際から多くの破片が出土している。569のように使用場所をほぼ確定できるものが河跡際から多く出土していることから、土器の廃棄場所、それも完形品としての廃棄ではなく、

破片（いわばゴミ）としての廃棄場所であるという点からこの河跡際の利用のされ方がわかる。この河跡は、遺跡南西から伸びており幅約10～15m、深さ約30～60cmで、X40の辺りでL字状に折れて西側遺跡外に流れていき、1期～3期の遺物が出土することから4期以降には埋まっていたと考えられる。L字に折れる際は、礫とともに土器が投げ込まれており、礫に潰された状態で多くの土器が出土している。

また、蛇足ながらSI27に伴う575は、下部の焼成不良な部分に煤が付着し、その部分だけは同住居の西隣のSK121から出土している。これは、遺物の分散というよりも、再利用という点で注目したい。（境）



第11図　古代遺物個体別分布図



第12図　須恵器壺個体別分布図

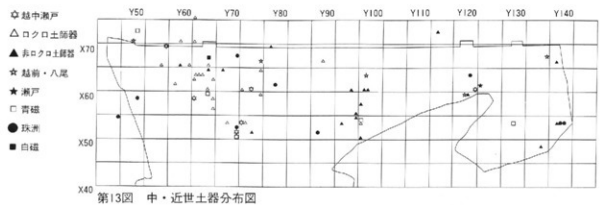
(5) 中世遺物の分布と器種組成

今回の調査で出土した中世土器は少なく、個体識別による総点数は65点で、昨年に比べ約1／5ほどである。第13図に示した分布図は、今年度調査区の遺物分布である。また、昨年の出土品と同一個体はカウントしていない。遺物には土師質土器・珠洲・瀬戸・瓷器系陶器・青磁・白磁があり、土師質土器を除き集中傾向はみられない。土師質土器は、ロクロ土師器と非ロクロ土師器の分布に違いがみられる。ロクロ土師器は、SB42を中心とした地区に多くみられ、SB43・46の建つ東側地区では、1点がみられるだけである。非ロクロ土師器では京都系とされる2段ナデを施すものや小型のB3類などが共存してみられる。量比は少ないが、SB43付近に2段ナデの椀がみられ、時期差を示しているのかもしれない。また、やや深い椀状の器形となる 642など口縁端部の面取りを比較的顕著に残す例などもあり、古い要素と考えられる。その他、15世紀以降の土師質土器はX60 Y120より東側から多く出土している。

器種組成では、土師質土器の比率が全体の約65%を占めている。昨年の比率をみると約65%と同率となっている。しかし珠洲をみると壺・甕の比率は変わらないが、昨年は片口鉢が19%を占めていたにもかかわらず、今年度は6%と約1／3ほどと少なくなっている。その他の器種をみると昨年の比率と大きく変化するものはみられず一定量が集落内で使用されていたと考えられる。また、在地の瓷器系陶器である八尾についてみると昨年が約2%(7点)、今年度約8%(5点)とかなりの比率で認められる。同地内の南中田D遺跡では 1.5%(7点)の出土があり窯に近いという地理的な要因を除いても一定量の供給が行われていたと推測できる。

器種組成は、格式の高い遺跡ほどたくさんの土師器が使われ、発掘面積当たりの出土量も多いことが知られている。また、調理具の率も少ないなどの傾向を示すとされている。今年度の調査区では、調理具とされる珠洲鉢の比率が少なく、昨年とはやや異なった比率となっている。このような遺跡内での量比の変化がどのような要因で生まれるのか、遺跡全体や建物群をどのようにとらえるのかが問題であろう。

中世土器器種組成円グラフ



第13図　中・近世土器分布図

(6) 中世遺構の変遷

今年度調査で確認した掘立柱建物は6棟、昨年検出した建物を合わせると42棟で、運動公園内では最大規模の中世集落と考えられる。また、集落の存続時期は12世紀後半～14世紀中頃までの約200年と推定している[酒井1993]。集落の存続時期は昨年の調査所見と異なるところはないが、昨年の調査で中世後半としたSD5は、この集落を含め流域の基幹的な用水路としての機能を持ち、現代まで（ほ場整備以前まで）流路をほとんど変えず利用されていたことを確認した。そのため、前半の北西部分の建物変遷が大きく変わることになったが、3期以降に変化はない。

Ⅰ期　SD27を挟んで西側と東側に建物群が作られ、大型の建物SB42・27やSB31を中心に2～3棟単位1ブロックとして集落が成立している。SD27は、用水的性格を持ちⅡ期に引き続き存在する可能性がある。

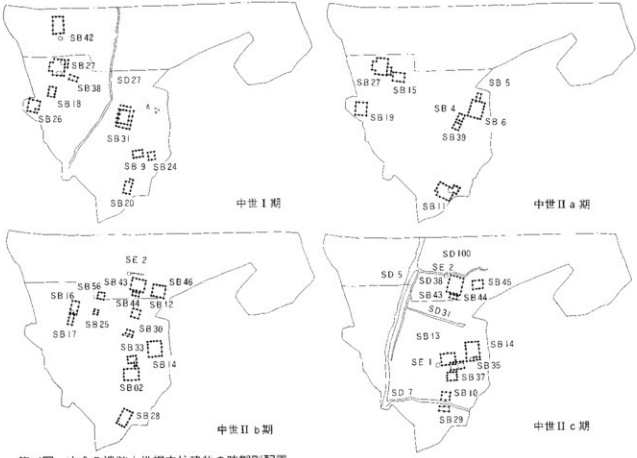
Ⅱ期　集落が安定しはじめ、後半には区画溝を持つ集落として成立する。

Ⅱａ期　SB27・19とSB6・11を中心とした4単位の構成となり個々の建物が独立した配置となる。

Ⅱｂ期　集落が次第に大きくなり、小型の建物が増加し、西側の建物が東へと移動を始めSB44・46などが建てられる。建物単位は、SB16、43・46、14、2、28など6単位4ブロックとなる。

Ⅱｃ期　基幹用水・区画溝SD5・38－3などが設けられ、集落が再編成される。区画は、大きくSD7・31・100により南北が区切られ区画内に建物が配置される。建物は、全てが東側の区画へ移動する。また、SB14・13・35・3が集落の中心的な建物群となる。用水SD5の東側には、道が整備され集落機能が充実された大きな画期と考えられる。遺構の年代は、Ⅰ期が12世紀後半から13世紀初め、Ⅱ期が13世紀前半から後半と考えられる。

遺跡の性格は、出土遺物の器種組成からみると、じょうべのま遺跡C地区と若宮B遺跡の中間的な組成率となっている。両遺跡は、集落の領主あるいはそれに近いクラスと位置づけられている。吉倉B遺跡は、建物配置や変遷などをみると必ずしもそのような階層が恒常的に生活したと推測できる根拠を持たない。しかし、器種組成や中央建物群を積極的に評価すると集落を管理する階層を備え、開墾に従事した農村集落と推定しておきたい。　（酒井）



第14図　吉倉B遺跡中世掘立柱建物の時期別配置

参考文献

安念幹倫　1993　「シンポジウム古代荘園遺跡が語るものー越中の荘園遺跡を中心としてー」資料集　富山考古学会

池野正男　1988　「射水丘陵における９・10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号　富山考古学会

岩倉節郎・上野　章　1985　「井波町大叢遺跡出土遺物の紹介」『大境』第９号　富山考古学会

酒井重洋　1993　「Ｖ吉倉Ｂ遺跡　４まとめ　(2)中世の遺構」『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)　任海遺跡・吉倉Ａ遺跡・吉倉Ｂ遺跡』富山県埋蔵文化財センター

笹沢　浩　1986　「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会会誌』51号　長野県考古学会

砺波市教育委員会　1978　『富山県砺波市栴檀野遺跡予備調査概要』

富山県　1976　『富山県史通史編Ⅰ　原始・古代』

富山県埋蔵文化財センター　1990　「栗山権原遺跡・南中田Ａ遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田Ｃ遺跡』富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ

富山県埋蔵文化財センター　1991　『富山県富山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1992　「吉倉Ｂ遺跡」『平成３年度　富山県埋蔵文化財センター年報』

富山県埋蔵文化財センター　1993　「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)　任海遺跡・吉倉Ａ遺跡・吉倉Ｂ遺跡』

富山市教育委員会　1987　『長岡杉林遺跡』

富山市史編纂委員会　1987　『富山市史　通史〈上巻〉』

富山市教育委員会　1989　『富山県総合運動公園内遺跡群試掘調査概要』

富山大学考古学研究室　1989　『越中上末窯』富山大学考古学研究報告第３冊　富山大学人文学部考古学研究室

富山県教育委員会　1980　「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第２次緊急発掘調査概要』

富山県福光町・医王山文化調査委員会　1993　「医王山文化調査報告書　医王は語る』

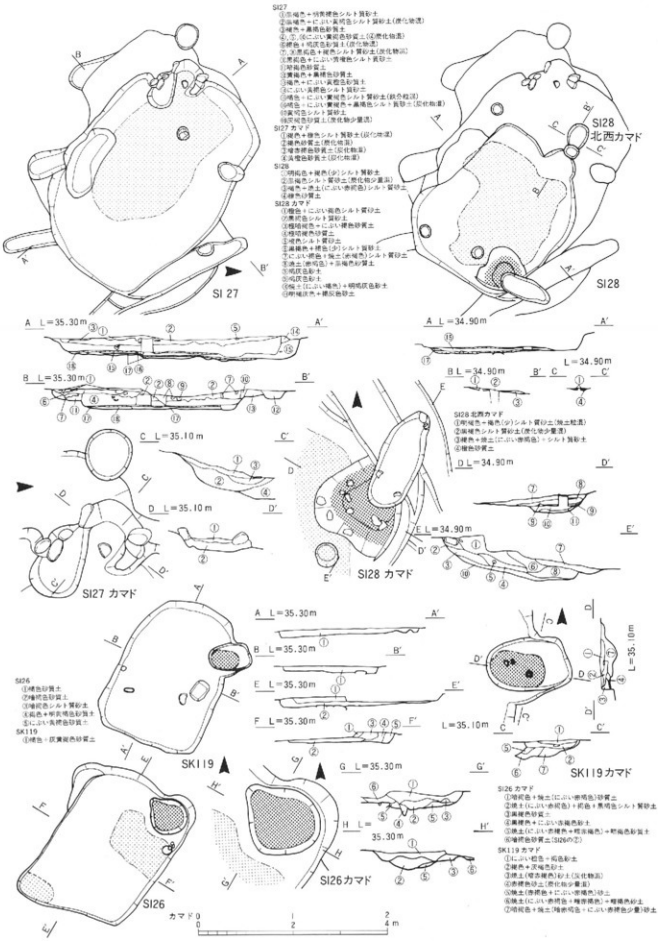
新潟県教育委員会・和島村教育委員会　1993　『平成５年度新潟県和島村八幡林遺跡』現地見学会資料

北陸中世土器研究会　1992　「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

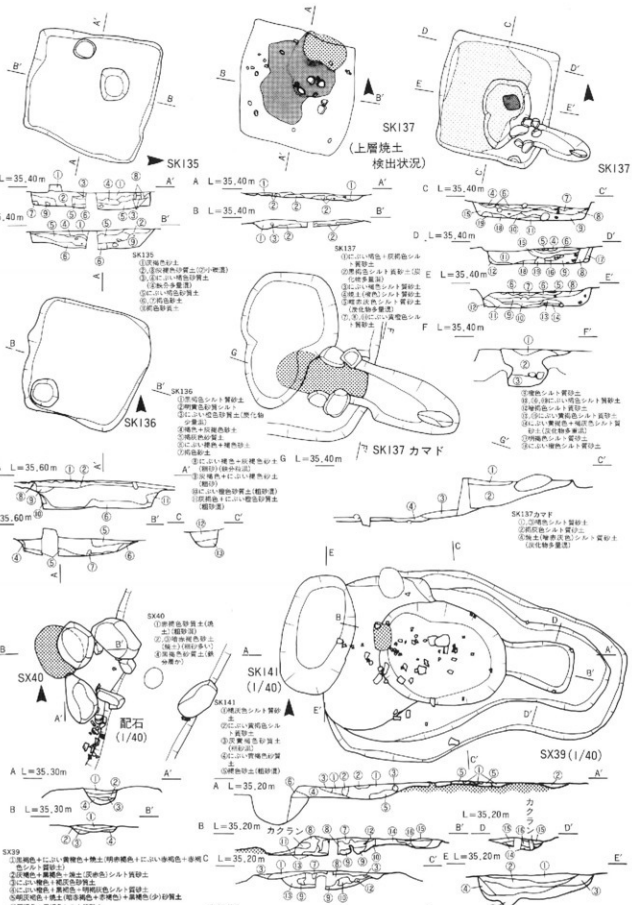
北陸中世土器研究会　1993　「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」

森　隆　1992　「平安時代の磁器型窯業生産」『貿易陶磁研究』12号　日本貿易陶磁研究会

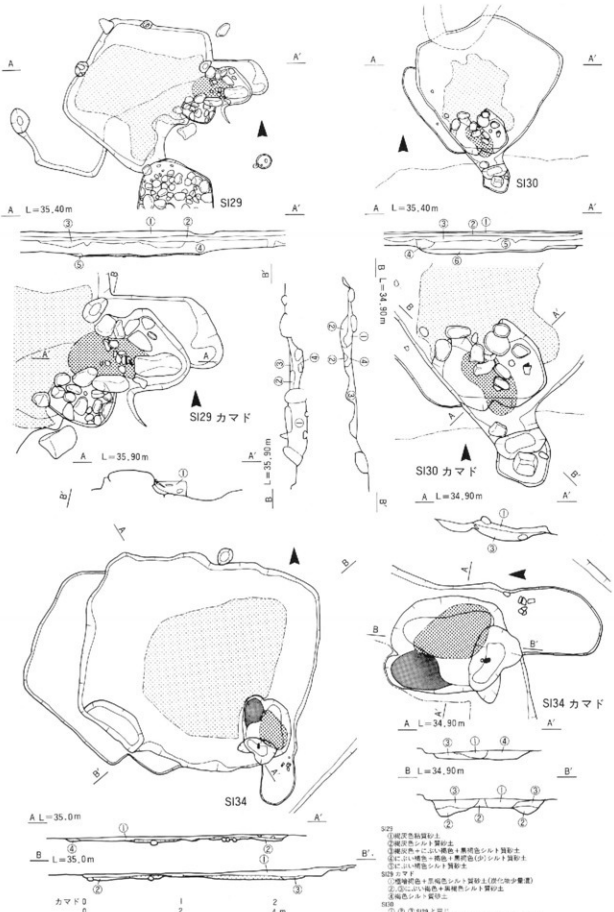
山本直人　1986　「石川県における古代・中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』第29号　石川考古学研究会


SI 27
SI28
SI28 北西カマド
SI27 カマド
SI28 カマド
SI26
SI26カマド
SK119
SK119カマド
A L=35.30m
B L=35.30m
C L=35.10m
D L=35.10m
E L=35.30m
F L=35.30m
G L=35.30m
H L=35.30m
L=35.10m
A L=34.90m
B L=34.90m
C L=34.90m
D L=34.90m
E L=34.90m
カマド 0 1 2
0 2 4m

第15図　遺構平面図


SK135
SK137
(上層焼土
検出状況)
SK137
SK136
SK137 カマド
SK40
配石
(1/40)
SK141
(1/40)
SX39 (1/40)
SX40
SK141
SK137
SK136
SK137カマド
SX39
カクラン
カマド
A L=35.40m
B L=35.40m
C L=35.40m
D L=35.40m
E L=35.40m
F L=35.40m
G L=35.40m
A L=35.60m
B L=35.60m
A L=35.30m
B L=35.30m
A L=35.20m
B L=35.20m
C L=35.20m
E L=35.20m
カクラン
カマド
0 1 2 m

第16図　遺構平面図



第17図　遺構平面図

SI29カマド
①にぶい黄橙色＋黒褐色シルト質砂土(焼合粗混)　②灰褐色シルト質砂土(焼合粗混)　③にぶい橙色＋焼土(暗赤褐色)シルト質砂土(焼合粗混)　④灰褐色＋暗赤色シルト質砂土(焼合粗混)

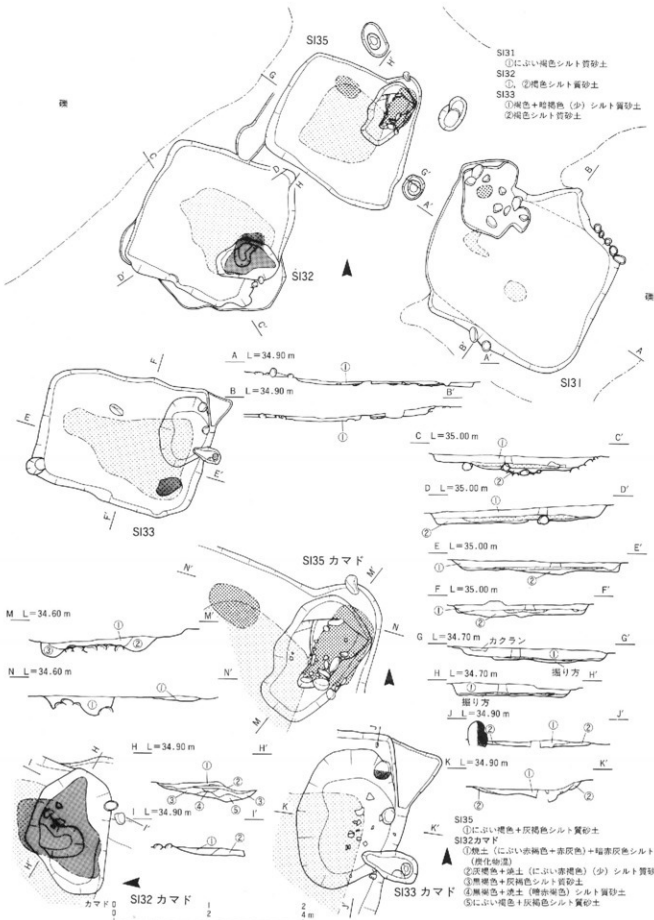
SI34
①にぶい黄橙色＋黒褐色シルト質砂土(焼合粗混)　②褐灰色砂土　③褐灰色＋焼土(明褐色＋にぶい赤褐色)砂質土

SI34カマド
①焼土(にぶい赤橙色)＋灰褐色砂質土　②黒褐色＋灰橙色砂質土(炭化物少量混)　③橙色＋灰褐色砂質土　④焼土(暗赤褐色)＋にぶい橙色砂質土

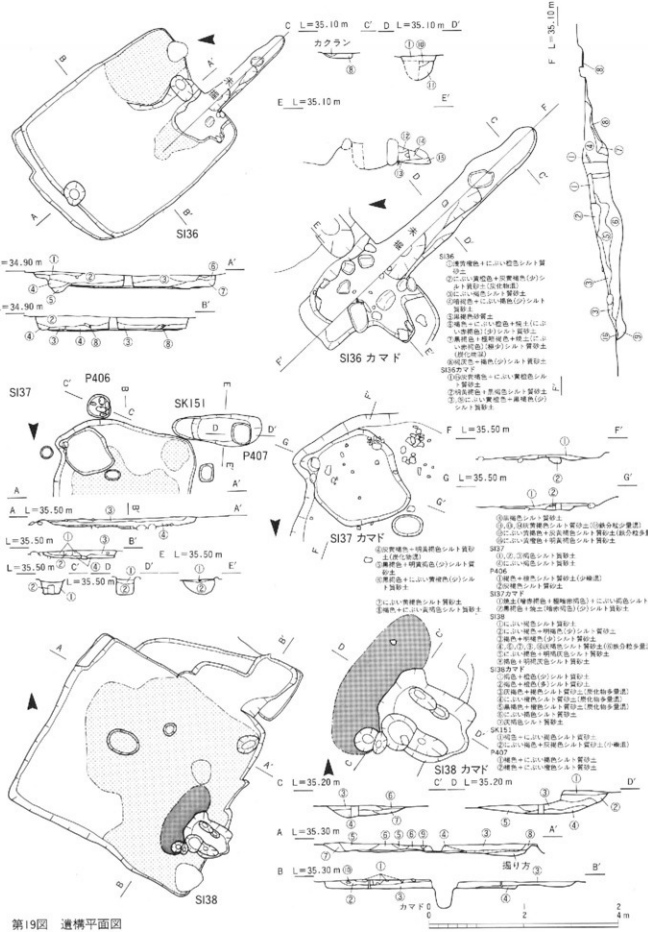
SI29
①褐灰色粘質砂土
②褐灰色シルト質砂土
③褐灰色＋にぶい橙色＋黒褐色シルト質砂土
④にぶい橙色＋黒褐色(少)シルト質砂土
⑤にぶい橙色シルト質砂土

SI29カマド
①暗褐灰色＋黒褐色シルト質砂土(炭化物少量混)
②.③にぶい橙色＋黒褐色シルト質砂土
④橙色シルト質砂土

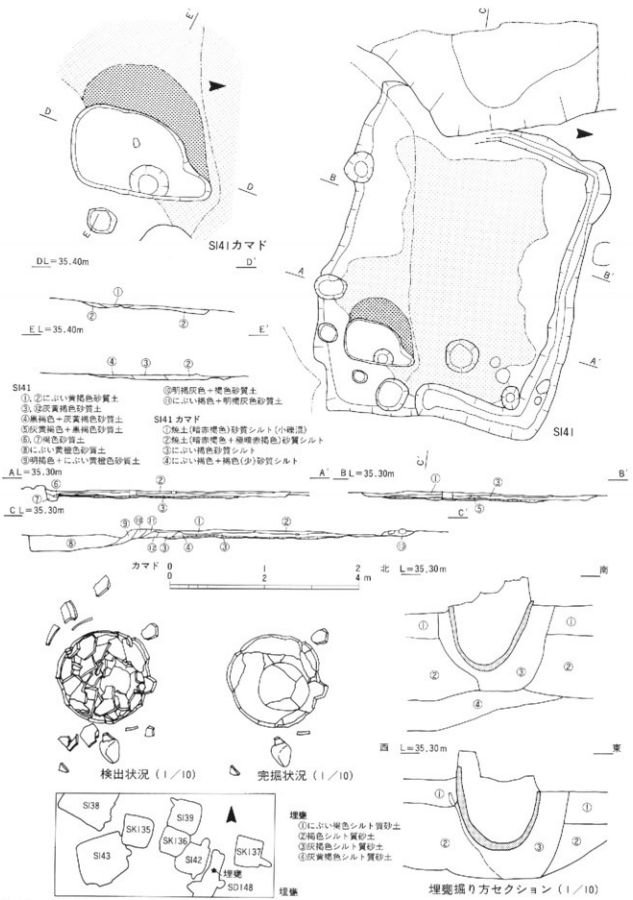
SI30
①.②.③ SI29 と同じ
④.⑤橙色＋黒褐色シルト質砂土(炭化物少量混)
⑥灰橙色シルト質砂土



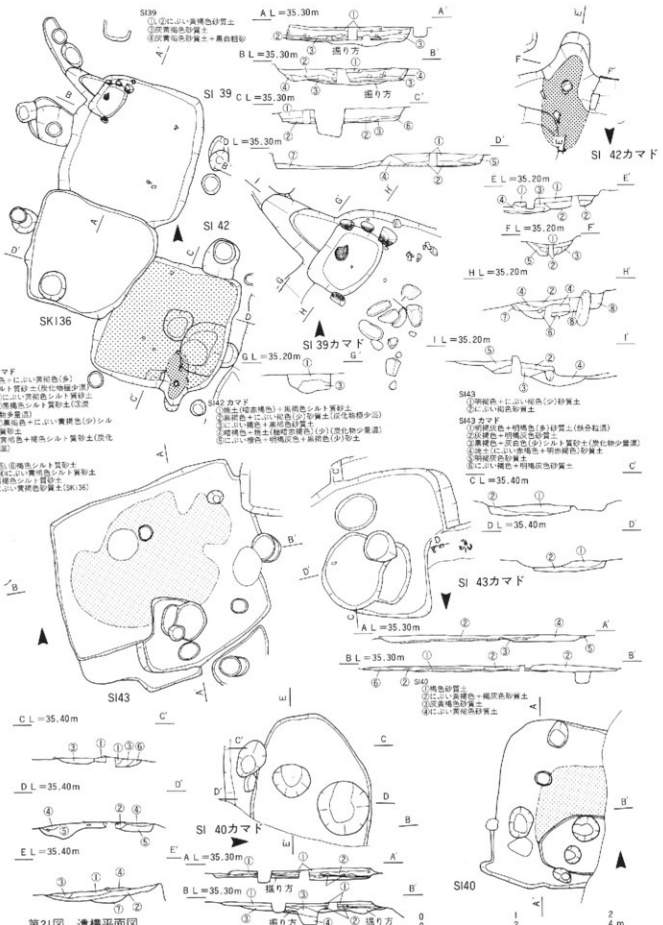
第18図　遺構平面図　SI33カマド
①焼土（暗赤褐色）＋暗褐色シルト質砂土（炭化物混）　②にぶい橙色＋灰褐色シルト質砂土
SI35カマド
①黒褐色＋焼土（橙色）（少）砂質土　②黒褐色＋褐色＋にぶい橙色砂質土　③暗褐色＋灰褐色＋にぶい橙色砂質土


SI36
SI36 カマド
SI37
SI37 カマド
SI38
SI38 カマド
SK151
P406
P407
掘り方
カマド
0
1
2
4m

第19図　遺構平面図

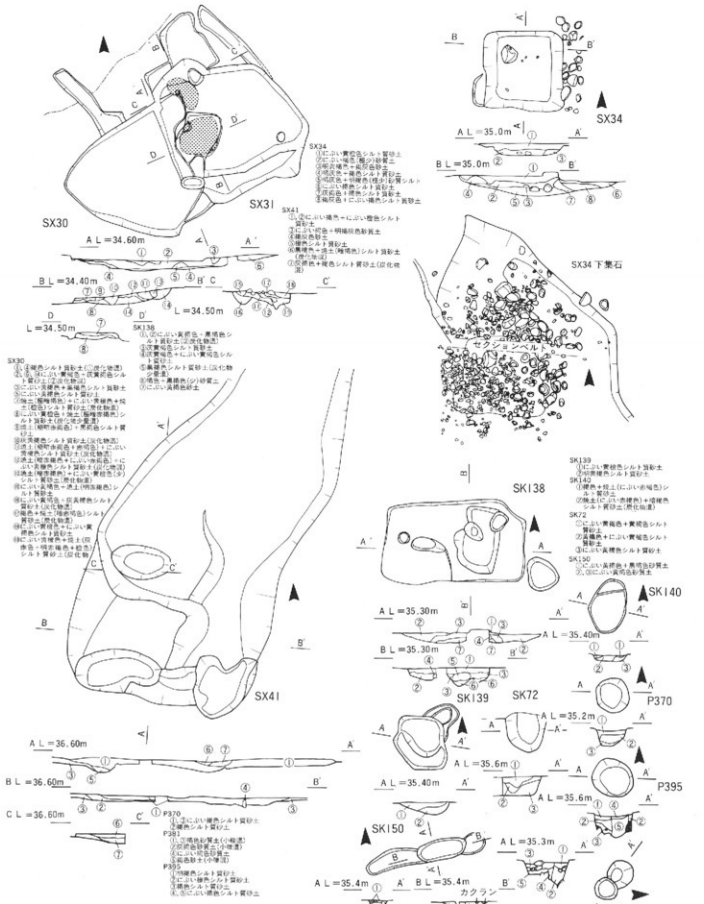

SI41カマド
DL=35.40m
EL=35.40m
SI41
①、②にぶい黄褐色砂質土
③、④炭黄褐色砂質土
④黒褐色＋炭黄褐色砂質土
⑤灰黄褐色＋黒褐色砂質土
⑥、⑦褐色砂質土
⑧にぶい黄橙色砂質土
⑨明褐色＋にぶい黄橙色砂質土
⑩明褐灰色＋褐色砂質土
⑪にぶい褐色＋明褐灰色砂質土
SI41カマド
①粘土（焼赤褐色）砂質シルト（小礫混）
②粘土（焼赤褐色＋焼暗赤褐色）砂質シルト
③にぶい褐色砂質シルト
④にぶい褐色＋褐色（少）砂質シルト
SI41
A L=35.30m
C L=35.30m
A' B L=35.30m
B'
C'
カマド
0 1 2m
0 2 4m
北 L=35.30m
南
検出状況（1／10）
完掘状況（1／10）
SI38
SI39
SI43
SKI35
SKI36
SI42
SKI37
埋甕
SD148
埋甕
西 L=35.30m
東
埋甕
①にぶい褐色シルト質砂土
②褐色シルト質砂土
③灰褐色シルト質砂土
④灰黄褐色シルト質砂土
埋甕掘り方セクション（1／10）

第20図　遺構平面図

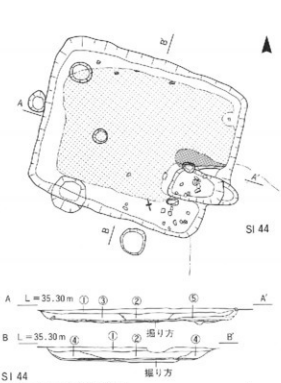


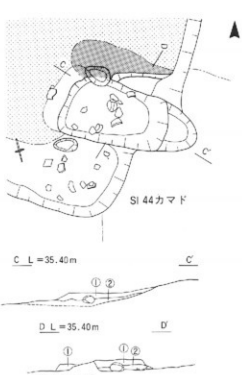
第21図　遺構平面図

SI40カマド
①焼土(暗赤褐色)＋にぶい焼色(極少)シルト質砂土　②焼土(にぶい赤褐色＋暗赤褐色)＋黒褐色砂土　③黒褐色シルト質砂土
④黒褐色＋焼土(暗赤褐色)(少)シルト質砂土　⑤極暗褐色＋褐色シルト質砂土(炭化物混)　⑥にぶい褐色＋極暗褐色(少)シルト質砂土
(炭化物少量混)　⑦明褐灰色＋焼土(にぶい赤褐色＋極赤褐色少量)砂土


SX30
SX31
SX34
SX41
SK138
SK139
SK140
SK150
SK72
P370
P381
P395
A L =34.60m
B L =34.40m
L =34.50m
A L =35.0m
B L =35.0m
A L =36.60m
B L =36.60m
C L =36.60m
A L =35.30m
B L =35.30m
A L =35.40m
A L =35.2m
A L =35.6m
A L =35.3m
A L =35.4m
B L =35.4m
セクションベルト
カクラン
0
2
4 m

第22図　遺構平面図

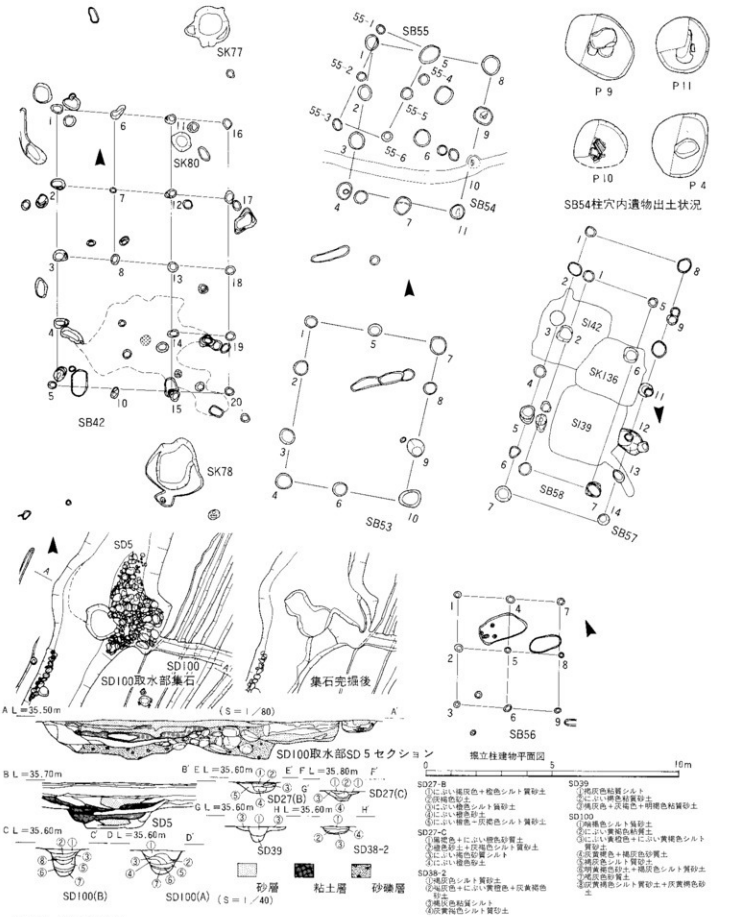




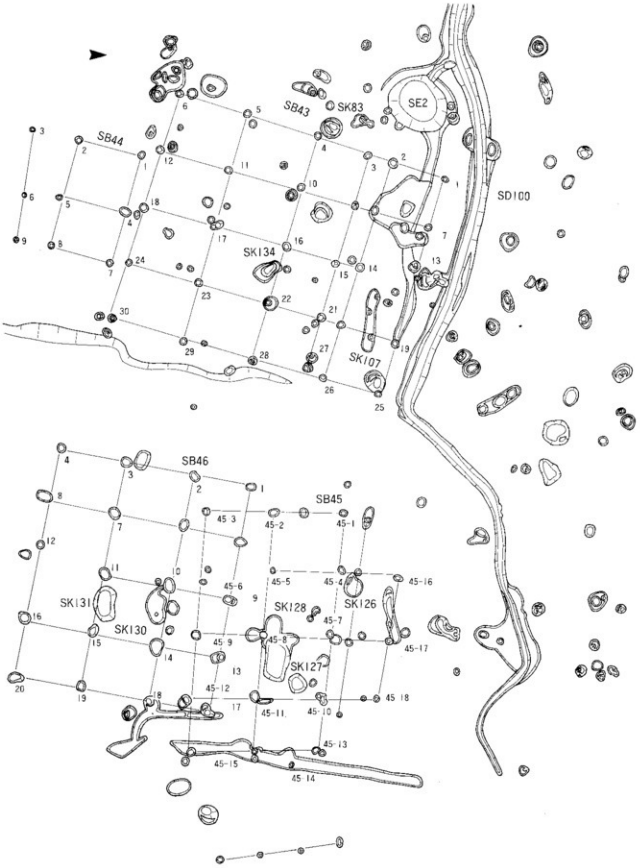
第23図　遺構平面図

住居番号	規模(m)	面　積	主軸方向	貼床	カマド位置	住居番号	規模(m)	面　積	主軸方向	貼床	カマド位置
SI 1	5.2×4.8	約25㎡	N-50°-W	有	東壁南寄り	SI26	3.1×2.2	約 7 ㎡	N-23°-E	有	北東隅
SI 2	3.8×4.1	約16㎡	N-80°-W	有	南東隅	SI27	3.4×4.2	約14㎡	N-51°-E	有	北西隅
SI3A	2.8×2.8	約 8 ㎡	N-7°-E	有	不明	SI28	2.6×3.4	約 9 ㎡	N-59°-E	有	北東隅
SI3B	3.6×3.0	約11㎡	N-78°-W	有	西壁中央	SI29	2.6×2.1	約 5 ㎡	N-60°-W	有	東壁北寄り
SI4	不明	不明	N-90°-E	有	東壁南寄り	SI30	2.5×2.3	約 6 ㎡	N-55°-W	有	南西隅
SI5	2.4×2.5	6 ㎡	N-80°-W	有	東壁南寄り	SI31	2.8×3.6	約11㎡	N-60°-W	有	東壁南寄り
SI6	5.6×6.6	約34㎡	N-75°-W	有	東壁北寄り	SI32	2.9×2.8	約 8 ㎡	N-70°-W	有	南壁東寄り
SI7	不明	不明	不明	有	不明	SI33	3.2×2.5	約 8 ㎡	N-75°-W	有	南壁東寄り
SI8	3.5×4.1	約14㎡	N-25°-E	有	東壁中央	SI34	4×4.6	約18㎡	N-7°-E	有	南東隅
SI9	不明	不明	不明	有	不明	SI35	2.7×2.4	約 6 ㎡	N-60°-W	有	南壁西寄り
SI10古	不明	不明	N-65°-W	有	西南隅	SI36	3.5×3.1	約11㎡	N-40°-W	有	南壁西寄り
SI10新	3.7×2.2	約 8 ㎡	N-65°-W	有	西壁南寄り	SI37	不明	不明	N-95°-E	有	東南隅
SI11古	不明	不明	不明	有	不明	SI38	4×4.2	約17㎡	N-53°-E	有	東壁南寄り
SI11新	2×2	4 ㎡	N-30°-E	有	南壁東寄り	SI39	3×2.6	約 8 ㎡	N-85°-E	無	北西隅
SI12	4.4×4	18㎡	N-0°-E	有	東壁東寄り	SI40	不明	不明	N-95°-E	有	東壁南寄り？
SI13	3.2×2.8	9 ㎡	N-70°-W	有	北東隅	SI41	5.1×6.4	約33㎡	N-5°-E	有	南壁東寄り
SI14	不明	不明	不明	有	不明	SI42	2.6×2.6	約 7 ㎡	N-19°-E	有	南壁東寄り
SI15	2.8×3.4	約10㎡	N-15°-E	有	南西隅	SI43	3.1×4.5	約14㎡	N-78°-W	有	東壁南寄り
SI16	不明	不明	N-0°-E	有	不明	SI44	3.4×4.2	約14㎡	N-78°-W	有	東壁南寄り
SI17	不明	不明	N-78°-E	有	東壁南寄り	SK119	3.2×2.2	約 7 ㎡	N-30°-W	有	北東隅
SI18	4×5	20㎡	不明	有	不明	SK135	2.7×2.6	約 7 ㎡	不明	無	—
SI19	3×3	9 ㎡	N-28°-W	?	南東西寄り	SK136	2.5×2.6	約 7 ㎡	不明	無	—
SI20	不明	不明	不明	有	東壁北寄り	SK137	2.5×2.4	約 6 ㎡	N-102°-W	有	東壁南寄り
SI21	不明	不明	不明	有	不明						
SI22	不明	不明	不明	有	不明						

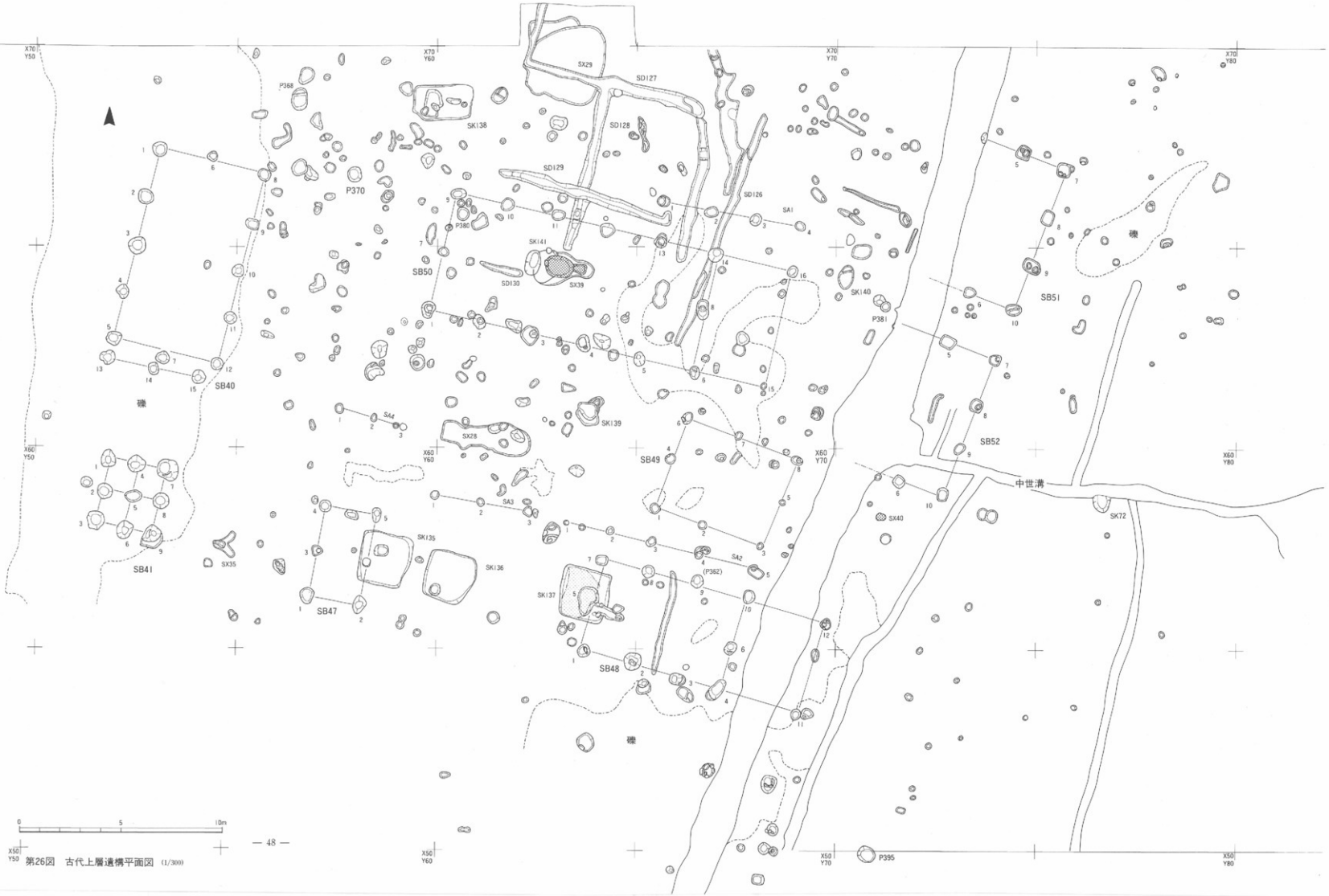
表 6　吉倉 B 遺跡竪穴住居一覧


SK77
SK80
SB42
SK78
SB55
SB54
SB53
P 9
P11
P10
P 4
SB54柱穴内遺物出土状況
SI42
SK136
SI39
SB58
SB57
SB56
SD5
SD100
SD100取水部集石
集石完堀後
SD100取水部SD 5 セクション
掘立柱建物平面図
SD27(B)
SD27(C)
SD39
SD38-2
SD100(B)
SD100(A)
砂層
粘土層
砂礫層

第24図　遺構平面図

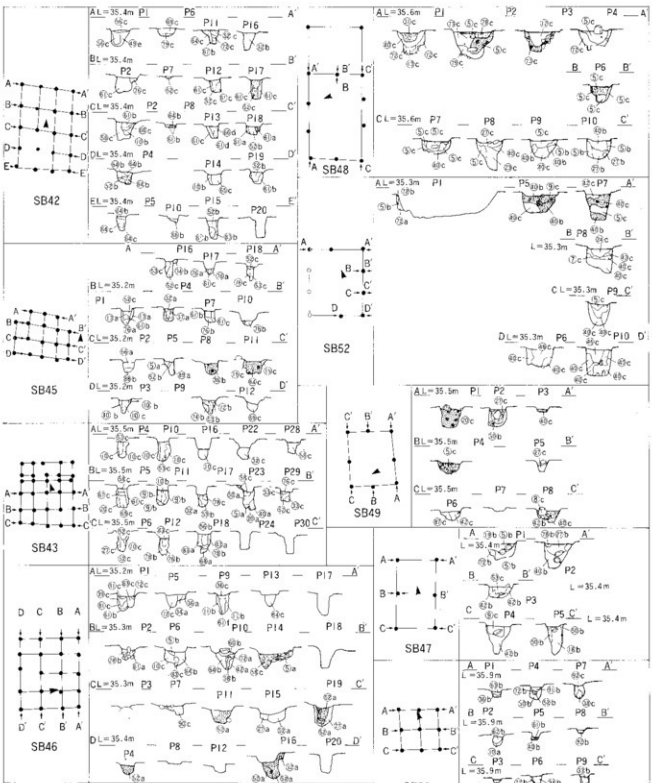


第25図　遺構平面図（1／150）

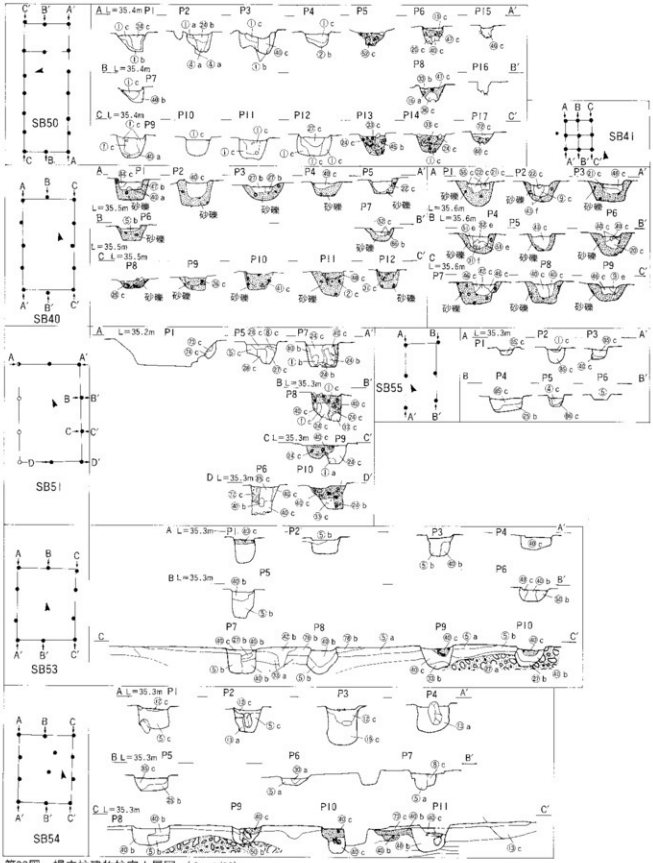

X70 Y50
X70 Y60
X70 Y70
X70 Y80
X60 Y50
X60 Y60
X60 Y70
X60 Y80
X50 Y50
X50 Y60
X50 Y70
X50 Y80
P368
P370
SK138
SX29
SD127
SD128
SD129
SD126
SA1
P380
SK141
SD130
SX39
SB50
SK140
P381
SB51
礫
SB40
SA4
SX28
SK139
SB49
SB52
中世溝
SA3
SX40
SK72
SK135
SK136
SA2
(P362)
SB41
SX35
SB47
SK137
SB48
P395
0
5
10m
第26図　古代上層遺構平面図 (1/300)

第27図　古代下層遺構平面図 (S 1/150)

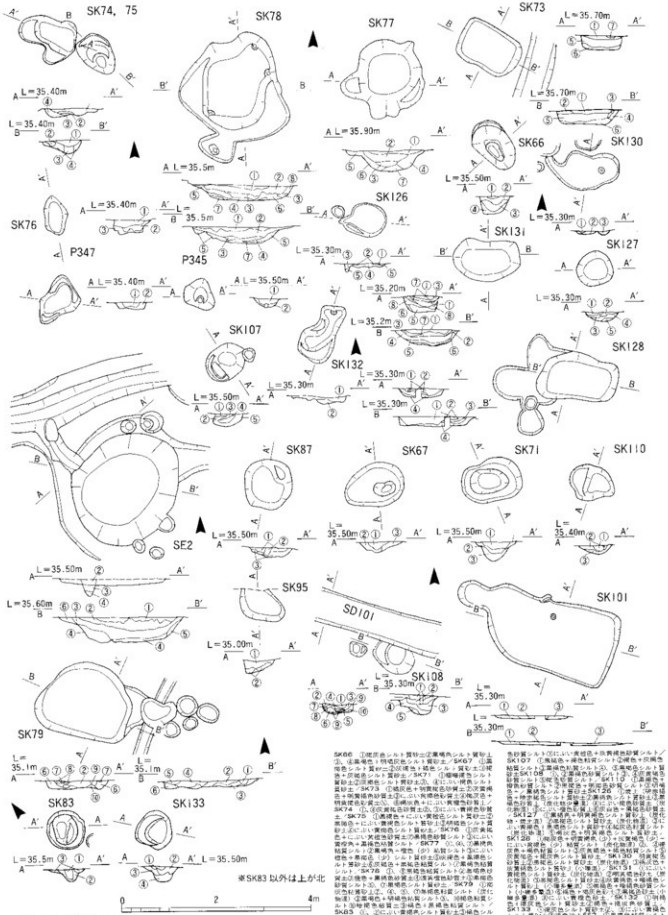
第28図　古代上層遺構平面図　(S＝1/150)



第29図　掘立柱建物柱穴土層図（S＝1／80）

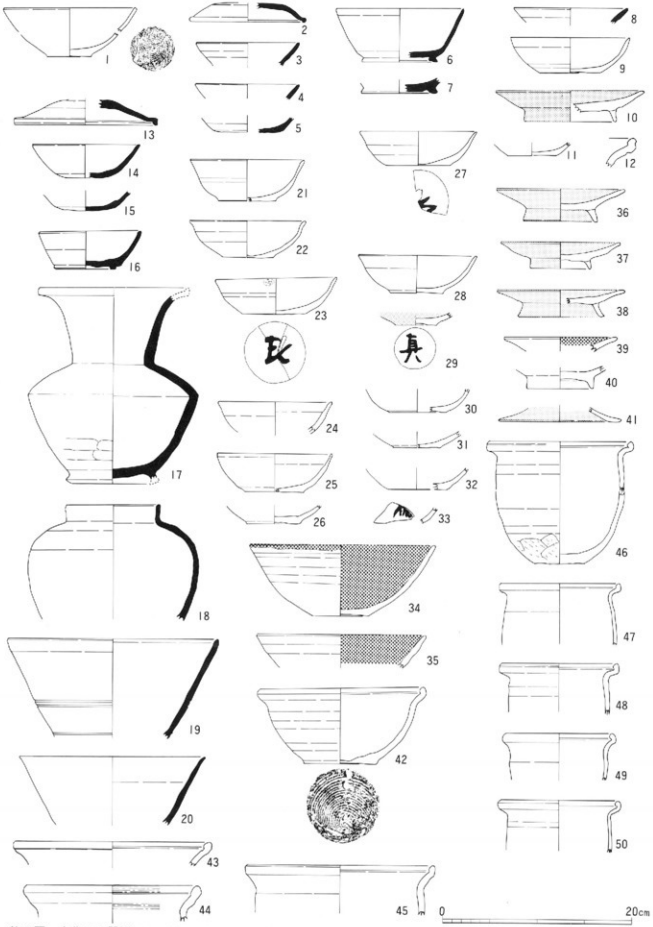


第30図　掘立柱建物柱穴土層図（S＝1/80）

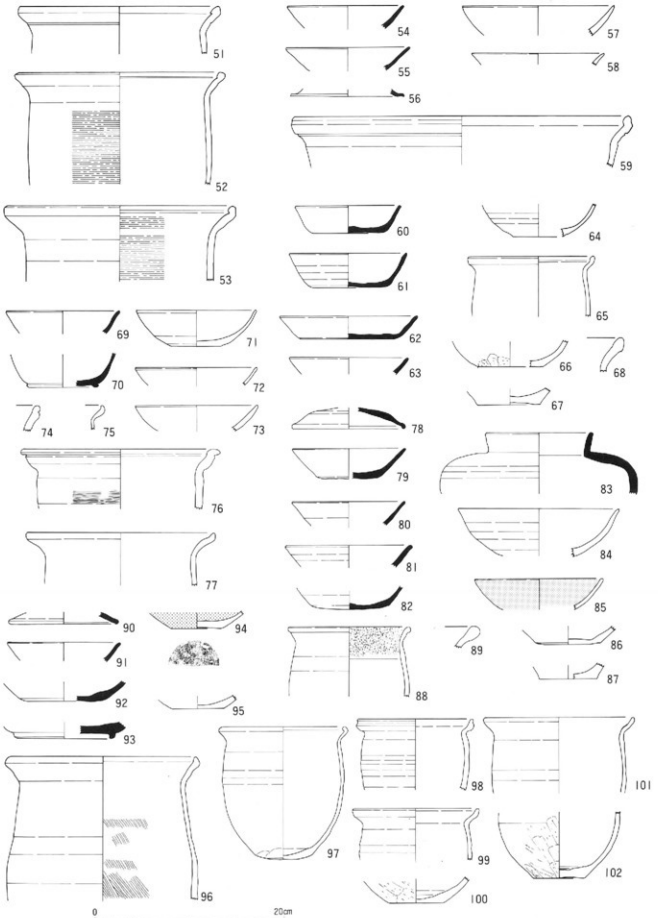


SK66 ①暗灰色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土 ③、④黒褐色＋明褐色粘質シルト質粘土／SK67 ①黒褐色シルト質粘土②灰褐色粘土 ③、④灰褐色シルト質粘土②灰褐色シルト質粘土／SK71 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK73 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK76 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK78 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色＋明褐色粘質シルト質粘土／SK87 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK95 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK101 ①暗灰色＋黒褐色粘質シルト②黒褐色＋灰褐色粘質シルト／SK107 ①黒褐色＋明褐色粘質シルト②明黄褐色シルト質粘土／SK110 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK126 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK127 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK128 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK130 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK131 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK132 ①暗黄褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK133 ①暗黄褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／P345 ①黒褐色シルト質粘土②明黄褐色シルト質粘土／P347 ①黒褐色シルト質粘土②明黄褐色シルト質粘土／SE2 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK79 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK83 ①、②にぶい黄褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK87 ①、②黒褐色＋明褐色シルト質粘土／SK95 ①暗灰色シルト質粘土②明黄褐色シルト質粘土／SK101 ①暗灰色＋黒褐色粘質シルト②黒褐色＋灰褐色粘質シルト／SK107 ①黒褐色＋明褐色粘質シルト②明黄褐色シルト質粘土／SK108 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK110 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK126 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK127 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK128 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK130 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK131 ①黒褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK132 ①暗黄褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／SK133 ①暗黄褐色シルト質粘土②黒褐色シルト質粘土／P345 ①黒褐色シルト質粘土②明黄褐色シルト質粘土／P347 ①黒褐色シルト質粘土②明黄褐色シルト質粘土

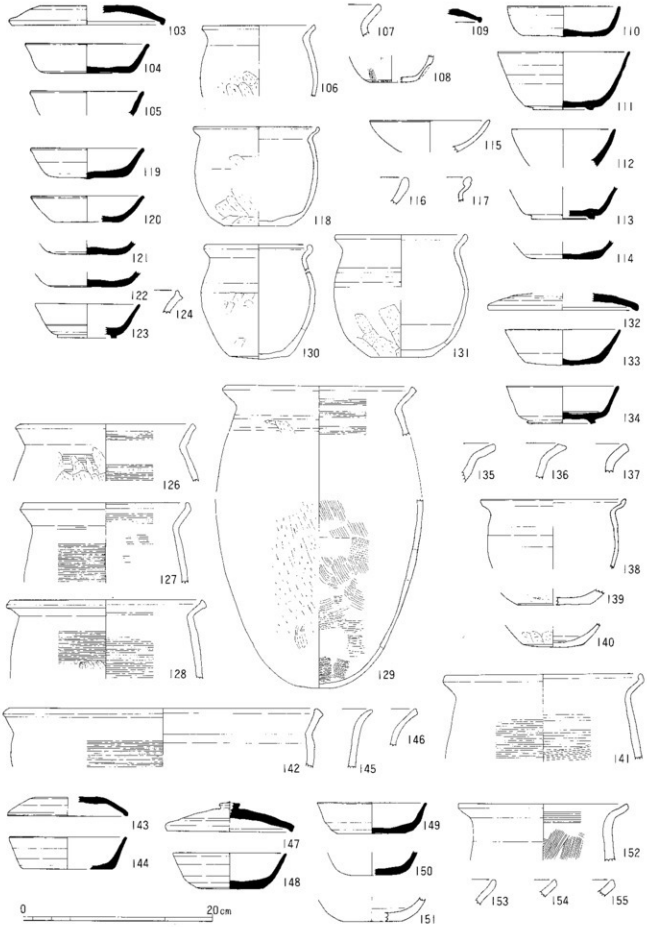
第31図　遺構平面図



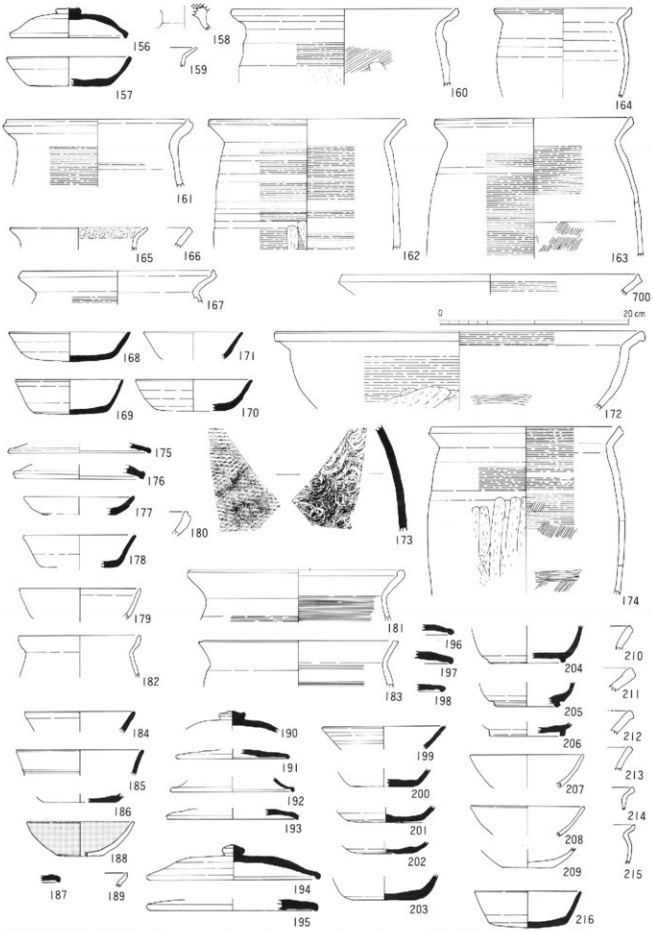
第32図　古代の土器(1)　SK-119(1), SI-26(2~12), SI-27(13~50)



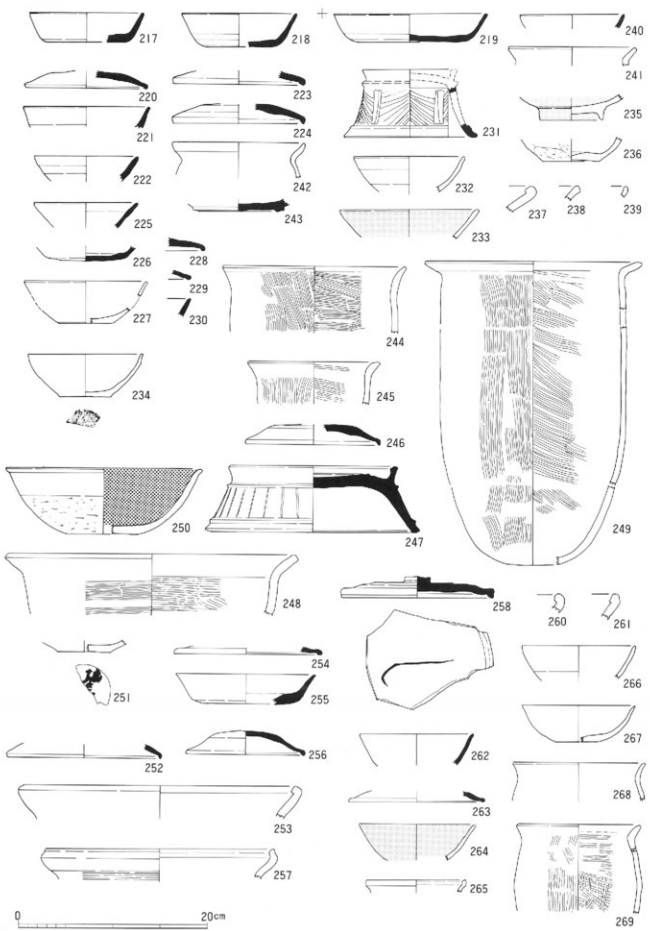
第33図　古代の土器(2)　SI-27(51～53), SI-28(54～58), SI-27・28(59), SI-29(60～61), SI-30(62～68), SI-31(69～77), SI-32(78～89), SI-33(90～102).



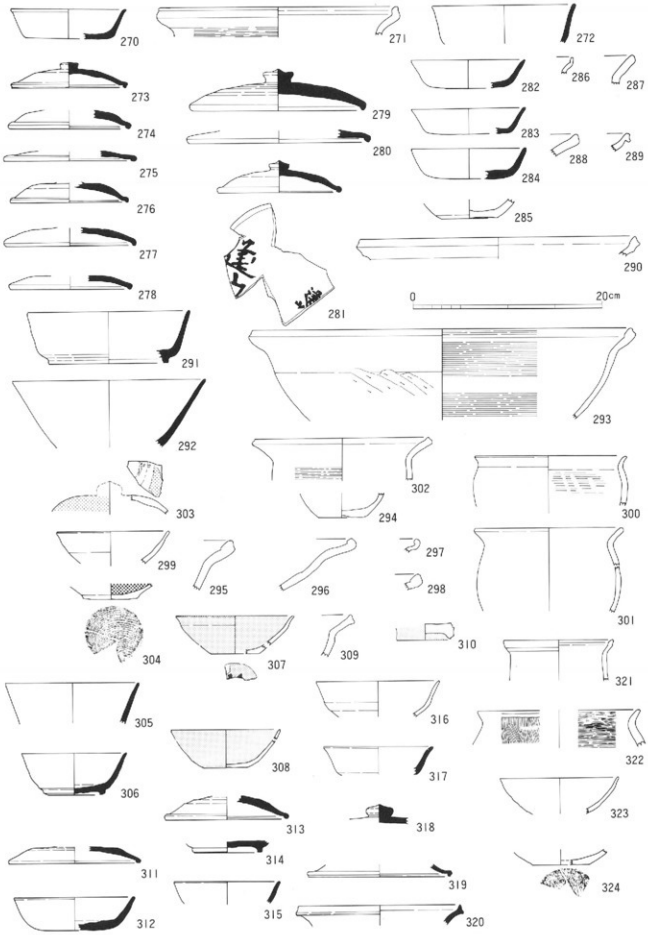
第34図　古代の土器(3)　SI-34(103～108)，SI-35(109～117)，SI-36(118～131)，SI-39(132～135)，SI-37(136～141)，SI-38(142～144)，SI-41(145・146)，SI-42(147～155)



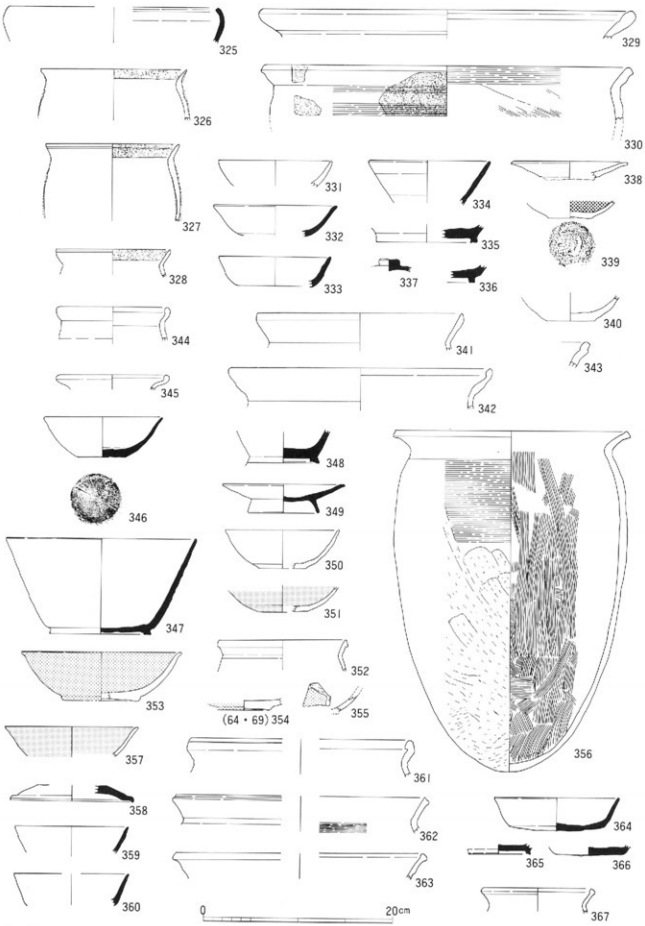
第35図　古代の土器(4)　SI-40(156～164)、SI-43(165～167)、SI-44(168～174)、SK-135(175～180、182)、SK-136(184～189)、SK-137(190～215)
SK-139(216)、SI-42(700)、SK-96(181)、SI-148(183)、



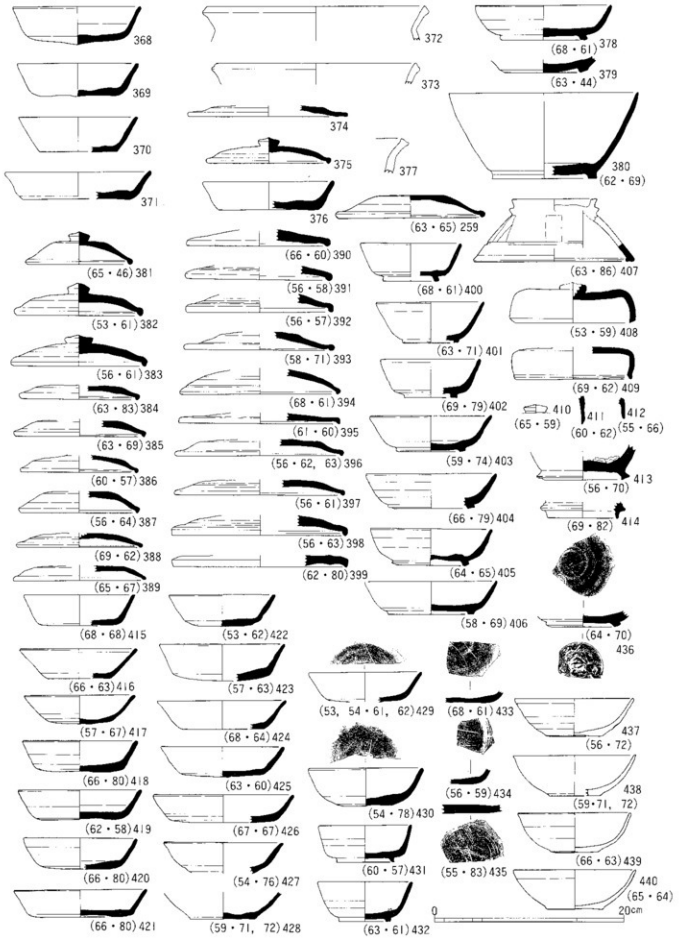
第36図　古代の土器(5)　SI-45(217～219)，SB-60(220～221)，SB-61(223・224)，SB-48(222・225～230)SB-50(231～233・235～238)，SB-51(239～241)SB-47(242)，SB-53(243・244)，SB-54(245～249)，SD-39・SD-5(250)，SK-72(251)，SK-75(252・253)，SK-78(254・255)SK-96(256～257)，SK-90(258)，SK-91(260)，SK-101(261)，SK-111(262)，SK-113(263・266)，SK-121(264)，SK-138(265)SK-141(267)，SK-144(268)，SX-41・SK-143(269)，SA-2P2(234)



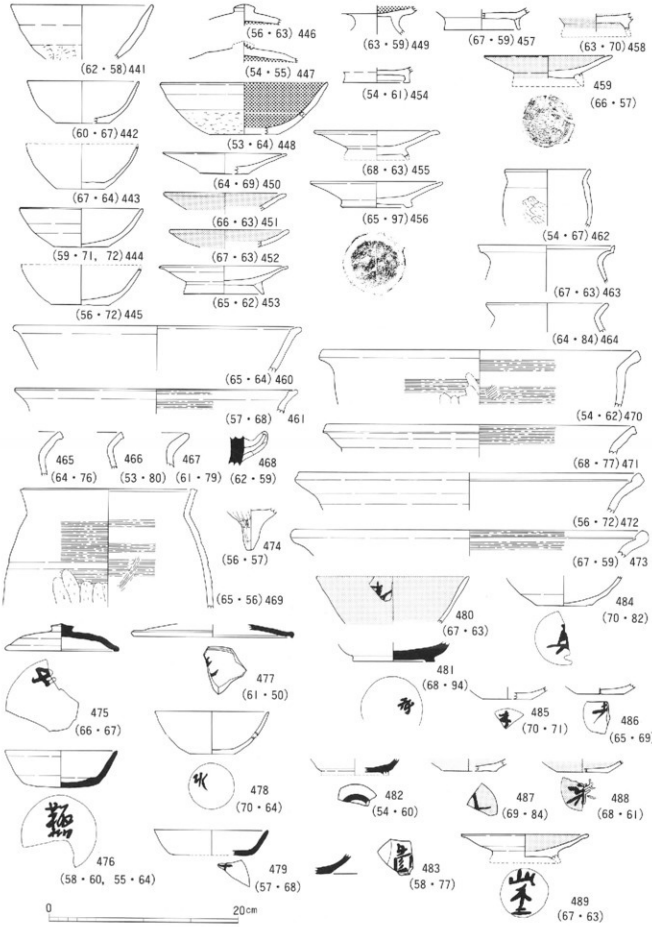
第37図　古代の土器(6)　SX-11(270)、SX-16(271)、SX-17(272)、SX-29(275～299)、SX-30(291)、SX-39(292～296・303・304)、SX-31(300)、SX-41(301・302)、P-282(305)、P-263(306～308)、P-291(309)、P-306(310)、P-276(311)、P-277(312)、P-292(313・314)、P310(315)、P302(316)、P-313(317)、P-341(318)、P-349(319)、P-368(320)、P-306(321)、P-311(322)、P-362(323)、P-401(324)、SX-39(303)



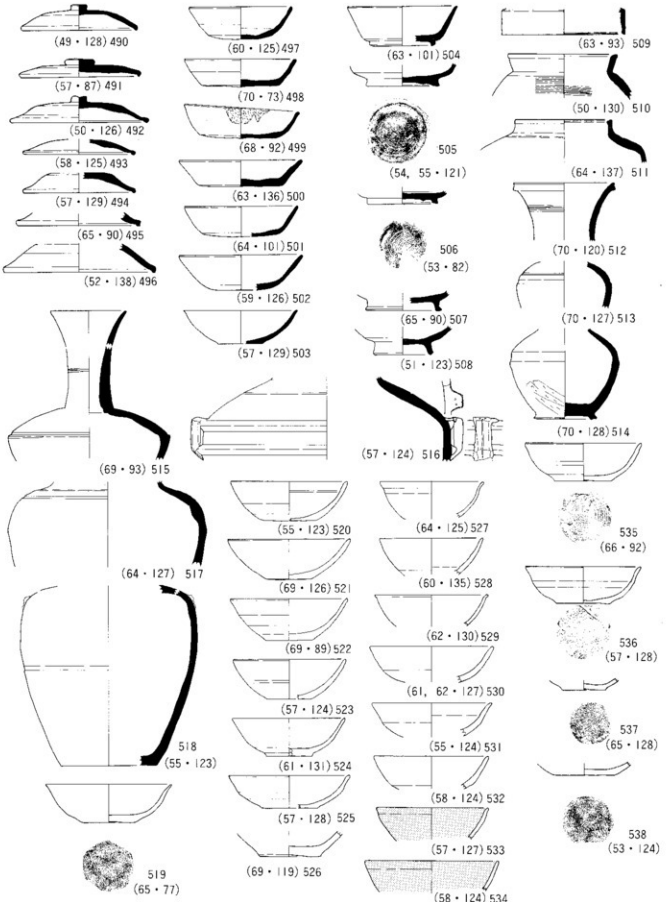
第38図　古代の土器(7)　P-447(325)、P-448(326)、P-467(327)、P-416(328)、P-380(329)、P-470(330)、SF1-20(331・332)、SF1-3(333)、SF1-4(334)、SF1-24(335)、SF1-7(336)、SF2-9(337)、SF2-18(338)、SF2-2(339)、SF2-5(340・341)、SF2-4(342・343)、SF2-21(344)、SF2-16(345)、包含(346～353・428)、SD-5(355)、SD-148(356)、SD-98(357)、SD-101(358)、SD-128(359)、SD-129(360・363)、SD-111(361)、SD-116(362)、SD-132(364～366)、SD-135(367)



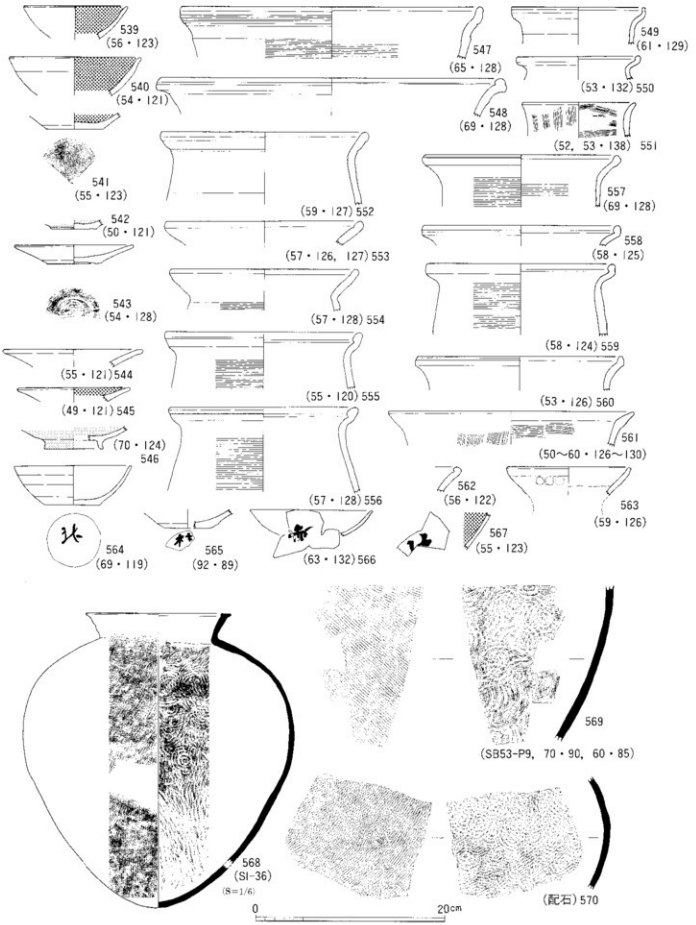
第39図　古代の土器(8)　SD-139(368～373), SD-148(374～377)


(62・58)441
(56・63)446
(63・59)449
(67・59)457
(63・70)458
(54・55)447
(54・61)454
459
(66・57)
(60・67)442
(53・64)448
(68・63)455
(67・64)443
(64・69)450
(65・97)456
(54・67)462
(59・71，72)444
(66・63)451
(67・63)452
(67・63)463
(56・72)445
(65・62)453
(64・84)464
(65・64)460
(57・68)461
(54・62)470
465
(64・76)
466
(53・80)
467
(61・79)
468
(62・59)
(68・77)471
(56・72)472
474
(56・57)
(67・59)473
(65・56)469
480
(67・63)
484
(70・82)
481
(68・94)
477
(61・50)
485
(70・71)
486
(65・69)
475
(66・67)
478
(70・64)
482
(54・60)
487
(69・84)
488
(68・61)
476
(58・60，55・64)
479
(57・68)
483
(58・77)
489
(67・63)
0
20cm

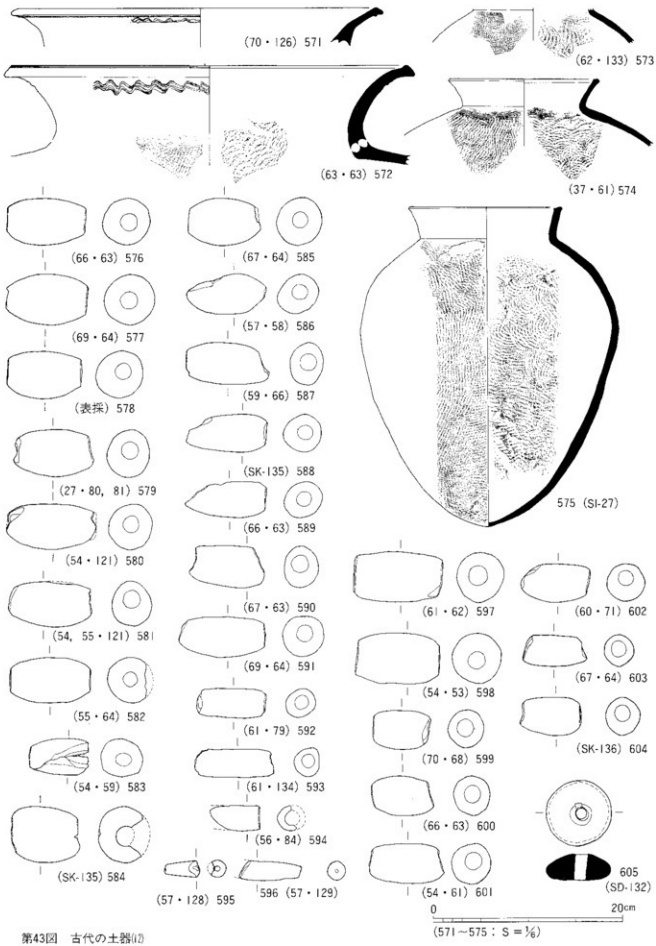
第40図　古代の土器(9)



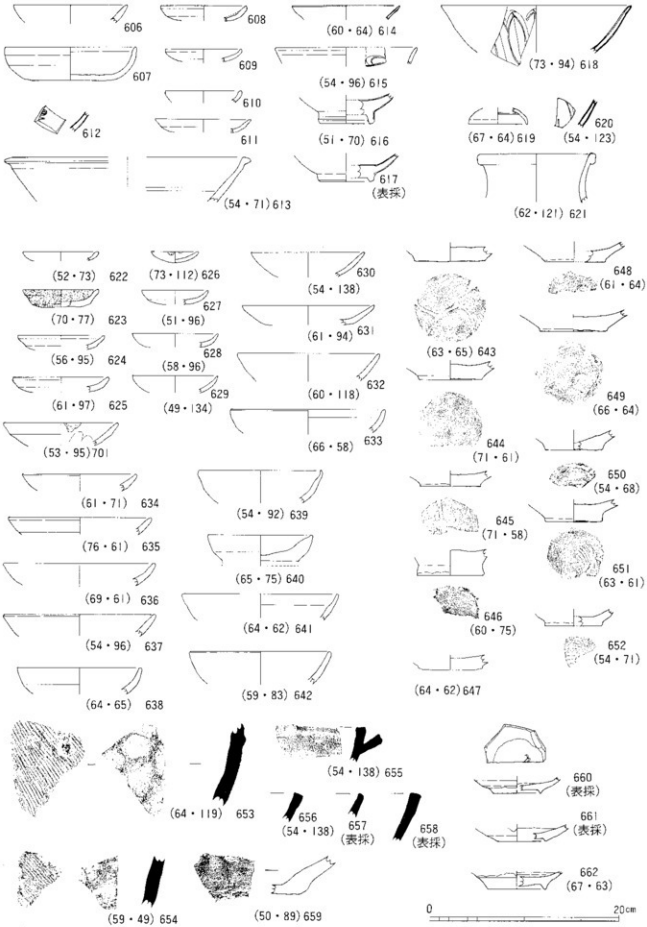
第41図　古代の土器(10)



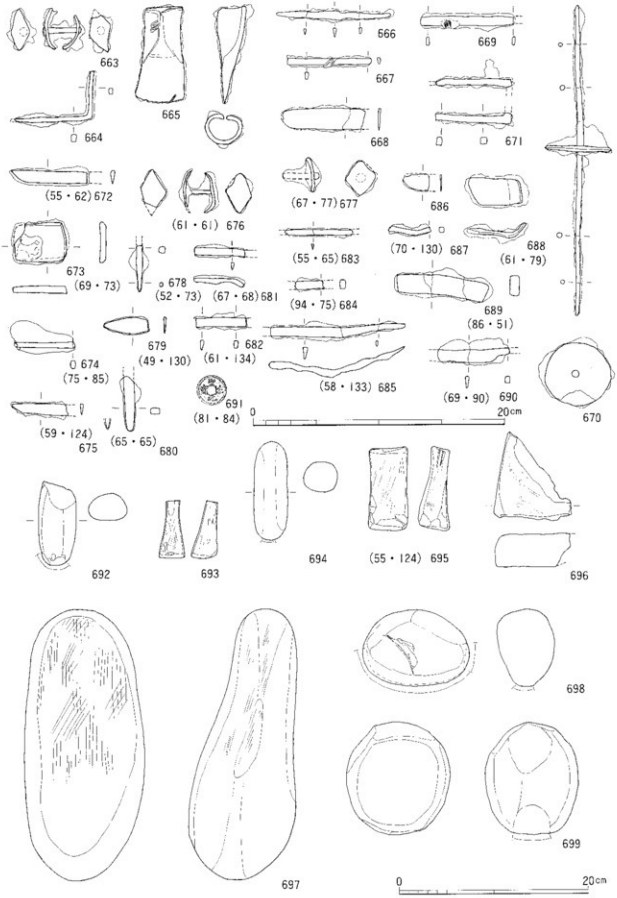
第42図　古代の土器(II)



第43図　古代の土器(12)



第44図　中世の土器 SK-78(606)、SK-127・128(607)、SB-46P5(608)、SK-128(609、610)、SK-107(611)、SK-131(612)



第45図　古代・中世の金属製品 (1/3)，石器 (1/4)

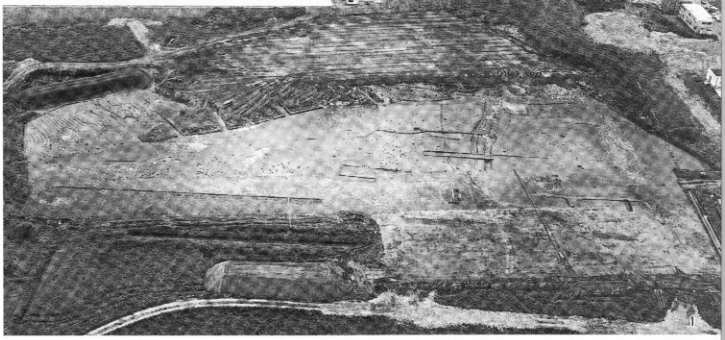
SI-27(663・664)，SI 28(665・666・686)，SI 33(667)，SI 34(668)，SI-44(669)，SI-44(670)，SK-79(671)
SI-27(692・693)，SI-36(694)，SI 40(696)，SI-37(697)，SK-137(698・699)

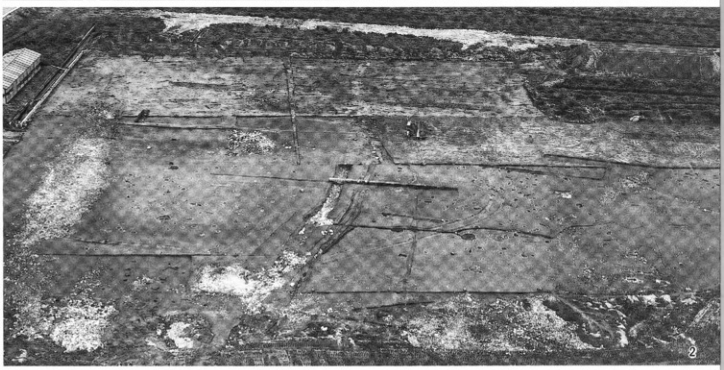
報告書抄録

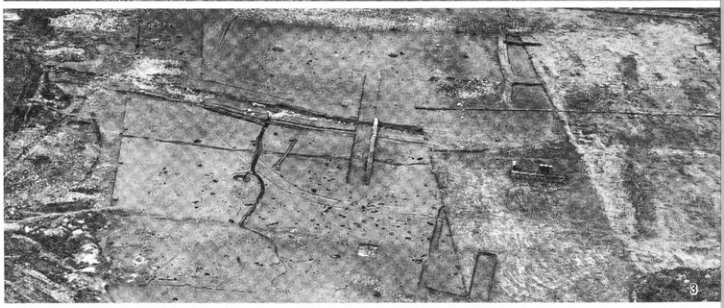
ふりがな 書名	とやまけんそうごうんどうこうえんないいせきはっくつちょうさほうこく(4)　よしくらBいせき 富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)　吉倉B遺跡
編著者名	酒井重洋・久々忠義・境洋子・越前慶祐
編集機関	富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-01　富山県富山市茶屋町206-3
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
吉倉B遺跡	富山県富山市吉倉	201	504	36度 37分 26秒	137度 11分 55秒	19930601 ～ 19931216	7,340㎡	県総合運動公園建設に伴う事前調査

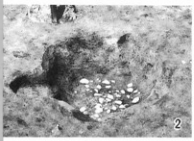
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉倉B遺跡	集落跡	奈良・平安時代	掘立柱建物　13棟 竪穴住居　23棟 溝　20条 その他　土坑など	土師器（含　赤彩・内黒）須恵器、墨書土師器・須恵器、円面硯、緑釉陶器、土錘、製塩土器、土師質土器 珠洲、瀬戸、八尾、越前、青磁、白磁、鉄製品（刀子、紡錘車、菱形金具、鉄滓）	**奈良・平安**　県運動公園内遺跡の一連の調査で当地域は、相当数の竪穴住居を検出してきたが、今年度はそれに加えて意図的に配置された掘立柱建物群を検出 **鎌倉・室町**　一連の調査で溝で区画された掘立柱建物群を検出してきたが、今年度の調査区においても同様に確認 大溝から小溝を引き分水した水を取り入れる溜め井戸を1基検出
		鎌倉・室町時代	掘立柱建物　7棟 井戸　1基 土坑　120基 溝　30条 その他　穴など		

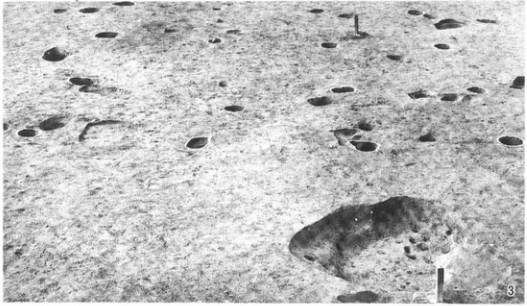


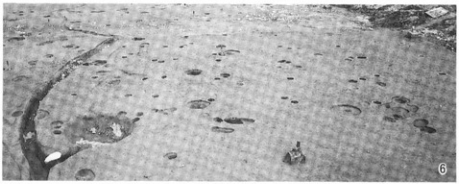


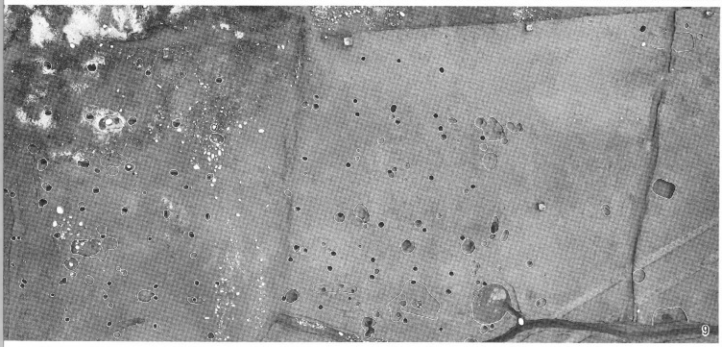


写真図版1　1．全景(北より)　2．中世西側ブロック(南より)　3．中世西側ブロック(東より)

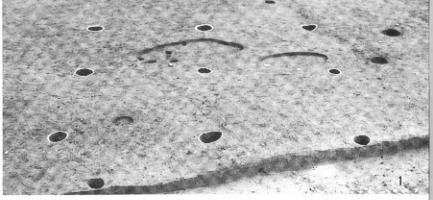


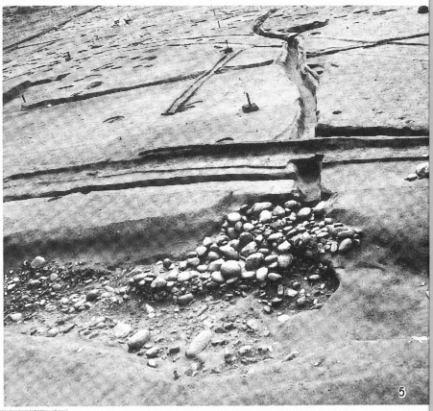


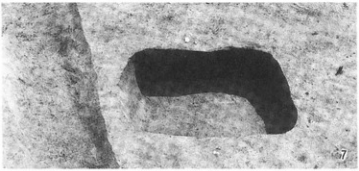


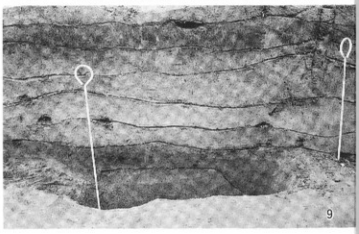


写真図版 2　1．SK78(北より)　2．SK77(南より)　3．SB42(南より)
4．SE2(北東より)　5．SE2 東西セクション(南より)　6．SB43(西より)
7．SK127・128(西より)　8．SB45・46(北より)　9．SB43・44・45・46ブロック

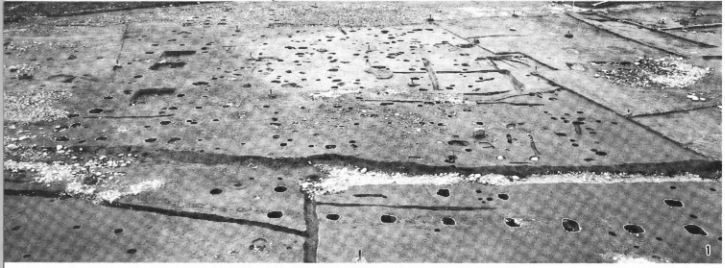


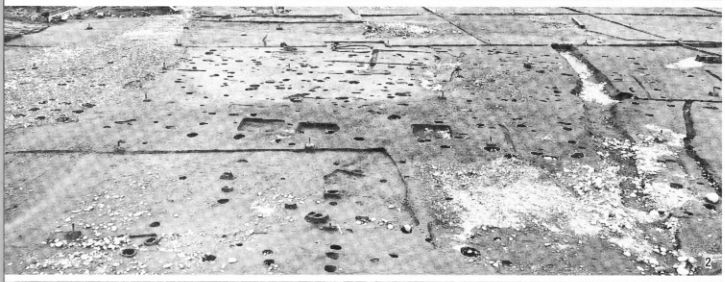


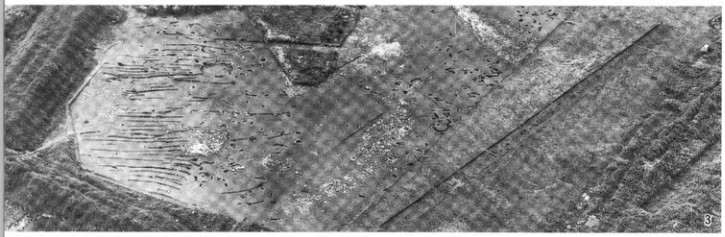


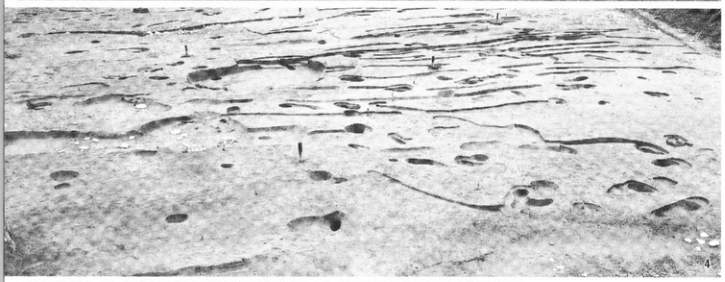


写真図版 3　1．SB56(南より)　2．SD5・38・39(北より)
3．SD100 取水部　SD5 東西セクション(南より)　4．SD100A セクション(西より)
5．SD100 取水部(西より)　6．SD100 取水部集石除去後(南西より)
7．SK73(北より)　8．北側土坑群(西より)　9．基本層序

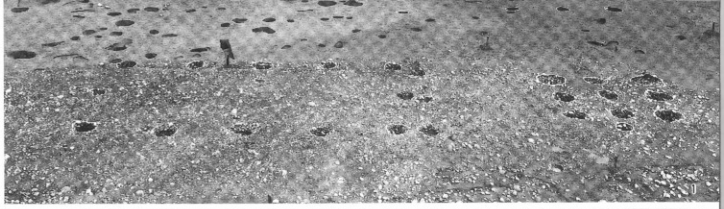


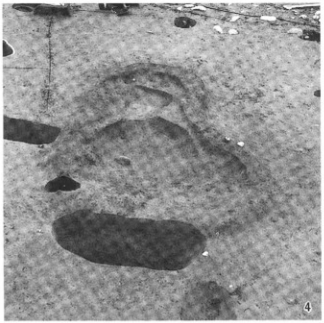


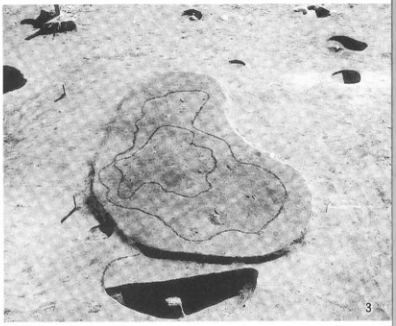


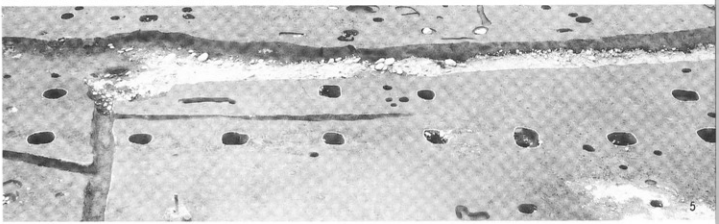


写真図版 4　1．古代上層西側掘立柱建物群（東より）　2．古代上層西側掘立柱建物群（南より）
3．古代上層東側竪穴住居群、サク状遺構（北より）　4．古代上層東側竪穴住居群、サク状遺構（南西より）









写真図版5　1．SB40・41(西より)　2．SB50、SX39、SA1(東より)
3．SX39焼土検出状況(西より)　4．SX39焼土(西より)　5．SB51・52(東より)